特253
885

岩波編輯部編

國語

學習指導の研究（改訂版）

卷八（一三—一七）

岩波書店

始

特253
885

目次（第三分冊）

一三 浮火……阿部次郎（ケルン）譯……三八二
一四 人間ゲーテ……茅野蕭々……四一九
一五 言靈……井上毅……四三七
一六 大和民族の固有性……五十嵐力……四五五
一七 彫刻と自然……高村光太郎（ロダン）譯……四七七

岸的宗教（例へばピュタゴラスの）をその哲學的考察の中に採り容れて居るが、彼は更に後に至つて世界を支配せる彼岸的宗教（基督教）の教義の建設の主要なる助力者となつた。プラトンなくば思辨的神學も唯心論的哲學もないであらう。主觀的にしろ客觀的にしろ兎も角も精神的なるものをこの世界に於ける眞乎の實在たると同時に眞乎の價値あるものとなす所の一切の哲學は、プラトンの道を歩めるものである。認識論に於ける一切の先天說、形而上學に於ける一切の唯心論、道德に於ける超絕性（Transcendenz）は何れも皆プラトンより出でてプラトンに歸るものたらざるはない。

獨り彼の後代に及ぼしたる影響のみならず、彼の前代に對する關係も亦彼の史的偉大を示すことは、已に說いた如くである。彼は實にヘラクレイトス、アナクサゴラス（アナクサゴラスのヌウスの精神的性質は彼に於て確定せられ、前者に萌したる目的論的見方は彼に於て鮮かなる形を取つた）パルメニデス、ピュタゴラス學派より重要なる諸思想を取り來り、此等を渾一し、而も之を全然彼の鑄型に熔して、そのあらゆる部分に於て彼の人格の刻印を捺した。ソクラテス以前の文獻は多く今日に存しないが、その乏しい殘簡から見ても、彼自身の力によつて哲學がその方法の嚴密に於て、その問題の深化に於て驚くべき飛躍をなしたことは疑はれない。ソクラテス以前の最良の書といへども、我等のいふ學術的なる點に於ては遙にプラトンの背後に退くべきものである。〔下略〕

一三　淨火

一　解題

一　本文

フリッツ・ケルンの "Dante. Einführung in die Göttliche Komödie." の大意抄譯である「神曲入門」の「三煉獄」から抄出した。「神曲入門」は阿部次郎著「地獄の征服」の附錄として收載せられてある。（地獄の征服　昭和八年十二月、岩波書店發行）

「地獄の征服」はゲーテの「ファウスト」とダンテの「神曲」とに關する研究を盛つた論文集で、ヨーロッパ文化の最も勝れた解釋者・批評者としての作者の面目を傳へる業績の一である。

二　作者

フリッツ・ケルン(Fritz Kern)。ドイツの歴史家。西暦一八八四年九月南獨ウィルテンベルヒの首府シュツッツガルトに生まれ、一九一四年フランクフルト大學の教授、一九二三年ボン大學の教授となつた。中世・近世その他の歴史・文學等に關する論著が多い。

阿部次郎（あべじろう）は、明治十六年八月山形縣飽海郡上郷村に生まれた。三十三年山形中學校から東京の京北中學校に轉じ、翌年第一高等學校に入學、高山樗牛の晩年の諸論、上田敏の「文學論集」等に興味を持ち、又大いにゲーテ・トルストイ・イブセン・シラー等の作品を讀んだ。三十七年東京帝國大學文科大學に入り、哲學・文學等を修め、傍ら小山内薫等と雜誌「帝國文學」の編輯に當り、四十年卒業した。四十二年以後夏目漱石の門に出入し森田草平・小宮豐隆等と交り、文藝・哲學等に關する評論に力を注ぎ、又雜誌「ホトトギス」等に創作を發表した。大正六年雜誌「思潮」の主幹となつて翌年末に及び、九年幸田露伴・沼波瓊音・安倍能成等と芭蕉研究會を起し、その研究の集積を刊行した。十年東北帝國大學に新設の法文學部教授として赴任、翌年文部省在外研究員としてヨーロッパに渡航、各地を周歴して十二年歸朝、現に同大學教授である。

早くよりゲーテ・ダンテ等の研究に力を注ぎ、又、美術に造詣が深かつた。著書には「三太郎の日記」「美學」「人格主義」「倫理學の根本問題」「北郊雜記」「學藝論鈔」「德川時代の藝術と社會」「ニイチェのツァラツストラ解釋並に批評」「世界文化と日本文化」等があり、その他文藝・哲學關係の譯書がある。

三　採擇の趣旨

前課がヨーロッパに於ける古代文化の一代表的偉人の思想であつた後を承けて、本課には、その中世文化を代表する偉大な詩篇の紹介を揭げることにした。これによつて世界的文藝に眼を開かせ、宗教的道德的精進に貫ぬかれた中世文化の特質を把握させ、更に日本的なるものの位置と意義とを發見し自覺させようとする。文藝的教材であり、文化的教材である。

二　教材としての研究

一　註解

【淨火】　ジャウクヮ　罪を淨（きよ）める爲の火。きよめの火。

本課は、ダンテの「神曲」に描かれた淨罪界に關する記載であるが、この淨罪界は、「煉獄」とも「淨火」とも譯されてゐる。

（「淨火」の名は、この山島の頂（いただき）を仰ぐ火のあるのに基づく。巻（巻考資料一・二・三參照）

【南半球】　ミナミハンキウ　地球を南北に切半して考へる場合の南半分。こゝは、「神曲」の世界構造に於ける南半球をさす。

【神曲」世界構造図

「神曲」によると、地球は南北の兩半球に分かれ、北半球は聖地イェルサレムをその中心として陸地より成り、南半球はすべて海水で覆はれ、その中心に、煉獄即ち淨火の山島が突出してゐるのである。（參考資料二參照）

【一つの島】　煉獄（淨火）の山島。

この島は三つの部分に分かたれてゐる。一は海濱より煉獄の門（淨火の門）に至るまでの山麓で、死に至るまで悔い改めなかつた者達が入門の期を待つ處、即ち煉獄前界（淨火前界）。次は煉獄の門より頂近くまでの山腹で、これを繞る七地帶より成り、この山の主要部を成し、こゝで教會の教義に基づいて分類された所謂七大罪（怠慢・嫉妬・憤怒・貪欲・暴食・放逸・高慢）が淨められる。最後は山上の平地で、地上の樂園の在る處である。（參考資料二參照）

【一つの高き山】　こゝは、島の中央に聳える煉獄の山（淨火の山）、即ち海邊より上の部分をさしてゐる。

【思ふまゝなる天の近み】 思ふ存分天に近い所。

〔天〕 heaven(英) 天國。キリスト教では、時代や教派により種々の解釋があるが、舊教に於ては、天空にあつて神・天使等の住む世界で、人の死後その救はれた靈魂が昇つて住まふべき樂園を意味した。卽ち、「地獄」又は「煉獄」の對。こゝは、「神曲」に於ける天堂界(Paradiso)をさす。(參考資料一・二參照)

【幸福の園、地上の樂園】 幸福の園である地上の樂園、の意。

〔地上の樂園〕 チジャウのラクエン　煉獄を經て罪を淨められた魂が天堂界への飛躍の前提として行く處で、煉獄の山の頂にある常春の園。敎會の古說では地球の東方最高の山嶺に在りとした。これを煉獄の山頂に置いたのはダンテの創意である。

「樂園」―(一)安樂な場所。苦患のない場所。極樂境。パラダイス(paradise)。(二)特に、エデンの花園。

【アダム】 Adam　舊約聖書に於ける人類の始祖。語義は「赭色」又は「土壤」で、舊約聖書創世記(一の二十六、五の五)によると、神が地の塵をとつてつくり、その鼻より生命を吹き入れた。彼はエデンの園を監視することを命ぜられ、又多くの動物を支配した。神は又彼の肋骨をとつてエバ(イヴ)を作り、彼の妻とした。彼等はエデンの園の木の實の中、善惡を知る智慧の木の實だけは食ふことを禁ぜられてゐたが、エバが蛇の爲に誘はれてこの禁斷の木の實を食ひ、アダムにも食はしめた。その爲に二人はエデンを放逐され、以後は勞作して食を得なければならなくなり、又エバは出産の苦痛を與へられ、その子孫たる人類はすべてこの宿命的勞苦を負はねばならぬことになつた。アダムは、カイン・アベル・セツの三子を得、九百三十歲で死んだ。

【餓ゑ渴く】 ウゑカワく　こゝは、非常に欲しく思ふ、渴望する、の意。

マタイ傳、五の六「餓渴ごとく義を慕者は福なり」

【門戶】 モンコ　こゝは、煉獄の門(淨火の門)、卽ち聖ペテロの門をさす。

煉獄前界より段丘に上る所にある。その前に改悔の三要素を象徵する三つの段階がある。第一段は白い大理石(心の鏡)、第二段は粗い燒石(罪の告白)、第三段は赤い斑岩(行の鏡)より成つてゐる。門前には聖ペテロに託されて煉獄の門の開閉を掌つてゐる天使がゐる。彼は金の鍵(キリストの血によつて人類の罪に開はれた門を開く力を示す)と銀の鍵(門を開くことを乞ふ者に對する同樣力を示す)によつて、前記の階段を上つて來る者の爲に門を開いてやる。然し鍵が少しでも合はない場合にはこの狹い門は容易に開かない。又一旦門内に入つても、後を振返る者は外に返される。聖ペテロを煉獄の門の主としたのは、マタイ傳十六の十九に、キリストがペテロに告げた言葉に「われ天國の鍵を爾に予へん云々」とあるによる。

【七段の段丘】 煉獄で淨罪すべき七罪を象徵する段丘で、輕い罪ほど上に配せられ、その修煉と懺悔の爲の苦業も上昇するに從つて輕くなる。(參考資料二・三參照)

〔段丘〕 ダンキウ　河岸又は湖海の沿岸に生成した階段狀の地形。河道の變遷、水量・水位の變化、陸地の周期的隆起等によつて生じ、河成段丘・湖成段丘・海岸段丘の別がある。但しこゝは、煉獄の山を繞る七段の帶狀の地をいふ。

【巡禮】 ジュンレイ　「順禮」とも書く。(一)宗教上の目的で聖地・靈場を巡拜すること。この習慣は、それ等の靈場に參詣すれば功德を受け冥福を得るといふ信仰に發したもので、諸宗教・諸民族を通じて古くから行はれ、印度のバラモン教徒のベナレス參拜、佛教徒の四大靈場(釋迦誕生地・佛陀成道地・佛陀涅槃地・佛陀入滅地)巡拜、キリスト教徒のベツレヘム及びイエルサレム參拜及び列教者の墓の巡拜、回教徒のメッカ參詣などが名高い。我が國での靈場參拜は平安朝頃より始り、眞言宗の四國八十八箇所の巡禮等が最も著名である。(二)聖地・靈場の巡拜者。我が國では、普通、笈摺をつけ、菅笠を戴き、脚絆・甲掛を著け、草鞋を穿き、御詠歌等を歌ひ、途中の門戶に物を乞ふ。西洋でも、中世以後は一定の制服を著け、徽章を帶び、頭巾・外套・杖・水筒等を持ち、帽子の前面の緣を折り返して冠つた。こゝは、宗教的な目的で遍歷する、といふほどの意。

【新なる勞苦を要求する】

第一段に於ては傲慢の罪に對して重い石を負ひ、第二段では嫉妬の罪に對して粗布を縫つて兩眼を縫ひ、第三段では怠慢・復讐心の罪に對して黑煙につゝまれ、第四段では懈怠の罪に對して斷えず疾走し、第五段では貪慾・浪費の罪に對して手足を縛して地に顏を俯し、第六段では貪食・美食の罪に對して渴と餓を忍び、第七段では色慾・邪淫の罪に對して焰の中を通ることを要求される。(參考資料二・三參照)

【新しく燃やさるゝ意欲】 その度毎に更新せられかき立てられる所の、煉獄の山の嶮峻を突破し罪惡を根柢から拔き去つて、遂に祝福の天國に上らうとする意欲。

〔意欲〕 イヨク　心の欲する所。何か得ようと欲求する心。

【登攀】 トウハン　のぼりあがること。よぢのぼること。

「攀」―よぢる。下から上の方へつかまりのぼる。つかまる。とりつく。

【この山は歡喜を以て云々】
山川丙三郎氏譯「神曲、淨火篇」第二十曲に次のやうにある。
（以下すべて山川氏譯に據る。）

このとき我は山の震ひ動くこと倒るゝ物に似たるを覺えき、是に於てかわが身恰も死に赴むく人の如く冷ゆげにラートナが天の二の目を生まんとて巢を營める時よりさきのデロといふともかく强くはゆるがざりしなるべし

ついではげしき喊聲四方に起れり、師卽ち我に近づき、わが導く間は汝恐るゝなかれといふ

至高處には榮光神にあれ。衆皆斯くいひゐたり、云々

【歡呼の歌】　クリソコのウタ　よろこびの歌。こゝは、キリスト降誕の時天使等の歌つたといふ「天上ところには榮光神にあれ　地には平安　人には恩澤あれ（ルカ傳二の十四）」の歌をさす。

【救はれた靈魂】　煉獄の山に於ける數々の試錬を受け、靈の淨化を完成して、遂に地上の樂園に到達し、神の救を受け得た靈魂。

〔靈魂〕　レイコン　人間の精神的・身體的諸活動の本源として考へられる實體的觀念。肉體から離れて存在すると考へられる精神現象。たましひ。こゝは、實體なくして、姿のみ見える存在としてダンテが想像した死者の靈をさす。

【自恣】　ジシ　自分の欲するまゝになすこと。わがまゝ。

【オデュッセウス】　Odysseus　ギリシヤ傳說中の人物で、智略を以て名があつた。ホーマーの「オヂッセイ」の主人公。イタケー島の王ラエルテースの子。トロヤ戰爭の際、ギリシヤ軍の將として十年間トロヤ城を攻圍し、遂に木馬の奇計によつて落城せしめた。その凱旋の歸途幾多の危難に遭ひ、キュクローペス族の一人の巨人ポリュフェーモスの爲に洞窟に幽閉せられて、辛うじて巨人の眼を潰して脫出したり、風神アイオロスの島に到つて風を入れた袋を與へられたり、魔女キルケの島では二十二人の部下を豚の姿にされ、使神ヘルメスの助により漸くこれを元の姿にしたり、セイレーネスの魔歌の誘惑を遁れる爲に部下の耳を蠟で塞ぎ、我が身を帆柱に縛したり、或は怪物カリブディスとスキラの棲む岩の峽間で六人の部下を掠はれたりして、艱難辛苦二十年の末本國に辿りついた。本國に於ては妻ペネロペが、その美貌と王位とを手に入れようとする貴族達に迫られて、大いに惱んでゐた所であつたが、オデュッセウスは我が子テーレマコス等と共に橫暴な求婚者等を殺して王位に復し、ペネロペの苦節も漸く報いられて、親子三人は手をとつて神々の冥助を感謝した。

オデュッセウス傳說には更に別な說話があり、それによると、彼は大西洋上の航海を企て、勇敢な部下とまづポルトガルに赴き、こゝにリスボン市の基を起し、それよりアフリカの西の海に出たが、遂に暴風に遭つて死んだといふ。ダンテはこの說話に創意を加へて「神曲」中の人物としたのであらう。

【神界の祕密を奪ひ取らんとして、云々】
「地獄篇」第二十六曲に於てオデュッセウスはダンテに自己の最後のさまを次のやうに物語つてゐる。

我はたゞ一艘の船をえて我を棄てざりし僅の侶と深き潤き海に浮びぬ
西班牙、摩羅哥にいたるまで彼岸をも此岸をも見、またサールデニア島及び四方此海に洗はるゝほかの島々をもみたり
人の越ゆるなからんためエルコレが標をたてしせまき口にいたれるころには
我も侶等もはや年老いておそかりき、右にはわれシヂリアをはなれ左には旣にチェウタをはなれき
我曰ふ、あゝ千萬の危難を經て西にきたれる兄弟等よ、なんぢら目を迫ひ
殘るみぢかき五官の覺醒に人なき世界をしらしめよ、汝等起原をおもはずや
汝等は獸のごとく生くるため造られしものにあらず、德と知識を求めんためなり
わがこの短かき言をきゝて侶は皆いさみて路に進むをねがひ、今はたとひとゞむとも及び難しとみえたりきかゝれば艫を朝にむけ、櫂を翼として狂ひ飛び、たえず左に舟を寄せたり
夜は今南極のすべての星を見、北極はいと低くして海の床より登ることなし
我等難路に入りしよりこのかた、月下の光五度冴え五度消ゆるに及べるころ
かなたにあらはれし一の山あり、程遠ければ色薄黑く、またその高さはわがみし山のいづれにもまさるに似たりき
我等は喜べり、されどこの喜はたゞちに歎に變れり、一陣の旋風新らしき陸より起りて船の前面をうち
あらゆる水と共に三度之を旋らし四度にいたりてその艫を上げ舳を下せり（これ天意の成れるなり）

遂に海は我等の上に閉ぢたりき

【山島】　サンタウ　山より成る島。

【舵】　カヂ　船尾の水中に備へ、これに當る水の抵抗を利用して船の方向をかへる裝置。

【嘗て見られたることなき國】　煉獄の山島をさす。

神は生者がこの島の土を踏むことを許さない。ダンテの場合は特別の恩寵によるのである。

【いと高き手】　神の御手。大能の御手。

【眞理】　シンリ　こゝは、宗教的な意味で、迷妄を離れた眞實常住の絶對の世界をさす。

【掟に逆らつて】　神のいましめに背いて。

〔掟〕　オキテ　(一)規則。さだめ。法律。法令。いましめ。處置。(二)心ばへ。心だて。人物。性格。こゝは(一)。

【避れる者】　ヘリタダれるモノ

まことの道、天の門は避れる者に開かれてあるといふのは、キリストの山上の垂訓以來斯教の一骨髓をなしてゐる。

【オデュッセウスが持てるとは異なれる憧憬の心】　オデュッセウスの抱いてゐたのとは根本的に異なつた、至心に神を求め道を求めることに基づくあこがれの心。

探險家オデュッセウスのもつて居た憧憬の心は、神の國の祕密を奪ひ取らうといふ知識欲・探險欲から發したものであつて、そこには神を畏れる心、道を求める心は微塵もない。

〔憧憬〕　ドウケイ　遙かに思ひよること。憧れること。

【ダンテ】　ダンテ・アリギエーリ(Dante Alighieri)。西暦一二六五年五月イタリヤのフィレンツェ(フロレンス)に生まれた。父はアリギエーロ、母はベルラ。幼くして母を失ひ、十八歳の頃父も失つた。夙に古典文學を愛し、特にローマ時代の詩人ヴィルジリオを熟讀し、ブルネット・ラティーニの學校で修辭學を學んだ。「新生」によると、彼は九歳の終の頃初めてベアトリーチェ(當時九歳の君の姿)を見、彼女の美しさに全く心を打たれた。後十八歳の時再び彼女に街頭で出會ひ、その「言葉にいひ難い禮讓」ある挨拶をうけて以來、魂を燒き盡くす如き憧憬と熱愛に動かされ、その後生涯彼女の美しい幻影を忘れることが出來ず、彼女が二十四歳を一期として世を去つた時は何物も彼を慰めるに足りないほどであつたといふ。この彼女を思ふ心が彼をして「新生」を書かせ、又「神曲」を書かせた。後彼はジェンマ・ドナーティと結婚し、四人の子供をもつた。彼は熾烈な求知心を有すると共に、現實問題に對する深い關心を有し、ベアトリーチェの死後熱心に哲學研究に向かつたが、その情熱は三十歳頃から次第に政治方面に移つて行つた。そして內亂分裂のイタリヤをドイツ皇帝(神聖ローマ皇帝)の力によつて統一しようと企てたが、遂に失敗して追放の刑に處せられた。これより彼の約二十年近い長い漂浪の生涯が始り、イタリヤ各地の諸侯に保護を求めて歩いたが、その間も詩人的努力と熱心とを以て學藝を研讀した。又その間常に故郷フィレンツェに歸る日を夢みてゐたが、遂にその熱愛する故郷を再び見ることを得ず、一三二一年九月、ラヴェンナで五十六歳を以てその不遇な生涯を終へた。彼の主な著作としては「神曲」の外に、「新生」「俗語論」「饗宴」「帝政論」等があり、ペトラルカ・ボッカチオと共にイタリヤ文學の建設者、文藝復興の先驅者として知られてゐる。

【ヴィルジリオ】　Virgilio(伊)　羅典名ピュブリウス・ヴィルギリウス(Publius Virgilius)又はヴェルギリウス(Vergilius)。英名ヴァージル(Virgil)。西暦前七〇年十月、マントヴァのアンデスの中產の地主の家に生まれ、クレモナ・ミラノ・ローマ等で教育を受け、修辭學・哲學等を學んだ。幽居を好み、田園を愛し、政治に對する野心等はなかつた。アウグスツス皇帝の知遇を得て宮廷詩人の資格を與へられたが、カンパニア・ナポリ・ノラ等に閑居して詩作に耽つた。晩年ギリシヤ・アジヤに旅行を企てたが、アテネで病にかゝり歸國の途中、前一九年九月五十一歳で歿した。ローマ第一の詩人として知られ、著作の主なものに、「牧歌」「農作篇」「アイネイアスの歌」等があり、何れも前人の文想を醇化し、更に新機軸を出さうとした所に獨創的な努力が見られ、又何れにも自然の愛好がよく現れてゐる。

ダンテはあまねく彼の著作を愛讀し精通してゐた。「神曲」の中では彼は理性若しくは哲理の象徵として、ベアトリーチェの請により、ダンテを暗い森から導いて地獄・煉獄を案內する。

【地の底から攀ぢ登つて出て來た】

ダンテはヴィルジリオに導かれて地獄の各圈を巡つて、その底に下り、地心を過ぎてなほも地下の幽路を辿り、遂に再び反對側の地上に出て來たのである。(參考資料一・二參照)

【白々あけ】　シラジラあけ　夜明の、空のしらみわたる時。ほのぼのと明ける時。あさぼらけ。あけぼの。拂曉。

【星】　ホシ　こゝは、南半球に豐間輝くといふ四星をさす。

「四星」は想像の星で、活動生活の四元德卽ち、思慮・正義・剛氣・節制を表す。この星がダンテの創意になるものか否かは不明である。尙、當時の地理學によればアフリカも全部北半球

にあつて、南半球は「人なき世界」であつた。

【寂しき岸邊】　サビしきキシベ　煉獄の島の人なき濱邊をさす。

【父親らしき老人】　煉獄の島の島守である義務の權化カトーをさす。（三九三頁「カトー」參照）

【地獄の焰】　ヂゴクのスス　地獄の汚れ、の意。

〔地獄〕　hell（英）　罪人が永遠の刑罰を受けるといふ幽府。キリスト教思想に於ける地獄は、ギリシヤ・ユダヤなどの傳說を素材とし、これに「最後の審判」の思想が結合したもの。卽ち、悔悟を知らぬ魂の總べてが永遠の呵責を受ける世界を地獄とし、悔悟した魂が呵責によつて淨罪され、昇天の惠に浴する世界を煉獄としたもので、この思想は中世に至つて完成された。（時には煉獄をも含めて地獄といふ。）こゝは、「神曲」に描かれた地獄界（Inferno）をさす。（參考資料一・二參照）

【太陽の示し】

「淨火篇」第一曲に次のやうにある。

汝等かくして後こなたに歸ることなかれ、今出る日は汝等に登り易き山路を示さむ

【あけぼの早しのゝめに云々】

「淨火篇」第一曲にある。山川氏譯には次のやうにある。

黎明（あけぼの）朝の時に勝ちてこれをその前より走らしめ、我ははるかに海の打震ふを認めぬ

〔あけぼの早しのゝめに勝ちて〕　夜の次第に明けゆくさまをいつたもの。

「あけぼの」（曙）は、空のほの〴〵と明るくなる時。夜の明けようとして日の光のさしそめる時。あさぼらけ。

「しのゝめ」（東雲）は、あけがた。あかつき。曉天。白々あけ。

〔海の慄〕　ウミのフルヘ　海面に小波の立つてゐるさまをいつたもの。

【遥りの標なる蘆】

蘆はよく屈折して打つ浪に逆らはない所から謙遜の標としたのである。（山川氏譯及び朱田長江氏譯では「標」が「蘆」となつてゐる。）

謙遜の人はよく心を屈して神に從ひ、刑罰に耐へてその罪を淨めるを得るが故に、謙遜は淨罪の主要の德とせられる。

「淨火篇」第一曲に次のやうにある。

されば行け、汝一本の滑かなる蘆をこの者の腰に束ねまたその顏を洗ひて一切の汚穢を除け

霧のために眺める目をもて天堂の使者の中なる最初の使者の前にいづるはふさはしからず

この小さき島のまはりのいと〳〵低きところ浪打つかなたに、蘆ありて軟かき泥の上に生ふ

この外には葉を出しまたは硬くなるべき草木にてかしこに生を保つものなし、打たれて撓まざればなり

〔中略〕

こゝに彼、かの翁の心に從ひ、わが腰を括れるに、奇なる戲謔遥の草、彼えらびて之を採るや

その拔かれし處よりたゞちに再び生ひいでき

【天使】　テンシ　（一）日又は月の異稱。（二）天子の使者。勅使。（三）キリスト教で、天國にあつて神に奉仕し、神の使者として人間界に派遣せられると考へられる者。神と人との仲介をなし、神意を人間に傳へ、又人間の祈願を神に傳へるもの。こゝは（三）。

「神曲」では、地獄に下らない靈魂は萬國からエーヴェレ（ローマを過ぎる澤名の川）の河口に集り、こゝから天使の導によつて船で煉獄の島に送られることになつてゐる。

【さだめ】　定　（一）定めること。決定。（二）おきて。約束。法度。（三）運命。命數。こゝは（三）。

【奇蹟】　キセキ　常識的・科學的にはあり得ないと思はれるやうな不思議な事蹟。かみわざ。

一三　淨　火

【靈魂の船】　レイコンのフネ　靈魂の乘つてゐる船。

「淨火篇」第二曲に次のやうにある。

彼は疾く輕くして少しも水に呑まれざる一の舟にて岸に著けり

艫には天の舟人立ち（羂）その姿にかきしるさるゝごとくみゆ）、中には百餘の靈坐せり

【新來の客】　シンライのキャク　新しく到著した靈魂達をさす。

【その始が最も困難であるといふ特殊性】

「淨火篇」第四曲に次のやうにある。

葡萄黑むころ、たゞ一束の茨をもて、村人の園ふ孔といふとも、かの群我等をはなれし後

導者さきに我あとにたゞふたり登りゆきし徑路よりは間間大いなるべし

サンレオにゆき、ノーリにくだり、ピスマントヴを登りてその頂にいたるにもたゞ足あれば足る、されどこゝにては飛ばざるをえず

卽ち我に望を與へ、わが光となりし導者にしたがひ、疾き翼深き願の羽を用ゐて

我等は碎けし岩の間を登れり、崖左右より我等に迫り、

下なる地は手と足との助を求めき
〔中略〕
はじめ常に艱しといへども人の登るに從つてその勞を少
うするはこれ此山の自然なり

【棄なる岸邊】 煉獄の島の濱邊をさす。

【たづき】 「手著」の義といふ。便つて寄りつくべきすぢ。たより。よるべ。よすが。てづる。便宜。方便。手段。

【その熱心】 苦難に堪へて淨罪しようとする熱心。

【定まらぬ意志】 固定しない意志。ともすれば動搖し、目標を失はうとする未熟な意志。

【自ら督まして】 ミヅカラクラまして　自らぼやかして。われとわが明を掩つて。

【道德的勞作】 ダウトクテキラウサク　道を求めてする努力。こゝは、淨罪の爲に行ふべき勞作をさす。
〔勞作〕 (一)骨を折つて働くこと。ほねをりわざ。(二)勞力を費した作品。こゝは(一)。

【感傷】 カンシャウ　物事に刺激せられて心が感じいたむこと。感じ易いこと。涙脆いこと。

【カセルラ】 Casella　ダンテの友。フィレンツェ(或はトスカナ)の音樂家。傳は未詳であるが、シエナに殘る記錄によると、西暦一二八二年夏、夜中街上に高吟放歌した廉により科料に處せられたとある。又、レンモ・ダ・ビストイアの詩にカルセラ作曲と記錄されたものがヴァチカン圖書館に遺つてゐる。

【饗宴】 キャウエン　Convivio　ダンテの著書。四篇より成る抒情詩集。(元來は十五篇を以て成る筈だつたといふ。)各篇共に夥しい散文の註が附いてをり、第一篇たる序は、本書編述の目的と、ラテン語によらず俗語を以て書く理由を述べ、第二・第三の兩篇は「哲學」及び「哲學的愛」に關して述べ、第四篇は「高貴」に就いて詳論する、といふ風に、殆どあらゆる學問に關する知識を網羅してゐる。これは彼がペアトリーチェの死後沒頭した哲學研究の結果と、當時流行の「知識の寶庫」式通俗百科學の影響で、彼は、天人が眞理の饗宴にあづかる幸福を思ひ、それらの食の殘屑ですらそれを取つて味はふときの甘美を思ふにつけても、未だその味はひを知らぬ人々の爲に書いたといふ。こゝにダンテが如何に眞理を求めるに熱心であつたかが知り得られると共に、この書が前著の「新生」と後の「神曲」とを連繫する作品なること、卽ち「新生」の戀愛經驗は眞理の愛に變形され、譬喩的な說明によつてその巧みな移入が行はれてゐること、またこの書の思想體系が「神曲」の構成を說明してゐること等が注目される。

【憧の歌を唱つて、云々】
「淨火篇」第二曲に次のやうにある。
「わが心の中にものいふ戀は」と彼はこのときうたひいづるに、そのうるはしさ今猶耳に殘るばかりに妙なりき
我師も我も彼と共にありし民等もみないたくよろこびて、ほかに心に觸るゝもの一だになきごとくみゆ
尙、中山昌樹氏譯「饗宴」第三篇「カンツォネ　第二」に、この憧の歌は次のやうに譯されてゐる。
心のうちにあつて慕はしく
わが貴女(「心」では貴女)のことを私に語らふ愛は
彼女にかゝるもろ〳〵のことを頻りに私におこし
ために智性はこれについて途をうしなふ。
その語らひはいたく甘美にひゞき
ために彼に聽きまた感ずる靈魂は
いふ「おゝ悲しいかな！　わが貴女について
聞くことを私はいふを得ない！」と。
古註によれば、カセルラがこの歌の譜を作つたといふ。

【未だ定かならぬ世界觀】 まだはつきりした信念のない世界觀。

〔世界觀〕 セカイクワン　一般には世界を一つの統一的全體として見て、その意義・價値を考察する際の見解をいふ。その意義・價値が特に善惡・美醜・合又は反規範といふ見地から問題とされるので、倫理的意味がつよい。これに大體三樣の見解卽ち厭世觀・樂天觀・改善觀がある。尙世界觀は、人生についての統一的見方である「人生觀」と密接な關係がある。

【鄕愁】 キャウシウ　故鄕を追慕する愁。こゝは、後にして來た現世への執著、の意。

【靈魂をゆすぶる】 魂をゆりうごかす。心を動搖させる。

【煉獄】 レンゴク　purgatory(英)　淨罪界。ローマ舊敎で、死者の靈魂が天國に入る前に、火によつて生前の罪を淨化される所とせられる場所。天國と地獄との間に在つて火の海に圍まれてゐるものとせられる。この說は夙く西暦三世紀の頃に起り、中世に至つてローマ敎會の信奉する所となつたが、ギリシヤ敎會では寧ろこれを支持せず、又新敎に於ては全然これを排擊した。こゝは、「神曲」に於ける淨罪界(Purgatorio)をさす。(參考資料二・三參照)

【カトー】 マルクス・ポルキウス・カトー(Marcus Porcius Cato)。西暦前二―三世紀頃のローマの大政治家カトーの曾孫。曾祖父を大カトーといふに對して小カトーと呼ばれる。西暦前九五年生。

徹底的なローマ共和國思想の支持者で、ポンペイウス・ケーザル・クラッススの三頭政治に反對し、執政官となるや取締を峻嚴にし、爲に人民の恨をかつた程であつた。ポンペイウスとケーザルとの爭鬪の際には、ケーザルを共和政の敵として、ポンペイウスを援助したが、敗れて國外に逃れ、後ポンペイウス派の勇氣なきを慨してこれと離れた。ポンペイウスの死後アフリカのウティカに籠つたが、前四六年ケーザルの攻擊に遭ひ、敵せざるを察知して四十九歳で自殺した。

本來彼は自殺者として地獄の第七圏に於て罰せられるべきであるが、大衆の間にも、亦教會内でも、古くから尊重され、ヴィルジリオもその「エエネアの歌」の中に彼を敬虔な者の首長としてゐるので、ダンテも煉獄の島守といふ大切な地位を與へたのであらう。ダンテは他の著作中にも屢〻彼を激賞してゐる。

【小さき民】　こゝは、精神的に幼稚な人々、の意。

【峻しき義務】　ケハしきギム　こゝは、向上的な困難な義務、の意。

【音樂的】　オンガクテキ　音樂風な、心地よい。

カルセラの心地よい現世的な歌の調子からいつたのであらう。

【澄明り時】　ウスアカリドキ　こゝは、既に惡を脱し、善に向かつてはゐるけれども、まだ「朧な感傷の中に融けこんでしまふ」やうな「定まらぬ意志」をもつた、道德的に薄弱な狀態を意味してゐる。尙、こゝ(第二曲)の時刻も朝の六時近い頃である。

【美の奢】　ビのオゴリ　美を享受し、これに滿足し且誇つてゐること。

【カトーの叱責】

「淨火篇」第二曲に次のやうにある。

我等すべてとゞまりて心を歌にとめゐたるに、見よ、かのけだかき翁きけびていふ。何事ぞ遲き魂等よ
何等の怠慢ぞ、何ぞかくとゞまるや、走りて山にゆきて穢を去れ、さらずば神汝等にあらはれたまはじ。
たとへば食をあさりてつどへる鳩の、麁もいださず、その習なる誇もみせで、麥や莠の實を拾ふとき
おそるゝものあらはるゝあれば、さきにもまさる顧に攻められ、忽ち食を棄て去るごとく
かの新らしき群歌を棄て、山坂にむかひてゆきぬ、そのさま行けども行方をしらざる人に似たりき
我等もまた之におくれずいでたてり

【人間的省思】　ニンゲンテキセイシ　人間らしい反省。

「神曲」に於けるヴィルジリオは、人間の理性又は哲理を象徴してゐるのでかういつたのであらう。

〔省思〕　わが身をかへりみて考へ思ふこと。反省。

【懺悔せる罪過】　ザンゲせるザイクヮ　悔い改められた罪とあやまち。

〔懺悔〕　サンゲ・ザンゲ(梵語)　佛語。過去の罪過を、佛・菩薩・師長・衆人等に對してあらはに陳述する行爲。「他に忍容を請ふ」義の梵語「懺摩」(Kṣāma)の「懺」に、その意譯語である「悔」を添へたもの。轉じて、廣く、自己の罪過を悟つて悔い改め、又は神佛等に告げいふこと。

【ああ尊き清き良心よ、云々】

「淨火篇」第三曲にある。山川氏譯には次のやうにある。

彼はみづから悔ゆるに似たりき、あゝ尊き清き良心よ、
たゞさゝやかなる咎もなほ汝を刺すといかにはげしき

〔良心〕　リャウシン　自他の行爲及び品性に對して正邪・善惡の判斷を下し、正善はなすべし、邪惡はなすべからずと命令し、更に進んでは積極的に正善を行はしめ、邪惡を行はしめない動力ともなる意識作用。道德意識。

〔咎〕　トガ　(一)罪となるべき行爲。つみ。罪科。あやまち。(二)瑕。缺點。こゝは(一)。

【懈怠】　ケダイ・ケタイ　佛語。梵語 Kausīdya の譯語。善を修するに當つて懶惰で勇悍でないこと。おこたり。なまけ。

【時に當つて】　そのなすべきよい時に於て。

【淨福】　ジャウフク　淨い幸福。精神的な幸福。こゝは、魂が天國に入るを許されること。

【恩寵が彼等のために煉獄の山を開いてくれるとき云々】

怠惰の爲に改悟を死に臨むまで延べた者は、煉獄の門内に入る前に、まづ門外でその罪の生涯と同じ年月を無爲に過さねばならない。但し地上に生きてゐる者の祈の助があると、その年月は短縮せられて早く煉獄に入ることを許される。(これは煉獄門外の通則である。)尙、寺院に破門せられたものは、たとひ改悟して死んでもその破門期間の三十倍の間、門外に待たなければならない。

〔恩寵〕　オンチョウ　(一)惠。いつくしみ。(二)キリスト教に於ける神の惠。こゝは(二)。

【佇立】　チョリツ　ただずむこと。久しく一所に立つこと。

【位置】　イチ　こゝは、立場、といふほどの意。

【無目標】　ムモクヘウ　目當のないこと。目じるしのないこと。

【牧歌的無活動】　牧歌のやうに、素朴で抒情的で安逸な狀態。魂等が來るべき烈しい道德的苦鬪の緒につく前の無爲の狀をいふ。

〔牧歌〕ボクカ　(一)牧童・牧牛者の歌。(二)pastoral(英・佛)の譯語。田園の風物を背景とし、牧者・農夫の男女の生活を骨子とした、抒情的で素朴な歌謠又は小說・戲曲の通稱。田園詩。(三)複音唱歌の一種。多く戀愛を主題とする優美な抒情的な曲。こゝは(二)。

【狹き岩間の徑路】

「淨火篇」第三曲に次のやうにある。

かゝるうちにも我等は山の麓に著けり、みあぐれば巖い
と嶮しく、肱の疾きもこゝにては益なしとみゆ
レリーチとツルピアの間のいとあらびいと廢れし徑と
いふとも、これに比ぶれば、寬かにして登り易き梯子の
如し

〔徑路〕ケイロ　(一)みち。こみち。(二)みちゆき。すぢみち。こゝは(一)。

【ベラックヮ】Belaqua　フィレンツェの樂器製造者。七絃琴等の樂器のすぐれた製作者であつたが、性甚だ懶惰であつたといふ。又公證人であつたともいはれる。

ダンテは音樂を好んだから、ベラックヮともよく知り合つてゐたのであらう。

【兄弟よ、云々】

「淨火篇」第四曲にある。山川氏譯には次のやうにある。

彼。兄弟よ、登るも何の益かあらむ、門に坐する神の鳥
は、我が苛責をうくるを許さざればなり

〔兄弟〕キャウダイ　こゝは、ひろく他人を親愛していふ語で、ダンテへの呼びかけ。

〔我に何せん〕私にとつて何にならう。私に何の益があらう。

〔煉らるゝ者〕煉獄の門内で淨罪の爲の苛責試煉を受ける者。

【性癖】セイヘキ　性質上の偏頗な傾向。くせ。

【下の方】煉獄の島の麓の方、卽ち道德的價値の低い方をさす。

【性情】セイジャウ　こゝろ。こゝろだて。きだて。

【報償】ハウシャウ　つぐなふこと。しかへすこと。

【打算】ダサン　こゝは、先づ損得を見積つて利をはかること。

【混淆】コンカウ　區別なくいりまじること。ごつたまぜ。混入。

「淆」―(一)いりみだれる。まじる。(二)濁る。濁す。

【利己主義】リコシュギ　(一)自分の利害のみを行爲の規準とし、社會一般の利害を念頭におかない倫理學上の一立場。それには自己の保存又は主張を中心とするものと、自己の快樂增進を中心とするものとがある。主我主義。エゴイズム(egoism)。(二)他人の迷惑を顧みず、我儘勝手に行動すること。みがつて。こゝは(二)で、蠱のよさ、といふほどの意。

【我がヨハンナに、云々】

「淨火篇」第八曲に次のやうにある。

汝大海のかなたに歸らば、わがジョヴンナに告げて、罪
なき者の祈禱かるゝところにわがために聲をあげしめよ
おもふに彼の母はその白き首帕を變へしよりこのかた
(あはれ再び之を望まざるをえず)また我を愛せざるなり

〔ヨハンナ〕Johanna　煉獄前界の王侯の溪でダンテに話しかけたニーノの娘。その母のベアトリーチェ・デスチはニーノの死後、ミラノの王マッテオ・ヴィスコンチの子ガレアッツオに再嫁した。

【煉獄前界】レンゴクゼンカイ　(三八三頁「二つの高き山」參照)

【物質的福利】ブッシツテキフクリ　肉體的又は有形的な幸福と利益。

【衝動】ショウドウ　先天的若しくは後天的に獲得した身體的若しくは精神的傾向が無意識的・强迫的に吾人の動作を促すことで、最も原始的な意志作用。

【自然のまゝの好奇心】生まれたまゝの訓練されてゐない好奇心。

【ダンテの肉體の投げる影によつて、云々】

靈魂は光を遮らず、隨つて影といふものをもたないのである。

「淨火篇」第二曲に次のやうにある。

わが呼吸によりて我のなほ生くるをしれる魂等はおどろ
きていたくあをざめぬ
しかしてたとへば報告をえんとて橄欖をもつ使者のもと
に人々むらがり、その一人だに踏みあふことを避けざる
ごとく
かの幸多き魂等はみなとゞまりてわが顏をまもり、あた
かも行きて身を美しくするを忘るゝに似たりき
又、第五曲には次のやうにある。
かゝる間に、山の腰にそひ、橫方より、かはるがゝ憐み
たまへを歌ひつゝ、我等のすこしく前に來れる民ありき
彼等光のわが身に遮らるゝをみしとき、そのうたへる歌
を長き暖れたるあゝに變へたり
しかしてそのうちより使者とみゆるものふたり、こなた
にはせ來り、我等にこひていふ。汝等いかなるものなり
や我等に告げよ。
我師。汝等たちかへり、汝等を遣はせるものに告げて、

彼の身は眞の肉なりといへ

その他、この種の敍述は淨火篇の到る處に見られる。

【亡魂】 バウコン　(一)亡き人の魂。死人の魂魄。亡靈。(二)轉じて、その魂の形に表れ、現にみえるもの。幽靈。こゝは(一)。

【行旅】 カウリョ　(一)旅をすること。(二)旅人。こゝは(一)。

【汝如何なれば云々】

「淨火篇」第五曲にある。山川氏譯には次のやうにある。

師曰ふ。汝何ぞ心ひかれて行くことおそきや、彼等の私語汝と何の係あらんや

我につきて來れ、斯民をその言ふに任せよ、風吹くとも頂搖がざるつよき櫓の如く立つべし

尙、その直前には次のやうにある。

我既にかの魂等とわかれてわが導者の足跡に從へるに、このとき一者、後方より我を指ざし叫びていふ。見よ光下なるものゝ左を照らさず、彼があたかも生者のごとく歩むとみゆるを。

我はこの言を聞きて目をめぐらし、彼等のあやしみてわれひとり、たゞわれひとりと、碎けし光とを目守るをみたり

【この民】 この人々。この連中。

【荒べども】 荒べども　荒れる時でも。

【櫓】 ヤグラ　こゝは、展望又は防備などの爲に城門・城壁等の上に設けた高樓。

【精神の凝集】 セイシンのギョウシフ　心がこりかたまりあつまること。精神を或點に集中すること。

【人格の淨化と沈潛との養備條件である】 精神の集中が、まづ人格を淨め、又精神を落著ける爲の準備的な事柄である、といふほどの意。

【人格】 ジンカク　(一)各個人に特殊的にそなはる理性的・道德的統一。先天的・後天的に具有する種々の個人的性質の統一を、道德的・價値的に見た場合の稱。(二)人間としての資格。一個人として獨立し得る資格。こゝは(一)。

【沈潛】 チンセン　こゝは、外の興味に心を惹かれることから脫して、澄み落ちつかせること。

【王侯のまとる】

ロドルフオ(ドイツ皇帝ル)・オットカーロ(ボヘミヤ王オタカール二世)・エンリーコ(ナヴアルラ王ヘンリー)・ヒリップ(フランス王フイリップ三世)・ピエートロ(アラゴン王ペトロ三世)・カルロ・ダンジオ(プーリヤ及びシシリヤ王カルロ・ダンジオ一世)・アルフォンソ(アラゴン王ペトロ三世の子アルフオンソ三世)・ヘンリー(イギリス王ヘンリー三世)・グリエルモ(イタリヤのモンフエルラ侯グリエルモ七世)等が一所に集つてゐるのをさす。

【まとる】 圓居「まどる」に同じ。(一)人々が圓く居並ぶこと。くるまざ。(二)人々が親しく集り合ふこと。團欒。(三)一所に集り會すること。こゝは(三)。

【千々の匂】 チヂのニホヒ　いろ〳〵なよい香。

【夕の溪間の美しき草原に云々】

「淨火篇」第七曲に次のやうにある。

我等少しくかしこを離れしとき、我は山の窪みてあたかも世の大溪の窪むに似たるところを見たり

〔中略〕

忽ち瞼しく忽ち坦なる一條の曲路我等を導いてかの坎の邊、緣半より多く失せし處にいたらしむ

金、純銀、朱、白鉛、光りてあざやかなる印度の木、碎けし眞際の新しき緣の珠も

各その色を比ぶれば、かの懷の草と花とに及ばざることなほ小の大に及ばざるごとくなるべし

自然はかしこをいろどれるのみならず、また千の良き薰をまじへて一の世に知られざる香を作れり

我見しにこゝには溪のため外部よりみえざりし多くの魂サルエ・レーギーナを歌ひつゝ綠草の上また花の上に坐しゐたり

【テ・ルキス・アンテ】 Te lucis ante terminum 「光の消えぬさきに」の意。聖アンブロシウスの讚歌の一で、一日の最後の禮拜の時に歌ひ、夜の間の神の守護を祈り求める歌の起句。

我が國の讚美歌集には譯されてゐないので、定譯といふべきものはない。中山昌樹氏譯「神曲」の註にも、本文とほゞ同樣な譯がある。

【光の消えぬさきにの歌】

「淨火篇」第八曲にその起句がある。(「懷る、一つの魂を云々」參照)

〔主〕 シュ　こゝは、キリスト教で、エホバ神又はキリストをさしていふ語。

〔夢〕 こゝは、迷夢、まよひ、の意であらう。

〔夜の魔〕 ヨルのマ　日中光のある間は、これを畏れて遠ざかつてゐるが、夜になるとその暗黑に乘じて跳梁する惡魔。「魔」は、キリスト教及び廣く泰西の民間傳說に現れる人格化された惡靈をいふ。

【誘惑の蛇】 イウワクのヘビ

蛇は舊約聖書に、アダムとイヴを誘惑して神に叛かせたとあることから、誘惑を象徴するものとなつた。

「淨火篇」第八曲に次のやうにある。

彼語りゐたるとき、ソルデルロ彼をひきよせ、我等の敵、を見よといひて指ざしてかなたをみせしむ
かの小さき溪の圍なきところに一の蛇ゐたり、こは昔エーヴに苦き食物を與へしものとおそらくは相似たりしなるべし
身を滑ならしむる獣のごとくしば〳〵頭を背にめぐらして舐りつゝ草と花とを分けてかの禍の紐は來ぬ
天の鷹の飛立ちしさまは我見ざればいひがたし、されど我は彼も此も倶に飛びゐたるをさだかに見たり
綠の翼空を裂く響をきゝて蛇逃げさりぬ、また天使等は同じ早さに舞ひ上りつゝその定まれる處に歸れり

【憧るゝ一つの魂を云々】

「淨火篇」第八曲に次のやうにある。

我は何の聲をもきかず、一の魂の立ちて手をもて請ひて、耳をかたむけしむるを見たり
この者手を合せて之をあげ、目を東の方にそゝぎぬ、そのさま神にむかひて、われ思をほかに移さずといふに似たりき
テー・ルーキス・アンテその口よりいづるに、信念あらはれ調うるはしくして悉く我心を奪へり
かくて全衆之に和し、目を天球にむかはしめつゝ、聲うるはしく信心深くこの聖歌をうたひをはりき

【音頭取】　オンドトリ　(一)多人數で歌ふとき、先に發聲して調子を示す人。(二)物事の首唱者。こゝは(一)。

【守護の天使が、夕闇を貫ぬいて云々】

「淨火篇」第八曲に次のやうにある。

また尖の削りとられし二の焰の劍をもち、高き處よりいでゝ下り來れるふたりの天使を見き
その衣は、今萌えいでし若葉のごとく綠なりき、綠の羽に打たれ飜られて彼等の後方に曳かれたり
そのひとりは我等より少しく上方にとゞまり、ひとりは對面の岸にくだり、かくして民をその間に挾めり
我は彼等の頭なる黃金の髪をみとめしかど、その顏にむかへば、あたかも度を超ゆるによりて能力亂るゝごとく我目眩みぬ
ソルデルロ曰ふ。彼等ふたりは溪をまもりて蛇をふせがんためマリアの懷より來れるなり、云々

〔守護の天使〕　シュゴのテンシ　王侯の溪の靈魂達を守る天使。

〔夕闇〕　ユフヤミ　夕のくらやみ。月が未だ上らないで宵の間の闇黑なこと。宵闇。

【三つの輝く星】　想像の三星で、神學上の三德たる信仰・希望・愛を表す。

夜の三星は、活動の德たる晝の四星に對して、瞑想の德を象徴するもので、四星が下つた後同じ場に昇る。(三八九頁「星」參照)

【信仰と希望と愛】　シンカウとキバウとアイ

キリスト教では、信仰・希望・愛を三德として重んずる。コリント前書、十三の十三に「それ信仰と望と愛と此三の者は常に在なり此うち尤も大なる者は愛なり」とあり、これに就いて內村鑑三氏は「コリント前書研究中」に次のやうに述べてゐる。

世に永存する(恆に在るの意)者三つあり、信、望、愛是れなり、其他はすべて一時的のものなり、富貴は煙の如し、權威は雲の如し、名譽は朝の霧の如し、持續すること稍々永き預言、言語、智識と雖もまた時に至れば廢らざるを得ず、然れども信、望、愛の三者は恆に在るなり、卽ち永遠に存し、永遠に廢らざるなり、我等が神を信ずるの要なき時は有るべからず、我等が神の恩惠を待ち望まざる時とても亦有るべからず、而して神を愛せずして我等は死す、永遠の生命とは信、望、愛の生涯なり、我等の生命が是等三者に單歸するに及んで我等の永遠の生命は始まるなり。

信、望、愛の三者は齊しく永存す、然れども其中最も大なるものは愛なり、三位の神は父に在て合一するが如く、永遠の三姉妹は愛に在て合體す、信を以て立ち、望に由て進み、愛に到て足る、愛は人生の終極點なり、玆に至て人は神の懷に入り、神の子となりて永遠に生存す、「そは神は卽ち愛なればなり(約翰第一書四章八節)」。

尙、「神曲」の天國篇に於て、ダンテは第八恆星天で、聖ペテロに信仰を、聖ヤコブに希望を、聖ヨハネに愛を夫々試問され、いづれも答へ得て合格し、第九原動天へ進むのである。

【新しい日を豫約する】　現在の闇が去つて、潰えんとして辛くも保たれた人間の心に、やがて再び蘇りの朝、希望の日がやつて來る、その豫めの保證・約束をする意。

【登山の第一日】　煉獄の山に登りはじめた最初の日で、「神曲」によれば、西暦一三〇〇年の四月十日に當つてゐる。

【憧憬と豫感と準備とがその内容である】天國をあこがれ、同時にそれが實現されさうな感じがし、その爲にいろ〳〵心がまへをするのが、この日の生活行爲である、といふほどの意。

〔豫感〕ヨカン　明確に意識に上るのではなく、唯何となく將來の事について暗示的に感ずること。蟲が知らせること。豫覺。

挿圖「ダンテ」傳ジョットー筆。原畫はフィレンツェのバルヂェロの會堂内の壁畫で、現存ダンテ像中最も古いものである。

二　解釋

1　主題

煉獄の島とその前界に於けるダンテの一日。

2　構想

(1)　煉獄の山島。（初―一三五ノ四）

(2)　地獄をめぐつて煉獄の山島の岸邊に出たダンテとヴィルジリオ。（一三五ノ五―一三七ノ一二）

(3)　煉獄の前界での樣々な見聞と體驗。（一三八ノ一―一四二ノ一）

(4)　煉獄山麓の第一夜。（一四二ノ二―終）

3　敍述

〔その樂しみを嘗めんがためにあらゆる人の心の餓ゑ渴くところである。〕――南半球を掩ふ大洋中の一孤島に滅絶せる一巓、天に近く、風の爽な地上の樂園、人の罪の根柢から淨められる世界、それは人類にとつてどんなに切實な憧憬の對象であるか、「餓ゑ渴く」といふやうな言葉以外に言ひ表しやうのないものであらう。

〔登り行く途は辛苦多く、山は特にその麓に於て峻しく、その門戸は容易に入り難い。〕――淨罪の道德的意義が、淨罪の體驗がこの山の構成に寓意せられてゐることはいふまでもない。德の生活、眞理に從ふ生活はその第一歩が最も困難であるといふ普遍的事實がはつきりとこゝに象徵せられてゐる。

〔一人の人が、絶え間なく又常に新しく燃やさるゝ意欲を以て愼に到るまでの登攀を全くすれば、そのときこの山は歡喜を以て根柢から震動する。〕――「神曲」には更に、その時一山の大衆が聲を合はせて神を讃へるさまが記してある。何といふ莊嚴な靈界の眞實であらう。「眞に高貴なる思想の高貴なる具現」であるといつたカーライルの評言が肯かれる。佛教の、菩薩が正覺を成じて佛となる時大地が六種に震動するといふ思想も思ひ合はせられる。

〔この神祕な島に接近するには、自恣の力を以てすることを許されない。〕――自恣の力の屆かない世界である。そこに煉獄の煉獄たる所以が存するといへよう。かゝる世界の嚴存することを明らかに觀得る者は幸である。

〔眞理の内面は唯遜れる者にのみ開かれてゐる。さうしてオデュッセウスが持てるとは異なれる憧憬の心を要求する。〕――自恣の力で到ることを許されてゐない神祕な山に接近する道は、眞理の内面を開く鍵ともいふべき謙遜の外にない。敢へて自恣を以て近づかうとする者には、たとひ外面的には近づくことが出來るやうに見えても、やがて恐しい神の怒が下る。嚴しい、しかし温かい道德的眞實に徹した體驗の披瀝である。

〔朝風と、海の匂と、星の空とが彼等を繞つてゐる。〕――今地獄の溫歷を終つたばかりの二人の旅人の眼に、耳に、肌に、何といふ新鮮な別天地が開けて來たものであらうか。光は遠い、しかし既に黎明の清らかな光の中に二人は置かれてゐる。そして「かくて我遙かに海の慄へを認めぬ」といふ一句は假令どんな憂愁に閉されようとも、最早死することなき希望を見出してゐる靈の顫動をひた〳〵と傳へて來る。まさしく淨罪界の黎明の氣分である。

〔ヴィルジリオは雙手を草の露に浸してダンテの頰を洗ひ、遜りの標（しるし）なる蘆を以てその腰を括る。この蘆は、折るに隨つて新に生ひ出るのである。〕――地獄の煤にまみれた頰を、煉獄の島の朝露で洗ひ、そこに生ひ茂つてゐる蘆で腰を括つて山に登る身裝ひをするといふことに寓せられてゐる意義の深さはいふまでもなく、さういふ動作そのものがすでに煉獄前界の旅らしい緊張と、清々しさと、なつかしさとを感じさせる。こゝの水際に生を保つてゐるのは唯打ち密せる浪に逆らはない蘆だけであるといふ。しかもそれが折るに隨つて新に生ひ出る永遠に生きぬく蘆である所にも、深い寓意が存するのであらう。

〔聖なる岸邊に來て未だ物馴れずたづきを知らねば、彼等はその熱心を喪失する。〕――新來の靈魂の狀態をいつたのである。感傷に融けこみ、鄕愁に陷るのもこの熱心の喪失に由來する。既に悔い改め、眞理に歸順したとはいへ、まだ眞理中心の生活の確立し具現してゐない、未熟な靈の狀態である。

〔カトーの叱責の後、ダンテは、人間的省想の模範なる彼のヴィルジリオが、激しき悔悟の痛みのために、あらゆる威嚴を忘れて大急ぎに山へ驅けて行くのを見る。〕――ダンテの導者ヴィルジリオの道德的性格のいかに純眞嚴密であるかをその行動として描いたもので、誠に印象の深い一章である。

〔此處では、牧歌的無活動の中にも、猶將來に於ける登攀の期待が交つてゐる。〕――懶怠の靈魂の幾群を見、その生活の無目標さ

を感じつゝも、地獄に於て、嘗ては學藝の譽高かつた偉大な人々の魂が、「その姿には悲もまた喜もみえざりき」といふ永遠に希望なき憂鬱の中に在つたのに比し、如何に幸福な狀態であるかを思はしめるものがある。

〔氣輕に他を助けんとする人の好さと、隣人の報償を豫期する人頼みなる打算との混淆がある、人間らしい利己主義がある。〕――煉獄前界に門の開けるのを待つてゐる靈の狀態である。假令既に淨罪を求める存在になつてゐるにもせよ、「凡常な性情」の常である「人頼みと注文」とが一杯で、互にもたれ合ふことのみを欲してゐる。この人々がこの門前にかく多くの月日を置かれるといふことは、ダンテにある警告を與へずには置かなかつたであらう。

〔汝如何なれば心ひかれて行くこと遲きや。〕――怠惰に在るものの一つの特色は好奇心である。ダンテは彼等の好奇心の對象となつて心散り、行旅の力をさへ失はうとした時、導者ヴィルジリオの發した戒である。これは、この篇の中にこの後も幾度か發せられる言葉で、嘗て地獄遍歷の際には、常にその導者から惡に同情することを戒められたダンテは、今淨罪界の旅に於ては、他に心を散らして時を徒費することを常にその導者から戒められてゐるのである。

〔風荒べどもその頂ゆるぐことなき強き櫓の如くにして立て。〕――前の警告につゞいて發せられたヴィルジリオの言葉であるが、人間らしい弱さに對する、人間らしい弱さの外の何物でもないやうな同情や同感を否定して、靈の淨化の爲には極度の人格の淨化と精神の集中とが肝要であることを示す眞に力強い譬喩である。

〔彼等は、樣々の花が寶石のやうに輝いて、千々の匂さへこれに加つてゐる夕の溪間の美しき草原に坐つてゐるのである。〕――煉獄前界に於て夜を待つ王侯のまとゐである。浮世にあつた時の尊貴と榮華が、この世界に於てもなほ、その性格と生活の上に匂つてゐる趣である。

〔憧るゝ一つの魂を首領取としたこの夕の祈につれて、守護の天使が、夕闇を貫ぬいて天降つて來る。天には三つの輝く星が現れる。〕――日が沈み、旅人の力が勉む時は、誘惑の蛇が這ひ寄る時である。その蛇を追ひやるものは守護の天使である。新しい日を豫約する信・愛・望の星の輝きである。そしてそれは夕の祈につれて現れるものである。「櫓の如くにして」強く立つと共に、この至心の祈なくしては靈の完成は不可能である。かくて夢と夜の魔とから離れることが、煉獄の山を登る準備として缺くことの出來ない條件なのである。

三　批評

カーライルが「沈默せる十世紀間の聲」といつたダンテは、中世的なるものの具現によつて永遠に徹し、イタリヤ的性情の體現によつて世界的に生きた詩人である。彼の「神曲」が嚴肅な道德的世界構造の表現として全人類の寶典であることはいふまでもない。

「神曲」中の煉獄は、地獄の旅によつて罪の眞相を見極め、靈の創造の國たる天國に近づかうとする靈のための、意志訓練の場所であり、罪の餘響からの釋放を全うすべき過程である。ダンテは旅人としてこの王國に入つた。未完成者としてこの成りつゝある靈魂の島に來たのである。われ〳〵はこゝに採錄せられてゐる煉獄前界の一日の上にも、かくの如きダンテの生長を見、「神曲」の偉大な力に打たれることが出來るやうに思はれる。

三　備考

一　指導の問題

（一）かなり取りつきにくい教材であらうと豫想せられる。しかしダンテ略傳を語り、「神曲」の梗概を補說することによつて大體その障礙は取除かれると思ふ。

尙この章そのものについても、かういふ山島なり、そこで見聞する事實なりが象徵してゐる人生の體驗的事實が、この年齡の青年には理解し難いものであらう。しかしこれは先づそのヴィジョンをはつきり得させることに集中すれば、案外よく理解せられるかと思はれる。こゝに寄託せられてゐる理念世界よりも、こゝに表現せられてゐる「神曲」作者のヴィジョンを出來るだけ明白に想像に描かせたい。それによつて、與へられた概念としてではなく、もつと直接なものの自覺としてそれが學習せられるであらう。

煉獄山麓の朝の引緊るやうなすが〳〵しさと、その夕暮の淨らかな靜かさとは、「神曲」の構成に於けるこの篇の位置をよく物語つてゐる。生ける者として遍歷を許されたダンテは、地獄と煉獄とは詩人ヴィルジリオを導者とすることによつて、天國はベアトリーチェの導きによつて、學びつゝ、自らを完成しつゝその旅を果し、その目的に到達する。ダンテが常に導者を必要とする未丁年者としての旅人であることは常に念頭に存しなくてはならないであらう。

（二）生徒に「神曲」の構成と煉獄そのものの構造とをわからせた上に、本文は、地獄を出て煉獄前界に達した二人の煉獄登山の第一日であることを理解させなくてはならないであらう。最初に置かれ

てある煉獄の島そのものの構造と意義、次にそこへ辿りついたダンテとヴィルジリオの旅の筋と意義が理解せられなくて叶ならない。その上でそこの第一日に見聞した事實の數々といふやうなものが理解せられ位置づけられなくてはならない。わけてもさういふ見聞によつて發展して來る爽なる靈の完成への過程が見逃されないやうに注意しなくてはならないであらう。

(三) 一語一句、一事一物に於ける象徴的意義が、讀みを重ねるにつれて發展し來るであらう。これを一々掲げ說くことは煩雜で、却つてその意義の深さを失はしめる結果に陷るであらう。漸次的理解の方法をとることが肝要と思はれる。しかしその一つ〳〵が地獄・煉獄・天國といふ世界構造に於ける關聯に於て、又その地獄と天國とは努力的存在の終點であり、煉獄は努力的存在そのものであるといふ意義に於て、理解せられるやうな心準備をさせて置くことは肝要である。

(四) プラトンが古代の、ダンテが中世の、ゲーテが近世の代表的哲人であり、詩人である意味に於て、ダンテが體現してゐる中世的なるものを見出させることも肝要な學習であるが、恐らくこの學年程度の教養からはそれが指摘は困難かもしれない。唯中世が神に憧れる意志的文化の時代であるといふ特質は十分感銘せられるであらう。そして漠然とながらも、向上する靈の内景が、刻々に生活建設にいそしむ眞摯な努力の悅びが生徒各自の心の何れの部分になり感銘されゝば、本課の學習の意義は果されたといつてよいであらう。

二　參考資料

(一)「神曲」の梗概及びその中心思想等について記す。

「神曲」(La Divina Comedia)はその三部、地獄・煉獄(淨火)・天國(天堂)を合して百曲、一萬四千二百三十三行から成り、ダンテが、その迷の生活から救はれる爲に、特別の恩寵により、初は古ローマの詩人ヴィルジリオ(人間理性の象徴)の靈、後にはベアトリーチェ(神の眞理の象徴)の靈、最後の少時を聖ベルナルド(直觀の象徴)の靈に導かれ、現身を以てこの三つの世界を遍歷したことを描いたもので、一面から見れば靈魂の死後の狀態についての驚くべく生き〳〵としたヴィジョンの創造であり、又人間のあらゆる思想・行爲・性格に對する永遠の立場からの嚴正な批判であると共に、他の一面から見れば、ダンテ自身の人格完成の歷史であつて、しかもその根柢に於ていへば、ベアトリーチェに對する愛と信との異常に高められ、鍊へられた心情の披瀝に外ならない。

その筋は、人生の旅の半ば(三十五歲の頃)に、荒れた恐しい暗い森(迷ひの生活)の中に徘徊しつゝあつたダンテが、ある山の麓(有德の道)で太陽の光(神から出る眞理の光)を認め、これに登りたいといふ望を起したが、肉慾・慢心・貪婪の象徴である豹・獅子・狼の三匹の猛獸が道を塞いで進むことが出來ないので殆ど希望を失つてゐた時に、ふと一人の人影が見えたのでこれに助を求めると、それは中世の人々が詩人中の詩人、賢哲中の賢哲と崇めてゐた、又ダンテ自身深く私淑してゐたローマの古詩人ヴィルジリオの靈で、ダンテに勸めるに三界の遍歷を以てする。ダンテは未だ生きて通り過ぎた人のない道を肉身のまゝに旅するといふおほけなき企の前に恐れをなしてたじろぐ。しかしヴィルジリオが更に、自分はダンテが暗い迷ひの中にあることを深く歎いてゐる天上なるベアトリーチェの依囑によつて、ダンテの導者たるべく現れ來つたものであることを語つて勵ましたので、ダンテは遂に意を決してこれに隨ふ。

ヴィルジリオはダンテを導いてまづ地獄の門をくゞり、悔悟を知らぬ靈が永遠の呵責を受けつゝある世界に入る。歎き・悲しみ・苦患・罵詈・呪詛の聲の中に、暗く汚いその九圈を巡つて、ダンテはあらゆる罪人とそのみじめな受刑の樣とを見、遂に惡の根源たる大魔師ルチフェロの居せられてゐる地獄の下底に達し、そこから他の半球に通ずる暗い細い道を導かれて黎明の地表に出で、悔悟した靈が自ら淨めつゝある南海の孤島、煉獄の山の麓に出る。山側を繞る七段の段丘を攀ぢつゝ、ダンテは其さに罪の淨められて行くさまを見、己も亦淨められつゝ、遂に地上の樂園に達し、こゝで天國から降つて來たベアトリーチェに逢ひ、その導で天堂へと上昇する。

天國では初の七天に於て、生前に天の威力を感じて善い生活を營んでゐた人々、卽ち明王・賢主・英傑・勇士・高僧等の靈が各〻その座に從つて淨光の中に道悉しつゝあるを見、第八天ではキリストの凱旋を見、使徒達に信仰・希望・愛に關する試問を受け、第九天を經て至高至聖の第十天に達する。ベアトリーチェは彼女の榮光の座に歸り、聖ベルナルドが代つて導者となる。ダンテは諸聖徒の座たる天上の大菩薩の莊嚴を見、聖母の溫容を仰ぐ。榮光の中に三位一體、神人兩性の神祕が啓示され、ダンテがこれを會得したいと願ひつゝ力が及ばないでゐると、一道の光が心を射て、その願を滿たす。——ヴィジョンはこゝに終つてゐる。この遍歷に要した時間は約七日である。

「神曲」は全宇宙を舞臺とし、ギリシヤ・ラテンの古典及び哲學と歷史と宗敎とを渾融した一大繪卷であり、中世學藝の一切を包藏した一大殿堂である。しかしながらその根柢をなすものは痛切な魂の問題であつて、一行といへどもそれに觸れ又はそれを反映してゐないものはないといへる。

今これに表れたダンテの宗教思想の大體を見るに、彼は人生を罪の束縛を逃れて自由を得、遂に永遠の祝福に至るべき行路と見てゐる。人間は幼時は罪なく淨らかなものに見えるが、この狀態は長く繼續し得るものではない。生來具有してゐる罪の萌芽は機を得て成長し、その爲に遂には正しい道を失ふに至るものである。罪の生活は人間にとつて否定しがたい事實である。

ダンテが煉獄・天國の前に地獄を置いたのは、隨つて彼が救はれる爲に第一に罪の世界を旅しなければならなかつたのは、罪の生活を脱するにはまづこれを眞に認識することが必要であるとしたものと考へられる。罪の厭ふべきものであることを眞に知ることによつてのみ、われ〳〵の心は根柢から淨められることが可能になる。而して人間に罪の恐しさを知らしめ、正しい道に歸向させるものは第一には理性である。これは人間が生得的に有する働で、神の特別の恩寵を俟たずして凡ての人の有する力である。ダンテはこれを表すに非キリスト教的詩人ヴィルジリオを以てした。理性の指導により、罪惡の認識の生ずる處に眞の生活が始る。

地獄の旅に於ては、一圓を下る毎にダンテの罪の認識が深められ、初め罪人に同感して昏倒したダンテも後にははつきりとこれを否定し得るまでに成長した。しかし彼は未だ直ちに天國に至ることは出來ない。行爲に於ては既に罪を離れても、心中にはなほ罪の根が殘つてゐる。これを除き去らずには眞の自由は得られない。ダンテは再び理性に促されて自由探求の旅に出で立つ。これが煉獄の旅である。かくて遂にエデンの園に到れば、理性は既にその任を了へる。更に天上の樂園に昇るには、神の恩寵を俟たなければならない。ダンテはこれを表すに靈の美に輝くベアトリーチェを以てした。

これを要するに、理性も神の攝理の外にあるものではなく、愛卽ちベアトリーチェの使である。ダンテが嶮しい淨罪の山を登るのも根本は愛によるのである。しかしそれは表面に現れず、導者は理性卽ちヴィルジリオである。天上の旅に於て始めてベアトリーチェがあらはに導者となる。卽ち理性は神の攝理中に存するとはいへ、それは人間生來の光であつて、自然的の眞理は天來の光によつて補はれねばならぬ。こゝに理性と恩寵との關係が示されてゐる。（この思想の基礎をなしてゐるのはトマス・アクイナスの神學である。）

「神曲」の中心思想は敍上の如くであるが、決して一篇の敎訓詩でも比喩歌でもなく、實に作者の個に徹して普遍に通じた偉大な人間性の披瀝であつて、篇中の人物はもとより、その背景をなす森羅萬象の描寫の眞實さ、その韻律の必然さ、その渾然たる雰圍氣等は永遠に人の心を打つものがある。尙この詩篇が當時の文學語たるラテン語でなく、俗語であつたフローレンス語で書かれ、イタリヤ文學の起原となつたことは、文學史上特に注意すべき點である。

その成立の年代は、「地獄篇」は約そ一三〇〇―一三〇八年頃、「煉獄篇」は一三一三年といはれ、「天國篇」はダンテの死の少し前に成り、遺稿として世に出た。

（二）「神曲」の宇宙構造について、中山昌樹氏の「ダンテ神曲の研究」から抄出する。（各部の名稱等に就ては、河部氏や山川氏と譯語を異にするものが少くないが、當時は只も切腹であるからそのまゝにして置く。）

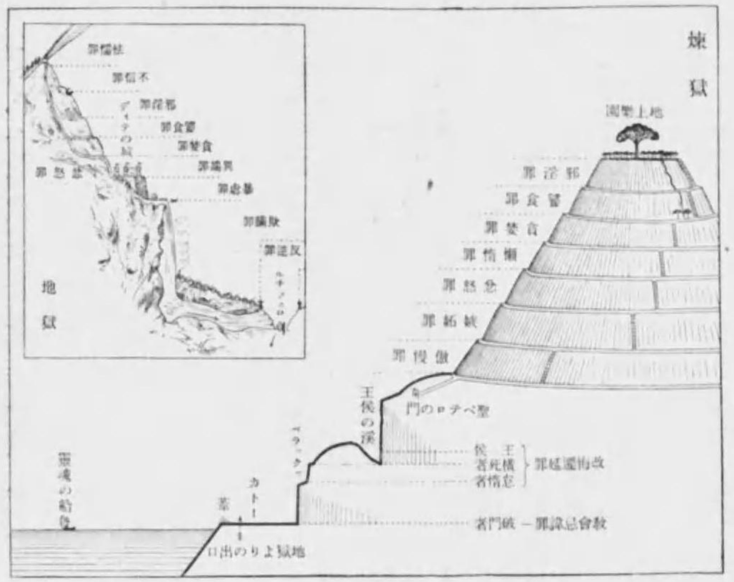
ダンテの天文はプトレマイオスの天動說であつて、地球を宇宙の中心として、諸星これを周行する。ダンテの地獄は、地心を尖頭として逆倒せる大圓錐形の坑である。下方にくだるに從つて狹くなり、坑を竪に二等分する線は、聖都エルサレムのゴルゴダの丘を通過する。九界より成り、二區分に大別せられ、上部に於ては放縱罪、下部に於ては邪惡罪が所劃せられる。そしてダンテは更に罪惡を次の如く細密に分類してゐる――

地獄邊外　怯懦罪

第一界　不信罪
第二界　邪淫罪
第三界　饕食罪
第四界　貪婪濫費罪
第五界　怒怒罪
第六界　異端罪

ディテの門

第七界　暴虐罪
　(一) 他人暴虐罪
　(二) 自己暴虐罪（自殺罪、財產蕩盡罪）
　(三) 瀆神罪、男色罪、高利罪
第八界　欺瞞罪
　(一) 婦女誘拐罪
　(二) 阿諛罪
　(三) 「シモニア」罪（聖職賣買罪―編者註）
　(四) 卜筮罪
　(五) 瀆職罪
　(六) 僞善罪
　(七) 竊盜罪
　(八) 陰謀罪
　(九) 擾亂罪
　(十) 詐僞罪



「神曲」煉獄及び地獄構造圖

第九界　反逆罪
(一) 血族背信罪
(二) 黨與背信罪
(三) 賓客背信罪
(四) 忘恩罪

魔王ルチフェロ

地心より一條の峻しい路が通じてゐて煉獄に達する。煉獄は南半球の大洋中に屹立する淨罪山であつて、魔王ルチフェロが天より地獄の奥底に落ちた時、地が他面へ脱出して成つたものである。正確にエルサレムの裏臍點にある。前煉獄(Antipurgatorio)、本煉獄、および地上樂園(Terrestris Paradisus)の三區分より成りて、次のごとく細分せられる——

前煉獄一　教會忌諱罪
前煉獄二　改悔遷延罪(臨終の際迄)
前煉獄三　同　上(横死の際迄)

第一臺地　傲慢罪
第二臺地　嫉妬罪
第三臺地　忿怒罪
第四臺地　懶惰罪
第五臺地　貪婪罪
第六臺地　饕食罪
第七臺地　邪淫罪

地上樂園

天國は、地球を中心とせる九天界より成る。卽ち次の如し——

第一月　天　破戒の諸靈
第二水星天　大望野心の諸靈
第三金星天　戀愛の諸靈
第四太陽天　賢者神學の諸靈
第五火星天　信仰の戰士の諸靈
第六木星天　正義の諸靈
第七土星天　瞑想の諸靈
第八恆星天　諸聖徒集合處
第九原動天　諸天使集合處

第十淸火天　神の聖座

以上諸天のうち最初の三天は、存命中、地上の誘惑に負けしため不完全であつた者等に割り當てられる。次の四天は、善き動機によりて行動した者等に割り當てられる。恆星天は諸聖徒の集合處であり、原動天は諸天に運行の力を與へる天であつて、天使達の集合處である。以上九天の外に非物質的で、時間もなく空間もない不動の淸火天がある。たゞ光があるのみで、これは神の聖座であり、また諸聖徒の永遠の休安處でもある。

「神曲」天國構造圖

(三) 煉獄に於ける淨罪の意義を見、且そこに於けるダンテの生長の跡を辿る爲に、原文の本文に續く部分を抄出する。

煉獄本界の巡禮に定められた次の二日は、凡そこの登山全體の、柔かに人間的な基調の内部にあつて可能である限りに於いて、第一日の情調と對照をなして力强く浮き出してゐる。あこがれの緩かに朧ろな響きの次に、嚴厲な巡禮旅行の激しい拍子が從ふ。

薄暮な自然の限界を越えて高められむことを祈る者の上に、恩寵が天降つて來る。ダンテは夜の眠りの中に煉獄本界の門の前まで運ばれる。救濟を求める願望の上に、今や力が附け加へられる。再び醒めた靈魂は、自ら裁き、悔い、罪を改める。山登りの旅の此部分を吹き通すものは、男らしく力强き、又朗かな調子である。〔中略〕巡禮は遲く可からざる懲罰の、嚴格な規律に服して、自己の意志を鍛錬しなければならない。〔中略〕

我等は二度靈魂の薄明を體驗して來た。地獄の入口と煉獄の山の麓とに於いて。彼の夕暮の薄明から我等はきつぱりとして惡の夜に下つた。併し軟かに定かならぬ自然の、この晨の薄明の中から、我等は決定して善に向ふ意志の明るい晝に昇つて行く。さうして遂に神の本質そのものの永劫の光明の中に自らを高める。山の頂きなる地上樂園に於いて、人間の善は完成して神的なるものの中に移行する。

ダンテが改悔のことを思ひつゝ煉獄の門の前に進んだとき、門を守つてゐる一人の天使は劍の尖を以て彼の額に七重のP字を書く。それは七つの主罪(Peccata)の表徵であつて、今靈魂はこれを意識し、純淨の靈となるためにこれを拭ひ去らむと努むるところのものである。ダンテは天使の警告に從ひ、後を顧みずして門内に進み入る。

煉獄に於ける善き戰ひは、外部的强制なしに戰はれる。如何なる鬼物も、又煉獄前界に於けるが如き如何なる監視者も、靈魂を其奉仕にかり出でる者はゐない。内面的强制のみが彼等を驅り立てる。彼等は自然の支配を脱することによつて、自由の立法の下に歩み入る——彼等は自律に堪へるまでに醇熟する。自ら遜つて贖罪の業に從ふことによつて、彼等は自己の運命の自由な主人となる。

外面的に見れば、改悔せる靈魂も地獄に於て罰せられたる者と同じやうに苦惱する。併し後者は呪はれた者、贖ふ可からざる罪惡のために怨々として苦惱する者である。前者は惱み多き勞苦に於いてその過誤を洗ひ去る者である。此處では「燒くることによつて傷は閉づる」。幸を齎らし、高みに運び行き、若返らしむるところの辛勞——

われは貴苦といふ、まことは慰と云ふ可きもの。

(煉獄、第二十三歌、七二)

七つの段丘の中、最も下部にある、最も苦痛多い三つに於いては、社會を害する罪が——傲慢と嫉妬と憤怒とが洗はれる。

第一層に於いて、人々はその自負の巖を負うてゴシック建築の「肱木人形」(ヴァーヴァーヴァーヴァー)のやうに屈んで行く。自分も亦重くその罪を負うてゐることを知つてゐるダンテは、同じやうに身を屈めて心に改悔の重荷を擔ふ。彼はその追放のことを——謙遜の學び舍のことを考へる。〔中略〕此處にはダンテの先輩若くは友人なる多くの大藝術家がゐる、文藝復興の刹子で、新興時代の意氣を以て相爭つて來た人達がゐる。

歴史を讀むとき、人類は彼等の上に立つ道德法の支配を豫感する。過去の幻影や善と惡との實例が、改悔者の途に伴つて彼等に洞察を與へる。彼等の生涯は、地上の存在の忠實な映像として、時間の不思議な織合せである。彼等は現在に勞苦し、將來に心を向け、過去に鑑みて自ら形成する。傲慢な者の圏には輝く大理石の帶(ウ)が繞つてゐて、其處には地上では見ることもなき巧工を以て傲慢と謙遜と、闇と黄昏との物語が刻まれてゐる。この雄辯なる巖壁に沿うて、「同じ軛に繋がれて牛が牛と竝び行くが如く」、ダンテは重荷を負へる魂と歩調を合せて行く。道を急ぐギルジリオの戒告によつてその肉身は屈みを直くしても、ダンテの思ひは、もとのやうに、屈みて且つ低きがまゝであつた。

段丘の果にその上層への狹き出口がある。一人の天使が、追ひやるがためならず、嗣するがためならず、唯悔い改めた魂が他層に移り行くに際して、其者自身の業蹟を確證せむがために、門を守つてゐる。神の恩寵は、自ら罪からの自由を得た魂を吸收する。悔い改めの熟したとき、門を守る天使は上層に登り行く魂の額から一つのPを消し去る。合唱は響き渡る——進みの抄取れることを告ぐる嬉しき知らせが、他の巡禮達の心を輕くするのである。

凡そ淨福に到るべきあらゆる魂は七層の悉くに於いて悔い改めなければならぬ。併し彼等の性情の種類に從つて、或層には長く或層には短き時を費すのである。故にダンテは第二層をば第一層よりも速かに通過することを許される。此處には、始、深き者が盲ひたる乞食として、巖壁に凭れ合つて蹲つてゐる。凡ての者が他の者の憐憫に頼らなければならない。彼等は貧しき者の中最も貧しき者と共感することを習ふ。

自己征服の第二段が攀ぢ登られた——社會的良心が目醒める。地獄に於いては、一切が一切に對して戰ふことが自然に從ふ生活であ

つた。又群集的に生き且つ生きさせること、これが煉獄前界に於ける善良な投げやりな社會性であつた。今や個人と個人とは一つになつて成長する。有機的な人間社會が形造られ始める。この根柢となるものは同情（コンパッション）である。〔中略〕

今や第三層の對照は明瞭である。其處には爭ひを好む人々が、冬の夜の暗さを以てその眼を覆ふ腐蝕性の煙の中に彷徨する。この煤臭き憤怒の瘴氣の中に於いて、諸靈は平和な心を求めて祈つてゐる。さうして彼等の穩かになれる聲は、遂に和聲をなして互に應け合ふのである。〔中略〕

併し第四圏に於いて――其處には懶惰な者が悔改めのために自ら勵まして驅走してゐるのである――夕の疲勞が我等の旅人を襲ふ。登山の第二日は了つた。煉獄本界は既に半ば通り抜けられた。

目が沈むと共にダンテの靈も勉みを疊える。ギルジリオが罪惡に就いて話して聞かせてゐる間に、ダンテは睡に因はれる。暫くの間は、微睡に醉ゑる者の彷を山を登り行く改悔者の影が吹き過ぎるが、間もなく彼は夢といふ第二の現實の中に歩み入る。さうしてこの夜も亦、贅澤の母なる懶惰の圏に於いて、誘惑が近いて來る。自然は、日中の强制に反抗して、夜になれば守りなき心の中に立蹲る。美しき歌を唱ふ Sirene（シレーネ）がダンテの夢の中に紛れ込む。

誠に旅人は、隣人を傷くる傲慢と嫉妬と性急との罪と戰つてこれを悔い改めた。併し彼は最早他人の權利を損傷することがない以上、自分の快樂を覗つてはいけないだらうか。この夜の靈魂の狀態は、普通の社會幸福主義的道德に似たものである。利他主義の三圏は既に遍歷したが、個人的禁欲の諸圏はまだ殘つてゐる。眠れる者はまだ甘美な官能の幸福を禁遏するには至らない。その時夢そのものが眞理の發見を助ける――シレネの衣が裂ける。さうして妖婆の正體が嘔吐の情を誘つてその夢を醒す。目は晨となる。

新鮮な力を以て、最後の三層――貪欲と奢侈と好色――と戰ふ可くダンテは身裝ひする。彼の登攀は益〻輕い、翼のあるものとなつて行く。

第五の貪婪者の層には、塵を食とする改悔者の中に、最近に死んだ法皇の、大地に身を投げた姿も交つて見える。かれは地上の財寶が、如何にその聖なる職分を辱めるかを悟つてゐるのである。

第六層には豪奢な者が痩せ衰へて斷食しながら巡禮してゐる。併し此處にも亦苦痛は刑罰でなくて救濟を意味する。

かくて靈魂は、最後の贖罪を前に見つゝ、五月の晨の風が花と草原との匂ひを齎すが如く、輕く旅人の頰を打つ天使の翼をくゞつて、最後の層に急ぐ。

それは天國の豫感である。併し我等が酷しく趣味乏しき煉獄の學舎を出でて其處に著く前には、最後の層を遍歷しなければならぬ。其處では燃え立つ炎の海の中を、好色者が漂ひ行くのである。山頂に導く道は炎の中を貫く。ダンテも亦このことを經驗する――第一の傲慢な者の圏に於けるが如く、彼は又最後に、その官能の火の中を彷徨ふ人間達の間に於いて、特に悔改めなければならぬ素質を持つてゐる。

彼は燃え立つ大火の中に飛び込むことを躊躇する。彼の記憶には嘗て見た火刑柱の火が蘇つて來る。

併し今や、登山の終局に當つては、如何に恐ろしげに見える障碍も、最早征服し得ぬものではない。今は最後のPを額から取去るべきときである。然らざればダンテは地上樂園に、罪を洗へる自然の圏内に、踏み込むことを許されない。唯この渦卷く炎を過ぎれば――その時世界に證かれた最も貴いものが彼にとつて現實となる。ベアトリーチェの名を呼びつゝダンテを勵ますギルジリオの言葉には、ダンテの標的の既に近いことを裏切る、かすかなる調戯（おどけ）の底調がある。

戰慄と憂悶とを以て、されど決然として、ダンテは通り抜ける。彼はエデンの入口に立つてゐる。登りと思ひ遣りとの心勞は擧りとなつた。義務の敍事詩は我等の背後にある。一人の救はれた魂、詩人 Statius（スタチウス）が、快活な心を以て二人の道連となる。

煉獄を後にするに至つて、詩の呼吸も亦肆かになる。切り抜けて來た勞苦と、心を攪む對照をなしつゝ、報償の歡喜が開けて來る。吾々の感情が味ひ耽ることを許されるのは、再び、廣やかなる、聖く美しき風光である。併し、それは、黄昏れつゝ甘く物思はしげなる、煉獄前界の自然が歸つて來るのではない。清朗な平和が、救はれたる巡禮を煉獄の詩の第三にして最後の部分に受納れる。

第三部は美しき夜の夢を以て始まる。ダンテの登山旅行の中に挾まる三夜のうちで、これは最も靜かな夜である。詩人は Rachel（ラケル）と Lia（リア）との夢を見る。瞑想的なると活動して休まざると、この二人の姉妹は淨福を互に分有するものである。リアはその手の動くところに花咲くことを見る、ラケルは唯彼女自らの自體を靜觀する。二人の姉妹は Vita activa（活動の生）と Vita contemplativa（瞑想の生）との象徴である。この二つの執れに於いても靈魂は淨福を享けることが出來るのである。

夢裡の情調は醒めて實現する。更に數段を昇れば、其處は永遠の春である。純淨な、太陽の平和は、山の頂に於いて二人の旅人を照す。此山を繞るものは無限なる天空の水平線である。併し山の頂に

迫り著けば、ダンテの眼と思ひとが樂園の森の爽かさに向ふ迄もなく、二人の友の嚴かな別れが迫つて來る。ギルジリオは成熟せるダンテをその保護から解放する。固より、猶暫くの間、二人は共に樂園を逍遙するであらう、さうしてダンテがよりよき手に渡された後、ギルジリオの別れは氣付かぬ間に行はれるであらう。併し最後の岩階を登り果れる今、既にギルジリオはダンテを過するに成年を以てする。道德的に成熟を遂げて自由に到達した靈魂には最早後見の必要がない。ギルジリオはその友に對する使命を果した。彼は感動せる言葉を以てその友に告げる——ダンテは今地上の理性の、外よりする命令を卒業して、已れ自らの法則となつた。さうしてベアトリーチェによつて具現せらるゝいと高き力が、天上の輝きの中に彼を導くまで、彼は待つてゐて差支ないのである。

ダンテは地上樂園の中に立つ。彼はその中心から最高の高みに至るまで大地を測り究めた。更にこの上に導くものは足ではない。詩はその目標に達したやうに見える。

併しダンテには猶天上の樂園が鎖されてゐる。かくて今や全篇の最大なる轉調が準備せられる——時間に於ける靈魂の發展から、超時間の觀照(シャウエ)へ、登攀から飛翔への過渡。〔中略〕

ギルジリオがダンテを解放するに至つて、神曲には差當つてはもう何の緊張も何の問題もない。自然と道德律と、渴望と義務とは一つに融合した。エデンの園には何の鬥爭もゐない。靈魂は自由に逍遙する。さうしてダンテもまた、觀照に沈潛して壯麗な春の中をさまよふ。併しこの地上に於て此の如き平衡を得た受用(ゾユーセング)は純眞な少年の輕い足取を除いて何處にこれを發見すべきであらう。かくて旅人がこの幸福の野の野守として出逢つた者は、花を摘みつゝ獨り踊つてゐる處女である、憂ひを知らぬ Matelda(マテルダ) である。

觀照に耽つて、最早彼の後から來る友と言葉を交すことも忘れたダンテは、今マテルダと並んで樂園を縫つて行く、たゞ二人の間を流れ行く Lethe(レーテ)の河が彼をその匂へる友と分つてゐるのである。驚く可き美しさに充ちた詩句に於いて、彼女は新來の人に樂園の驚異を物語る。さうしてその世界巡りに於いて、唯この一度のみかゝるおほらかな悦びの微笑を覺えた旅人は、彼女の言葉によつて「聖き廣野」の歡樂の更に深められることを感ずるのである。

カトーとマテルダとは淨罪界を容るゝ框である。カトーは斷言的命令の權化、形式的純粹意志の硬固なる摘め難さを示すものである。マテルダは純眞(ポシエスト)の權化、戰ひと分裂となき內容的純粹意志である。兩者は道德生活の限界概念を表示する——彼等の中間に善に向ふ人間的發展が行はれるのである。併し一度罪人であつた人間は、其處に停るためにエデンの園に踏み入るのではない。山の麓に於けるが如く、山の頂も亦彼を休息させない。「聖き花園に續くは聖き都、花を摘みつゝ一人夢みるマテルダに續くは、世界と共に廣き純淨の社會を漂泊の靈に開示するベアトリーチェである」。存在はマテルダに於いて、カトーに於けるよりも更に幸福で更に積極的である。併し世界を——その純眞をも罪をも、光をも影をも——知れる精神はマテルダの愛らしさに含まれてゐるよりも更に具體的な內容に向つて努力する。それは地上を越えた翱翔に彼を迫ひやるのである。

固よりダンテはこの瞬間に當つて哲學を說いてゐるのではない。彼は導きに從ふ。さうして今や彼の目前に開けた靈象に對して、眩惑して立つてゐる。何となれば彼を受取つて天界に連れ登るために、天上の樂園に住む人々が天降つて來たからである。

榮光と音樂との中に祭りの列は近づく。聖衆に取卷かれ、獅子身(グライフ)鷲(ヒ)に曳かれ、花に覆はれて、凱旋の車が輕々と寄つて來る。その上に、未だ帛紗に包まれてベアトリーチェが坐つてゐる。さうしてダンテの心には幼時の戰慄が蘇つて來る。

ダンテは、恰も怯えた子のその母にするが如く、ギルジリオの方に振向く。併しまめやかなりし友は消え失せてゐる。天上の照明が

思寵を蒙れる信者の靈魂に言葉をかけるとき、人間的理性は最早なすべきことを持たない。

ギルジリオは去れり、我を殘して、
ギルジリオ、わがなつかしき父、
ギルジリオ、救ひを求めて我身を委ねし人。
（煉獄、第三十歌、四九—五一）

其處に女性の聲が車から響いて來る——

ダンテ、ギルジリオ去れりとも
泣かざれ、今は泣かざれ——
汝は異れる劍の傷にこそ泣くべきなれ。
（煉獄、第三十歌、五五—五七）

それこそ悔いの劍である。ベアトリーチェがこれを用ゐてダンテの心臟を剜れるは。

此等の激しい裂くやうな言葉と、地獄と煉獄の旅路に於けるあらゆる辛勞の後に地上樂園に於いてせる再會のこの酷しさとを見て、如何なる讀者か最初に一驚を喫せぬ者があらう。ベアトリーチェの面前に於ける一瞬間の中に、ダンテはその生涯の罪過と贖罪との全體を再び體驗する。それは昔ながらのベアトリーチェである、「嚴峻なる憐憫」である。詩人の靈魂を根柢から震慄する古き戀愛感情が

此處に再び蘇る。

われ目を浸める泉に垂れつゝ、
されど其處にも我姿を見て、我之を草に移しぬ、
羞恥はかくもわが顔を赧しき。

（煉獄、第三十歌、七〇―七八）

天使の群がダンテのために憐憫を請ふが、ベアトリーチェは容易にこれを宥さない。ベアトリーチェを忘れた彼の生涯の罪過を嚴しく責めた後、彼女は始めて彼女を見ることをダンテに命ずる。

その時ダンテは始めて眼をあげて氣高き者を見る。さうして羞恥と喪神とのために身の支へを失ふ。この再會の苦痛によつて、今や始めて過去が永劫に洗ひ去られる。マテルダは喪神せる者をレーテの水に浸けて、その罪業の記憶を拭ひとり、彼方の岸に彼を救ひ上げる。其處では唯生涯の善行のみが記憶に殘るのである。ダンテはベアトリーチェの車を繞る聖衆の中に受容されて、靈の國へ歩み入る。

山の麓に於いては到達點と見えた幸福の園も、今、より高き使命への通過點となる。神曲は一つの新なる、非常なる飛翔を敢てする。照明は今ダンテを、單なる理性の限界を越えて、洞察の深みに運んで行く。〔中略〕

マテルダの樂園的自己受用を出でて、ダンテは更に高き淨福に進み入る。其處で彼は「永遠の見地の下に」政治家となり、教會の監理者、說教者、豫言者となるのである。神の智慧ベアトリーチェと共にあることによつて、ダンテは永しへに全然個我を離れて、その心を人類の祥福と憂患とに傾ける。

かくて淨罪の山の歌は誓を歌める。マテルダに見える遊びの心は吹き散されて、嚴かな天國は旅人を已れに呼ぶために降臨した。さうして愈〻天翔る前に、樂園の川 Eunoe の浴は新なる理解と飛翔の力とを旅人の靈に降すのである――

我いと聖き流より歸れば、
恰も若き木に若葉出でて、
新になれる如くすべて改りつ、
淨らかに、諸〻の星に行くに相應しきまで。

（煉獄、第三十三歌、一四二―一四五）

一四　人間ゲーテ

茅野蕭々

一　解題

一　本文

「ゲョエテ研究」の「序」の前半を採つた。（ゲョエテ研究　昭和七年七月、第一書房發行）

「ゲョエテ研究」は、ゲーテの詩作に關する考察を主題とし、併せてゲーテの生涯を詳述した論著で、作者が慶應義塾大學文學部に於て試みた講義を基礎としたものである。

二　作者

茅野蕭々。本名は儀太郎、初め暮雨と號した。明治十六年三月長野縣諏訪郡上諏訪町に茅野鈎太郎の長男として生まれた。第一高等學校を歷て、四十一年東京帝國大學文科大學獨逸文學科卒業。同年第三高等學校教授に任ぜられ、大正六年慶應義塾大學文學部獨逸文學科教授となり、傍ら日本女子大學校の教授を兼任した。十二年近代歐洲文學研究の爲ドイツ・オーストリヤに留學し、十四年歸朝。昭和十一年「ゲョエテ研究」及び「ゲョエテと哲學」により文學博士の學位を得た。現に前記二大學の教授である。

夙に詩人・歌人として明星派に重きをなし、現在は主としてドイツ文學研究に專心してゐる。著書には「ゲョエテ研究」の外、「世界文學思潮」「獨逸浪漫主義」「ファウスト物語」「ファウスト」「ゲョエテと哲學」その他、譯書には「獨逸戲曲集」「リルケ詩集」「若いヱルテルの惱み（ゲョエテ）」「ダマスクスへ（ストリンドベルク）」「繪なき繪本（アンデルセン）」「絲の鷄鵡（ツツルケ）」「自然主義的戲曲（ストリンドベルク）」「令嬢ユリエ（ストリンドベルク）」「母の歌と愛撫の歌（フレヨエルセン）」「自然主義的戲曲」（小宮豐隆と共譯）等があり、その他にもドイツ文學に關する飜譯・述作が多い。

三　採擇の趣旨

前々課がヨーロッパに於ける古代文化を代表する哲人プラトンの思想であり、前課が中世文化を代表する詩人ダンテの作品の解說であつた後を承け、本課には近代文化を代表する詩人ゲーテの評傳を揭げることにした。これが世界的文藝の一端に觸れしめることによ

つて、日本文藝の特質を明らかにする爲に外ならないが、同時にそこに來るべき日本文藝の問題を考へさせるものがある。文藝的教材であり、文化的教材である。

二　教材としての研究

一　註解

【ゲーテ】　ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ(Johann Wolfgang von Goethe)。ドイツの大文豪。ダンテ・シェークスピヤと共に世界の三大詩人と稱せられる。西暦一七四九年八月ドイツのフランクフルト・アム・マインに生まれた。天分の優れてゐた上によい環境に惠まれて、少年時代から藝術・語學等の興味を養つた。一七六五年法律の勉強を目的にライヂチヒ大學に入り、病氣の故に退學して再びストラスブルグ大學に入り、法律の外自然科學・醫學等の講義を聽き、又ヘルデルに師事してホーマー・オシアン・シェークスピヤ等を學び知つた。一七七一年法律得業士の稱號を得て歸郷、辯護士を開業したが、寧ろ文學に強い興味を抱き、所謂シュトゥルム・ウント・ドゥラング(Sturm und Drang(獨)「嵐と衝動」の意で「疾風怒濤時代」などと譯される。十八世紀末約二十年間ドイツに起つた文學革新運動。又、その時代)の文學者として活躍、「ゲッツ・フォン・ベルリヒンゲン」(Götz von Berlichingen)及び「若きウェルテルの悲しみ」(Die Leiden des jungen Werther)を發表して全ドイツ、否全ヨーロッパに名を成した。一七七五年ワイマール公國に招かれ、カール・アウグスト公を輔佐して幾多政治上の功績を擧げた。(晩年親しまれてこゝに定住した。)この頃から漸次シュトゥルム・ウント・ドゥラングの狂騒的傾向を離れて、寧ろ古代藝術の調和美を理想とするに至り、「イフィゲーニエ」(Iphigenie auf Tauris)・「タッソー」(Torquato Tasso)等の古典主義的戯曲を作つた。一七八六年より八八年までイタリヤに旅行し、南歐の藝術、特に古代ギリシヤの彫塑・建築等に親炙して一層その傾向を深め、歸國後は政治上の實務から離れて宮廷劇場の監督とイェーナ大學の指導とに當り、創作と科學の研究とに沒頭した。一七九四年シラーと邂逅し、以後約十年間、密接に相提携してドイツ文學の黄金時代を現出せしめ、「ウィルヘルム・マイスターの修養時代」(Wilhelm Meisters Lehrjahre)・「ヘルマンとドロテア」(Hermann und Dorothea)等を發表した。一八〇五年シラーの病歿に遭つたのをはじめ、或は妻子に先立たれ、或はアウグスト公と衝突して劇場の監督を免ぜられる等、種々の不幸に見舞はれたが、その文學的活動は不斷に繼續し、「親和力」(Die Wahlverwandtschaften)・「詩と眞實」(Dichtung und Wahrheit)・「ウィルヘルム・マイスターの遍歴時代」(Wilhelm Meisters Wanderjahre)等を發表、一方科學の研究にも熱心に從事した。かくて一八三一年には畢世の大作「ファウスト」(Faust)を完成したが、その後頓に健康衰へ、翌年三月八十三歳を以て歿した。以上の外、「イタリヤ紀行」(Italienische Reise)・「クセニーエン」(Xenien)・「東西詩篇」(Der Westöstliche Divan)その他の作品及び研究論文がある。

ゲーテは文藝上に偉大な足跡を遺したのみならず、政治家として、自然科學者として多方面に活動し、中にも人體の間顎骨の發見や植物變態說の如きは、進化論に先鞭をつけた創見である。又、彼は哲學的な思索と深遠な理想とをもち、彼の神と世界とを一と見る信念はその全行爲を貫ぬき、一生を通じて數多くなされた戀愛は彼の人間的完成の上に意味が深い。かくの如く複雜な諸要素を綜合して、渾然たる人格を形成した所に、彼の偉大さがある。詩的空想と創作力の豐富さ、感情の深さと健全さ、思想の明晰さと高尚さ、形式の優美さと自然さ、これらのすべてを具備した點で彼は古今東西唯一人の觀がある。

【文學史】　ブンガクシ　文學の歴史的遷移を研究する學問。文學の歴史。

【第一人者】　ダイイチニンシャ　ある社會で、最も傑出して他に肩をならべる者のないほどの人。

【天才】　テンサイ　こゝは、常人以上の獨創的能力を具へてゐる人。

【宇宙的包容力】　ウチウテキハウヨウリョク　この世の如何なるものをも容れ得るやうな、宇宙そのもののやうに大きな包容力。

〔宇宙〕　天地間に存在するあらゆるものを總括した概念で、無限の過去から無限の未來に亙り、無涯の空間に存在するものをさしていふ。天文學上では、すべての天體を總括して考へたものをいひ、その大きさは有限であるが限界がない。

〔包容〕　包みいれること。又、人の說などを容れる雅量のあること。

【氣分】　キブン　(一)特に分明した原因なしに、漠然と生ずる感情狀態一般。(二)感じ。おもむき。(三)氣質。氣性。こゝは(一)。特定の內容或は對象の意味に關係せずに導かれる漠然たる感情狀態を、特定の感覺を原因とする感情と區別して「情趣」といひ、更にかくの如き主觀的感情狀態が、外界との交涉の結果でなく、單なる有機感覺の綜合的反映として主觀的に導かれる場

合を特に「氣分」又は「情調」といふ。

【情調】　ジャウテウ　(一)心理學上では、快・不快・興奮・沈靜等の如き感覺に伴なつて起る感情。(二)美學上では「氣分」に同じ。こゝは(二)。

【プロメトイス】　Prometheus　プロメテウス(プロメトイスは。ギリシヤ神話における文化的神人。ティタネス族(ギリシヤ神話に現れる動物的な自然力の人格化)のイアペトスとクリュメネとの子で、弟エピメテウスと共に人間を造り、人間と他の動物に生存上必要な能力を與へる役目を神から委任され、土をこねて人間を造り、又、人類がゼウスに火を奪はれて困苦に陷るや、天界に昇り太陽の火を盜んで人類に齎した。ゼウスは怒つて、コーカサス山中の巨巖に縛し、鷲をして晝はその肝臓を食はせ、夜はこれを癒えしめたので、後に英雄ヘラクレスに助けられるまで苦しみ續けた。しかし彼は神々及び人類の未來に關する知識を有したので、後、ゼウスは彼と和睦して大いにこれを重んじたといはれる。(彼の弟は彼の言に背いて、神々の贈物である美女パンドラを妻とし、人類に不幸の種子を蒔いた。)

西暦一七七二年から一七七五年にかけ、所謂シュトゥルム・ウント・ドゥランゲ運動の尖端に立つて活躍してゐたゲーケは、「ゲッツ・フォン・ベルリヒンゲン」「若きウェルテルの悲しみ」等の創作の外、幾多大規模な戲曲の制作を計畫したが、晩年完成した

「ファウスト」の外は多く斷片のまゝで殘された。それ等の斷片中に、一七七四年プロメトイスを題材として書いた同名の戲曲がある。この戲曲「プロメトイス」に就いて、作者は「ゲョエテ研究」中「醱酵沸騰」の章で次のやうにいつてゐる。

　この斷章の中に語られてゐるものは、形成と創造との喜びのみではなくて、自主的な傲慢、如何なる支配者をも耐へ難いとする屈し難い自力の詩である。人生が包藏するところのものをば、自己そのものの限界なき快樂と悲哀との中に體驗し、思辨し、味ひ盡さうと欲する要求である。(中略)

　この作に於てはゲョエテの自主的感情、天才的自負、權威を無視した自由思想がプロメトイスの口を藉りて主張されてゐるけれども、プロメトイスは決して或る論者の主張するやうに、單なる天才時代の不羈奔放な獨立欲から發生したゲョエテの氣分の表白とのみ見るべきではなく、寧ろゲョエテが一七七三年に始めたスピノオザ研究の一影響をもその中に見るのが至當であると思はれる。何故かと言へば、このプロメトイスの自我感情こそ、實に世界と自我との一體感から發生してゐるからである。古代の教義、ヂオバニ・ブルウノオ等によつて準備され、更にシュトゥルム・ウント・ドゥランゲの神祕主義者ハアマン及びヘルデルによつてゲョエテの信仰となつたものが、今や彼によつて確立したのである。『詩作と眞實』は「遠き思慮なくして」この作が始められたと語つてゐるけれども、よし明瞭に意識しなかつたまでも、神と世界とは同一物であり、個々のものは世界神の一片であるとの感情がこの作の根柢に横つてゐたことは、殆ど疑ふ餘地は無いと言つてもよい。プロメトイスが神々に反抗して服從しないのは、神々もまた彼と等しく大宇宙神の一部に過ぎないからである。しかし一方自我と世界との融合感は、全く自我に自由を與へ、個々の瞬間に重大な意義を齎す結果となつた。

【ファウスト】　Faust, Faustus　ドイツの傳說的人物。西暦一四八〇年頃から一五四〇年頃にかけて實在した奇術師に種々の魔術師的傳說の要素が混入して、その生存中から既に一種の傳說的人物となり、死後は口碑としてのみならず、民俗本・民俗劇・人形劇等として廣く民間に流布せられた。ドイツのヴィッテンベルク國に生まれ、幼より賢く、長じてヴィッテンベルク大學に神學・醫學等を修め、更に鍊金術や占星術を研究した。後、神のやうに全知全能たらんことを願つて、魔術を究め、遂に魔王メフィストフェレスとの間に、魔王は二十四年間彼の忠實な僕となつてその總べての望を適へる代りに、期限の終る時ファウストはその靈魂を魔王に與へるといふ血書の契約を結んだ。かくしてファウストは魔王の力によつて、華美な生活、地獄への訪問、龍車に乘つての天界飛行、翼ある怪馬を御しての世界巡遊等、あらゆる願望を達し得たが、結局何等心からの滿足は得られず、遂に期限の切れたその眞夜中、五體をずたゞに引裂かれて死んだといふ。

　ゲーテは、この傳說的人物に題材をとつた劇詩「ファウスト」を、一八三一年に完成した。(一一八頁「ファウスト」及び參考資料參照)

【巨人的】　キョジンテキ　普通人とは別種類の存在であるやうに偉大なさま。

　〔巨人〕　(一)なみはづれて身體の大きな人。(二)各國の神話・傳說・童話等に傳承せられる超人間的な巨大の人物。ジャイアント(giant)。(三)品性・才學の傑出した人。偉人。

【戲言】　ギゲン　戲れにいふ言葉。冗談。おどけ。たはむれこと。

【諧謔詩】　カイギャクシ　諧謔的な內容をもつ詩。

　〔諧謔〕　洒落・滑稽・諷刺などを含む言葉。しやれ。おどけ。ざれごと。ユーモア(humour)。

　「諧」も「謔」も、冗談。おどけ。

【詩材】　シザイ　詩の材料。詩の素材となるもの。

【廣汎】　クヮウハン　非常にひろいこと。あまねくひろいこと。
「汎」は、ひろい。あまねくひろい。

【韻律】　キンリツ　韻文の音律。
國語によつて韻律の基礎に相違があり、ギリシヤ語・ラテン語では音の長短を基とし、長短の音の或る配列（一個を示せば「長」）を繰返して規則正しい調子を感ぜしめ、英・獨等アクセントの顯著な國語では、アクセントを有するシラブルと有しないシラブルとを規則正しく配列することによつて音の律動を感ぜしめ、日本語の如くアクセントも音の長短も顯著でない國語では、五音・七音等一定の音數を有する句を釣合よく配列することによつて調子を整へる。

【生動の氣】　セイドウのキ　文學・美術等の作品に於ける、いきいきとして今にも動き出さうとするやうな氣韻。いき〳〵として眞に逼る勢。

【妙】　メウ　（一）たへ。事物が到達する善美完全の極域。（二）不可思議。神祕。こゝは（一）。

【多端】　タタン　仕事の多いこと。事件の多いこと。多事多忙であること。こゝは、多方面に亙つてゐること。

【心理的戲曲樣式】　シンリテキギキョクヤウシキ　外面的な事件の展開よりも、主人公の心理的推移に力點をおいて構成せられてゐる戲曲の樣式。
「ファウスト」は、第一部と第二部とによつて樣式的に相違があり、心理的なのは第一部である。これに就いて作者は「ゲョエテ研究」中「ファウスト」の章で次のやうにいつてゐる。
悲劇第一部から第二部へ移つて來て何人も先づ驚くものは、その樣式の非常な變化である。尤も第一部に於ても「妖女の廚」、「ヴルプルギスの夜」等のやうな超現實的な場面、及び靈だちの合唱などでは、或は歌劇風となつたり、或は象徴風になつたり、或は時代の精神出來事に關する諷刺諧謔を混入したりしたが、全體としてシェエクスピイア流の寫實風、シュトゥルム・ウント・ドゥラングの自然風、心理描寫が基調になつてゐた。然るに第二部に入ると、これまで基調となつてゐたものは遙に後景に退いて、處々に現はれてゐた歌劇風な浪漫的な樣式が主調を形成してゐる。この變化はゲョエテが故意に計畫的に企てた結果と見るよりは、寧ろゲョエテその人の變化と時勢の變遷のためであると考へるのが至當であるかと思はれる。

〔心理〕　（一）精神の狀態。意識の現象。（二）「心理學」の略。こゝは（一）。

〔戲曲〕　上演せられると否とにかゝはらず、舞臺に上ることを前提として書かれた文學の特殊形態。隨つて舞臺に上演せられることによつてその最終の目的が達せられるが、一方には實際の舞臺を無視して純粹に讀む爲にのみ書かれたものもある。何れも事件をそれ自身の生起の形に於て讀者の眼前に提示し、そのモティーフが前進的に發展する所を鑑賞せしめる。普通、人物の出入・舞臺裝置・音樂・擬音・照明等を指定するト書と、話す言葉である臺詞とから成立し、臺詞は對話・獨白・傍白、及び唄・合唱等に分かたれる。ドラマ（drama）。
因みに「ファウスト」は、適切には劇詩又は詩劇と稱すべきものである。（四二八頁「劇詩」參照）

〔樣式〕　（一）個々の形式的特徴。（二）統一的・不變的な表現形式。こゝは（二）。

【ハムレット】　（二一九頁參照）

【親和力】　シンワリョク　Die Wahlverwandtschaften　ゲーテ晩年（一八〇九）の作で、彼の小說中最も完璧なものといはれる。親和力とは本來化學上の用語で、種々の原子はこの力によつて結びつけられて、分子を形成すると考へられてゐる。ゲーテは、この親和力と同樣な牽引力が、人間同士の間にも作用して、時には社會の法則に、又個人の運命に重大な決定を與へることを、この小說に表現しようとした。本來「ウィルヘルム・マイスターの遍歷時代」に編入せられるべき幾つかの物語の一つであつたのを、獨立させたもので、洗練せられた圓熟の筆致と、緊密な構想とによつて四人の人物の間に機微に相牽く力から生ずる悲劇的な運命が描かれてゐる。
男爵エドゥアルトとシャルロッテとは共に名門の出で、若い頃相愛の仲であつたが、境遇上やむなくそれ〴〵別な結婚をし、十六七年を經過した。その間、共にその配偶者を失つて二人は遂に結婚した。かくて夫は友人の大尉を、妻は姪のオッティリエを招いて四人で莊園に暮すうちに、男爵はオッティリエに、妻は大尉に、それ〴〵親和力を感ずるに至つた。大尉は理性によつて愛情を制御し、他に去つてシャルロッテと互に遠ざかつて行くが、男爵とオッティリエとは如何にするも親和力から離れることが出來なかつた。種々の葛藤の結果、オッティリエは過つて叔母シャルロッテの子を溺死させ、遂に憂みに堪へかねて絶食して死に、男爵も、まもなく自ら食を絶つて彼女の後を追ひ、オッティリエと共に葬られた、といふ筋である。
因みに作者は、「ゲョエテ研究」中「ソネット、親和力」の章で

次のやうにいつてゐる。

『ヱルテル』を讀むとき、人は常に彼の感情の渦中に捲き込まれるを覺える。さういふ意味に於て抒情詩的な要素が多分に含まれてゐる。『親和力』から我々が受ける感銘は正にそれとは反對に、大理石の群像を鑑賞する場合に似てゐる。一人一人の人物が形體化してゐる。一つ一つの生活を我々は共に感ずることが出來る。同時にそれを離れて見てゐる餘裕が與へられる。前者に於て滿足されるものは主として感情である。後者で我々に與へられるものは叡智の開發であり、人性と生活とへの深い洞察を得た喜びである。これは作者が漸く老境圓熟の境に入つて來たことを語ると共に、また古典主義に負ふところが少くないことを語つてゐると思はれる。彼が作中人物を出來るだけ簡明な境遇に置いて、各自の性格の差異と本質とを示し、個性の差を劃然と浮び上らせながら、一般人間性の確實な把握と描寫とに努力し、これによつて人間と運命との鬪爭諸相を我々の眼前に見せようと試みたのは、明に古典主義の主張をこの小說に具現しようと欲したものと思はれる。絢爛な外面的境遇や、驚くべき出來事によつてではなく、日常普通の生活の中に展開する人間心理の描寫によつて我々の心を捕へるのは、『ヱルテル』、『イフィゲェニエ』、『タッソオ』等と同一であつて、この點に於ては『ギルヘルム・マイステル』等に比して遙に近代的であると言ひ得よう。

【純一】　ジュンイツ　(一)まじりけなく專一なこと。(二)飾氣のないこと。僞のないこと。こゝは(一)。

【深刻】　シンコク　(一)同情がなくてむごいこと。無慈悲で手厳しいこと。極めて殘忍なこと。(二)極めて切實なこと。(三)深く刻みつけること。こゝは(二)。

【領域】　リャウキキ　(一)領地の區域。卽ち、一國の統治主權に屬する區域。領土・領海・領空の三部から成る。(二)一定の範圍。區域。分野。こゝは(二)。

【近代人】　キンダイジン　近代思想の感化を受けた人。

〔近代〕　(六頁參照)

【枚擧】　マイキョ　一つ〳〵數へ擧げること。

【自然科學者】　シゼンクワガクシャ　自然科學の研究に從事する人。ゲーテは既に大學時代から自然科學に興味をもつてゐたが、ワイマールの政治に與るやうになつてからは、屢〻必要にも迫られて、自然科學殊に動物・植物・鑛物・物理・化學等の研究に暇を割き、イタリヤの旅から歸つて後は官職の方に閑暇を得て再び創作に歸ると共に、自然科學の研究にも大いに精勵し、死に至るまで止めなかつた。その研究は多方面に亙つてゐるが、就中植物變態に關するものと、色彩論の講述的及び歷史的部分等に纏つた成果を殘した。更に自然科學の研究はその作品にも種々の影響を及し、「ファウスト」その他に、その跡が明瞭に看取せられると共に、間接にも深い陰影を投じてゐる。

〔自然科學〕　經驗科學の一大部門で、經驗的事實の間にある一般的關係の客觀的法則を定立することを研究主題とするもの。

〔五七頁「科學」參照〕

【認識】　ニンシキ　(三六五頁參照)

【事實が詩的である】　現實の事實そのものが理想的な美をもつてゐる、の意。

【ヴィーラント】　Wieland　ドイツの詩人・小說家・戲曲家。所謂感傷文學の巨匠。西曆一七三三年九月、ドイツ、ヴェルテンベルヒの一村オーベルホルツハイムに、牧師の子として生まれた。一七五〇年法律を學ぶ目的でチューベンゲン大學に入つたが、主として文學の勉强に心を傾け、クロップシュトックの影響を受けて詩作に耽つた。一七六二年から一七六六年までスイスに住み、後ビーベラッハに歸つて多くの創作を發表し、シェークスピヤの戲曲二十篇を譯譯したりした。一七六九年エルフルト大學に哲學を講じ、一七七二年招かれてワイマール公國に赴き、カール・アウグストの教育に從事し、ゲーテ・シラー・ヘルダー等と共にドイツ文學の興隆に力を盡くし、一八一三年一月八十歲を以て同地に歿した。初め宗教的な作品を以て作家生活をふみ出し、次いで現世的・官能的傾向に走つたが、後年また道義的傾向を帶びるに至つた。シェークスピヤ及びギリシヤ諸詩人の譯譯者としての功績も逸すべきでない。

【道破】　ダウハ　いつてのけること。いひはること。いひつくすこと。

【人間的な人間のなかの最も偉大な人間】

ヴィーラントがその友人に宛てた書簡中の言葉として、ヴイルショースキーの「ゲーテ傳」の中に見えてゐる。

〔人間的〕　ニンゲンテキ　(神でもなく獸でもなく)人間らしいさま。

【人間的要素】　ニンゲンテキエウソ　人間を形成してゐる性質。人間として具有する根本的な性質。

【悟性】　ゴセイ　知性。知力。論理的思惟能力。一方には「感性」に、他方には「理性」に對する語で、感性が表象の能力であり、

理性が理念又は原理の能力であるのに對して、概念し、論證する能力とせられてゐる。

【感性】　カンセイ　(一)哲學上、(イ)理論的には「悟性」と相竝んで知識を構成する獨立の表象能力。悟性が概念を構成する自發的の思惟能力であるに對して、感性は、我々が對象から觸發せられる仕方によつて表象を得る、受動的の能力(感受性)で、(ロ)實踐的には「道德的理性」に對し、これによつて征服せらるべき低度の感覺的衝動に基づく要求全體の總稱である。(二)心理學上では、ある刺激又は刺激變化に對し、その感覺を生じ得る働の鋭敏さをいふ。こゝは(一)の(イ)。

【想像力】　サウザウリョク　想像する力。想像する能力。

〔想像〕　おしはかりおもひやること。心理學上では、最も廣義には、現在直接に感觸しつゝある實際物以外の觀念をいふ。故に知覺したものをそのまゝ再現することも、或は知覺の殘像又は記憶中の心像を分解・結合等の變化を加へて再現することも、等しく想像といひ、前者を再生想像、後者を創作想像といふ。しかし再生想像は、特に印象、知覺、表象、觀念の再生等の如く、その場合々々に適したそれ〳〵の名稱を有するから、想像といへば創作想像をさすのが普通である。

【精靈】　セイレイ　(一)死者の靈魂。肉體又は物質から解放された自由靈又は形像靈。幽靈。(二)おのづから宇宙に存在して、生活力の根源となり、人類のみならず、すべての動植物乃至器物・星辰などにも存在するといふ精神。生活力の根源。精氣。スピリット(spirit)。こゝは(二)。

【劇詩】　ゲキシ　(一)drama(英)の譯語。散文劇以前の戲曲の總稱。(二)poetical drama(英)の譯語。賛詞が單に韻文であるに止らず、完全に詩として觀賞されるべきもの。(三)dramatic poetry(英)の譯語。詩であつて劇的要素を含むもの。こゝは(二)。

【生活の結晶】　セイクヮツのケッシャウ　生活經驗の成果として具體化したもの。

〔結晶〕　(九二頁參照)

【惟ふに】　オモふに　おもひめぐらしてみるに。

「惟」は、ひとすぢに考へる。おもひみる。

【生活原理】　セイクヮツゲンリ　生活の規範となるべき原理。生活を規定し方向づける主義。

〔原理〕　(一)大もとの道理。一切の事物の由つて生ずる根源。(二)眞理の基礎となり、思想上の諸法則・諸要素を確立し、これらに根據を與へる根本の眞理。認識の根本的規範となるもの。(三)人間の行爲を規定し指導する法則。人間の動作の根本的規範となるもの。

【自己を生き盡くす】　先天的・後天的に與へられた自己のあらゆる性質・能力を遺憾なく實現した生活をする。

【諦念】　テイネン　あきらめの心。

ゲーテの諦念の思想は、一八三〇年の小說「ウィルヘルム・マイスターの遍歷時代」に最もよく表現せられてゐる。その意味に就いて、作者は「ゲョエテ研究」中「ギルヘルム・マイステルの遍歷時代」の章で次のやうにいつてゐる。

概して諦念とは一種の檢束又は局限を意味することは勿論である。沸きたぎる熱情の奔騰を抑へて理智の命令に從ふのも諦念である。生れながらに或はまた努力によつて獲得した種々の特權、利益、所有等を捨てるのも諦念である。自己の意志欲望の極りなき要求に限界を設くのも諦念である。しかしながら斯うした抑制と局限とのみを生活指導の原理とするならば、其處には何等の發達も期待することは出來ず、人生には少しの希望も繫ぐことが出來なくなるであらう。それ故諦念の消極性の背後には、またそれの積極的方面とも言ふべき集中がなくてはならない。多方面に散逸すべき力を、限られた一二三點に集中して、その點に於て人生の進歩と人類幸福の增進のために何等かの寄與がなされなくてはならない。諦念の必要は實にそのために存するのである。諦念は決して無爲を意味すべきではない。ゲョエテが諦念と共に勞作を以て「遍歷時代」の第二の根本思想としたのは全くこの爲であらうと思ふ。それ故篇中に現はれる多くの人々は、或はその所有を斷念放棄し、或はその戀愛を捨て、或は特權利益を抛つてゐるけれども、それによつて隱退したり、生活力を失つたりしてゐる者は殆ど無い。皆なそれぞれの制限の中にあつて、活動と勞作とを續けてゐる。さうしてそれがその人自身のためにも、亦た人類一般のためにもなつてゐるのである。かうして衝動の人が理性の人となり、自我の人が共同の人となり、利己主義者が博愛人となるのである。

【叙智】　エイチ　こゝは、超感覺的なものについての智慧。

「叙」は、深くあきらか。さとい。

【强調】　キャウテウ　(一)語勢を强めること。(二)事實を力說することゝ。熱心に說くこと。こゝは(二)。

【佛蘭西革命】　フランスカクメイ　西暦一七八九年から一七九九年に亙つて、フランスに行はれ、ひいて全歐洲を大動亂に導いた革命。文藝復興以來盛になりつゝあつた現實的興味と人間的傾向と

は、十七世紀に於て政治思想の發達や自然科學の隆盛となつて現れ、十八世紀に入つて一層強められた。一方ルイ十四世以來のフランス王朝は專制と驕奢とを恣にし、貴族・僧侶は君寵を恃んで免稅の特權を有し、下層の人民に對する誅求・酷使至らざるなく、加ふるに一世紀に亙る外征は人民の負擔を愈〻重からしめ、國庫は全く窮乏に陷つた。こゝに於てルイ十六世卽位するや、財政家チュルゴー等を大藏大臣に任用して財政の整理と貴族・僧侶の特權廢止との斷行を企てたが成らず、更に一七八九年三部會をヴェルサイユに召集して難局の救濟を計つたが、貴族・僧侶の二部が結束して平民部の主張にかゝる三部合同の會議を拒絕するに及び、平民部はミラボー等に指揮せられて國民議會を組織し、新憲法の制定を要求した。然るに頑迷なる君側者が王に勸めて軍隊をパリに集中した結果、七月遂にパリ市民は暴動化して革命の烽火を擧げ、地方の亂民亦呼應した。かくて革命は全く疾風迅雷的に進展し、萬民の權利平等が高潮せられて在來の社會秩序は全く破壞せられ、一七九一年には立憲君主制の新憲法が制定せられて立法議會の成立を見た。時に普・墺の二國は餘波の自國に及ぶことを懼れてこれに干涉した爲、一七九二年遂に戰端が開かれ、ルイ十六世は敵國内通の嫌疑を受けて監禁せられ、次いで立法議會も解散して、過激共和主義のジャコベン黨の支配する國民公會が成立し、直ちに王政の廢止、共和制の成立を決議し、翌年遂にルイ十六世を死刑に處した。こゝに於てイギリスの首相ピットは普・墺・蘭・西の諸國と第一歐洲同盟を結んでフランスに逼り、國内の王黨も亦呼應して兵を擧げた。ジャコベン黨は國論の統一を急務として議會の全權を獨占し、革命裁判所・公安委員會を設置して反對黨を彈壓し、種々の新施設を實施し、精銳な軍隊を組織して内外の敵を破つたが、まもなく黨内に内訌を生じ、領袖ロベスピエールは處刑せられ、一七九五年國民公會は新憲法を定めて解散し、それに基づいて五人の督政が行政を司どつた。この時新政府に反對して王黨の亂が起るや、青年砲兵士官ナポレオンはこれを鎭壓して名聲を擧げ、翌年拔擢せられてイタリヤ征討軍司令官となり、オーストリヤを屈して第一歐洲同盟を瓦解せしめ、一七九九年エジプト遠征から單身歸國、武力を以て議會を解散し、憲法を改めて三名の執政を置き、自ら第一執政として武斷政治を行ふに至り、所謂革命時代はこゝに終熄を見た。

佛蘭西革命に對するゲーテの態度に就いて、作者は「ゲョエテ研究」中「革命、從軍」の章で次のやうにいつてゐる。

伊太利から歸つた頃のゲョエテの心持を明かに語つてゐるものは、佛蘭西革命に對する彼の態度である。〔中略〕一體自由を欲し平等の權利を希ふ思想は、ジャン・ジャク・ルソオ以來、歐洲の到る處に擴がつてゐた上に、ブゥルボン家の滅落は何人も不思議とするところではなかつたが、この革命の成功は獨逸に於て種々の人々、特に知識階級の人々に、非常に大きな激動を與へたのであつた。〔中略〕しかしながら貴族と平民たるとを問はず、罪を犯す者の何れにも同情することの出來なかつたゲョエテは、寧ろそれを苦々しく思つてゐた。彼は決して貴族や王侯の專横を是認してゐたのではなかつた。しかしながら理解のない大衆をも可なり輕蔑してゐた。加ふるにゲョエテは政治社會の組織等の外面的革命によるよりは、人間精神の革新啓發による進歩と發展に多大の望を懸けてゐた。それはかりではない、彼は結局に於て萬民の平等を以て單なる夢想に過ぎないとし、政治的自由を危險な道具と考へてゐた。彼は革命の罪を爲政者支配者に課することに吝ではなかつたけれども、革命の殘虐がまた暴力の横行であることをも痛感してゐたのであつた。これはゲョエテが一國の大臣であり、身が貴族に列せられるに至つて始まつた考ではない。寧ろこれは彼に生れつきであつたと言つてもよい。『ゲョッツ』に於て、『エルテル』に於て、『エグモント』に於て、農民や民衆に多大な同情を惜しまなかつた彼も、結局善良な君主專制を以て最善の政體と思つてゐたことは明かであり、特殊な天賦を受けてゐるとの高い自覺を持つ者が、一切平等の思想に共鳴することの出來ないのは自然の理であつた。

【獨立戰爭】　ドクリッセンサウ　西暦一七七五年から一七八五年まで、イギリスの北アメリカ植民地と本國との間に行はれ、その結果アメリカ合衆國の獨立が承認せられた戰爭。近世初頭以來アメリカにはヨーロッパ各國の植民地が開かれたが、就中イギリス人の活躍目覺しく、十八世紀の初め東岸一帶の地はその勢下に包攝せられ、所謂十三州植民地の成立を見た。然るにイギリス政府は本國の商工業を保護して植民地の發達を防碍したので、植民地の人民は豫て不平を抱いてゐたが、偶〻七年戰役（一七五六年から一七六三年までオーストリヤ・プロシヤ等と、フランス・オーストリヤ・ロシヤ等との間に行はれた戰爭）によつて財政困難に陷つたイギリス政府が、その整理の爲に一七六五年印紙條例を發し、次いで翌年茶・染料・硝子等の輸入稅を課するに及んで大いに激昂、一七七三年にはボストン茶黨の暴動起り、翌年には十三州選出の代表者がフィラデルフィヤに大陸會議を開いて本國政府に完全なる自治權を要求し、一七七五年遂に戰端の開始を見るに至つ

た。こゝに於て植民地側は再び大陸會議を開き、ワシントンを軍の總帥に推し、翌年獨立宣言書を中外に發表、一七七七年國號を定めて合衆國と稱した。最初、獨立軍は訓練の不足と兵器・糧食の缺乏との故に、到る處に敗北を續けたが、その意氣に動かされて歐洲諸國の志士・軍人等の來援する者多く、ワシントンの統帥亦宜しきを得て次第に勢力を恢復し、一七七七年にはサラトガに英軍を大破し、翌年はフランス・イスパニヤの兩國が公然獨立軍と同盟して益々氣勢を揚げ、一七八一年には英軍の根據地ヨークタウンを陷れて大勢を決した。こゝに於て先にイギリスの海上優越權を制する爲に海上武裝中立同盟を結んだロシヤ・オーストリヤ等の諸國は合衆國の獨立を承認し、イギリスも遂に屈し、一七八三年ヴェルサイユ條約を結んでその獨立を認めるに至つた。

【退嬰的】　タイエイテキ　思ひ切つて斷行しないさま。躊躇逡巡を事とするさま。ひつこみ主義の。（「進取的」の對。）

〔退嬰〕　しりぞきまもること。しりごみして新しい事に手を出さないこと。退守。逡巡。

「嬰」は、めぐる。めぐらす。

【時代精神】　ジダイセイシン　ある時代に於て、その社會・人心を支配する主導精神。その時代に於ける、人生觀又は社會觀に於ける一般的傾向。

【卓越】　タクエツ　他にぬきんでてすぐれてゐること。ひいでること。卓絶。

「卓」―(一)高い。高く立つ。(二)越えすぐれる。

插圖「ゲーテ」　シュティルレル筆。

二　解釋

1　主題

ゲーテの人間的偉大。

2　構想

(1)　ゲーテの世界的偉大。（初―一四四ノ四）

(2)　ゲーテの偉大性。（一四四ノ四―一四七ノ七）

イ　宇宙的包容力。

ロ　人性と事象との自然獲得。

ハ　事實が詩的であることの闡明。

ニ　人間のうちの最も偉大な人間。

(3)　ゲーテの人間的偉大とその生活原理。（一四七ノ八―終）

3　敍述

〔彼の精神の宇宙的包容力〕――ゲーテの偉大を數へようとして、先づこの力をあげてゐるのは一般的且妥當な方法に相違ない。つづいて、それの發現としての(一)人生・自然の一切の感情・思想・氣分・情調の把握とその表現、(二)諸外國藝術の咀嚼とその活用をあげてゐるのも要を得てゐるといふべきであらう。

〔彼が文學のあらゆる領域に於て、またあらゆる問題に於て、我々近代人に與へたものは實に枚擧に遑ないといふべきである。〕――次に彼が與へた功績を數へて、(一)人性と事象との自然を獲得した功績、(二)事實が詩的であることを闡明にした功績をあげてゐるのも、作者の言はんとする偉大性を提示すべき準備として適切である。

〔「人間的な人間のなかの最も偉大な人間」〕――このヴィーラントの言葉を引いて、「あらゆる人間的要素を同一な偉大さで一身に集めてゐた」といつて悟性・精力・感性・想像力の合一の偉大さをあげ、彼の文學はこの偉大さの反映であり、「ファウスト」も「この生きた人間ゲーテの生活の結晶である」としてゐる所に、論旨の核心が提示せられてゐる。

〔自己を生き盡くすこと〕――天賦・境遇・學習のすべてによつて與へられたものを自ら生き盡くさなくてはやまないのが彼の生活原理であるとして、彼の人間的偉大の由つて來る所を指示しようとしてゐる。

〔一時期に於て卓越を誇り得る人は、その數が少いとはしない。しかし、生涯の全時期を通じて、不斷に進歩展開することゲーテの如きは、眞に稀に見るものといはなくてはならない。〕――結語として力强い一節である。自己を生き盡くすことは、やがて又その生涯を生き盡くすことでもあつた。

三　批評

「ゲョエテ研究」と題する厖大な研究の序である爲に、部分的に詳細を極めるよりも、大觀的に要核を衝くことを主とした篇であつて、一語一句、豐富な智識と高邁な識見とに裏付けられてゐる。ゲーテに對する獨自な批判といふよりも、極めて普遍的な理解を的確に跡つけようとしてゐる所にこの篇の特色がある。しかもそれが一般的考察の集錄ではなく、自己の脈搏に試みられたものの發展であり、それの體系化である點に於て、考察そのものの獨自性を保持してゐることが見逃されてはならないであらう。

一　指導の問題

（一）讀みに於ける註解を精しくすれば限りがない。しかしゲーテに關する豫備智識の乏しい生徒に對して、あまりに精しい註解を試みることは、却つて理解を混亂させるであらう。適切に註解を施して、讀みを讀みたらしめる第一歩を十分に完結せしめることが肝要と思はれる。

（二）序としての試論であるだけに、主題は明瞭にしやすい。構想も複雜ではない。唯主題提示の準備的な部分が稍長文だけれども、それは單なる準備ではなく、やがて主題の展開によつて復び定位せられる部分であるから、これだけ丹念に考察せられてゐることが理解せられて來る。

敍述は主題提示の準備が如何に試みられ、主題展開の層序が具體的に跡づけられゝば明らかになる。文學研究に關する術語的な用語が存するけれど、これ亦一般語化せられてゐる程度のものであるから、概念的に定義することなどはしない方が適當かと思はれる。ゲーテの傳や業績はなるべく具體的に補說することが註解としても、解釋に於ける敍述の問題としても肝要な方法であらう。

（三）ヨーロッパに於ける古代・中世・近世に於ける代表的人物としてプラトン・ダンテ・ゲーテの三人を選び、或は作品の評釋により、或は詩人の評傳によつてその一端に觸れさせようとしたけれども、固より文字通りその一端に觸れしめ得るに過ぎない筈であるが、それによつて多少とも日本文學、或は日本文化の特質を關係的に明らかになし得ればその意義は十分に達せられたものといつてよいであらう。プラトンが人間的、ダンテが宗教的、ゲーテが科學的な傾向を特質としてゐるといつても、多少その時代色が髣髴せられるかもしれない。その點に於ては日本文化の史的展開も全然別ではない。しかしその人間的・宗教的・科學的特質の樣式に至つては、著しく風土的・民族的規定を經てゐることはいふまでもない。多少ともそこに著眼させ得れば、これらの教材の意義は十分に達せられたものといつてよいであらう。

二　參考資料

作者のファウストに對する考察を「ゲョエテ研究」から抄錄する。

ファウストが十五世紀末葉から十六世紀半頃にかけて實在した奇術師であつて、それに種々の魔術師傳說の要素が混入して、その生存中から既に一種の傳說的人物となつてゐたことは、既に周知のことに屬する。さうして口碑によつて民間に流布されたその傳說が、書物の形となつて最も古く現れたのが一五八七年の秋であるが、それがゲョエテの故鄕フランクフルト・アム・マインの書肆シュピイス(Spiess)からであつたことも、何かの因緣といふべきであらう。ゲョエテはこの傳說を知つたのは人形芝居によつてであると繰返し說いてゐるが、演劇化され又は芝居化された『ファウスト』の根基が、前記その他種々の民間流布本から來てゐることは勿論であり、獨逸演劇界に於て英國の巡遊俳優が占めてゐた勢力を思ふとき、シェクスピイアの先輩クリストオフ・マアロウ(Christoph Marlowe)の『ドクトル・フウォスタスの悲話』(The Tragical History of Dr. Faustus)に影響されたことの少くなかつたことを見逃してはなるまい。尤もマアロウの悲劇が獨逸傳說によつたことは爭ふことが出來ないのであるから、これは言はば傳說流布の上の一つの迂路であつたに過ぎない。さうして當時の演劇は、一定の書かれた脚本に忠實に準據するのではなくて、その時々に臨機の變更を敢てするのを常としたから、所謂民俗劇又は人形劇『ファウスト』についての記述も、時と處とによつて種々異つてゐる。ゲョエテがその何れから最も多く材料契機を利用したかといふことも、幾分興味をそそる問題であり、且つゲョエテが緘默してゐるにも拘らず、民俗本『ファウスト』を讀んだことは、ヴイマアの宮廷圖書館からこれを借覽してゐる事實によつて明白であるが、要するにそれは枝葉の問題であるに過ぎない。最も我々に重要だと思はれる點は、何故にゲョエテがこの傳說に心を引かれたか、さうして何うしてこれが彼の一生の作となり、世界文學中の雄篇傑作となつたかでなくてはならない。

仔細に觀察すれば、ファウスト傳說の民俗本又は民俗劇、人形劇等のうちにもそれぞれの相違のあることは前述の通りであるが、大體に於てこれ等は皆な魔術師傳說の通性とも言ふべき三つの性質を具へてゐるといひ得るであらう。第一は主人公の性格が巨人的であつて、地上の總べてを所有し享樂しようとの慾望に燃えてゐることであり、第二はそれが天上的な力と結合しないで惡魔と結托することである。さうして第三はその結果が悲劇に終つて、ファウストの絕望と死滅、靈魂の永遠な墮地獄となつてゐることである。尤もプロテスタント的信仰と、啓蒙思想の浸潤とに伴つて、魔術の存在を否定する思想が著しくなつたため、これを滑稽化する傾向も全く無いのではなかつた。けれども地上のあらゆる快樂を味はんが爲めに惡魔に魂を賣つた主人公が、結局惡魔に征服されて地獄のものとなるのが普通であつた。或はカルデロオンの『不可思議を行ふ魔術師』のやうに、懺悔と信仰とによつて救はれるものも無いではないが、それが本來の形でないことは勿論である。（尤もゲョエテはカルデロオンのこの作は見てゐなかつた。）換言すれば民俗本、演劇又は人形芝居等によつて傳はつてゐたファウスト傳說の最も本質的

なものは、その巨人性と地上性にあると見てよいであらう。これは實にこの傳說が發達した文藝復興期の精神に負ふところのものであつて、個性の力と人間の能力と、人格的魔力の禮讚とに於て最も高潮に達した文藝復興と、全く相似た傾向を持つてゐたゲョエテ青年時代の獨逸が、再びこの傳說に共鳴を感じたのは決して偶然ではなかつたのである。新時代の開拓者であつたレッシングがまた『ファウスト』劇を企畫したのも、實にそのためであつたと云ふべきであらう。彼のファウスト劇が遂に完成に至らなかつたのみか、その斷片の草稿さへも傳へられないで、僅に二三の友人の報告によつて、その計畫內容の一部が知られるに過ぎないのは、甚だ殘り惜しいところであるが、それによつてもこの傳說の精神が再び新時代に蘇生したことが覗はれるのであつて、ゲョエテの劇詩『ファウスト』が、作品そのものとして如何に傑出してゐたにしても、この民族的時代精神の背景が全くなかつたならば、あれ程多くの感銘を與へたり、反響を起したりすることは出來なかつたであらう。實際クロップシュトックによつて翼を得、レッシングによつて誘導され、ヘルデルによつて飛躍を得た獨逸新文化新文學の精神が、民族的傳說の內奧に潛む特性を發揮した點に於て、又民族精神から出發しながら、新時代の空氣を豐に呼吸し、民族的特徵を帶びながら、その限界を超脫して人類一般のための一啓示となつてゐ、人間の淨化と墮落に關する永遠の問題を內容とする點に於て、ダンテの『神曲』に比較してゐる一評家の言は、必らずしも失當とは言ひ難い。

しかし今更ら事新しく言ふまでも無く、ゲョエテの『ファウスト』の偉大であるのは、それが民族傳說の精神を再生せしめたためであるよりも、寧ろその傳說を利用して、ゲョエテ自身の豐麗な體驗と、多方面の努力と、それによつて到達した偉大な世界觀及び人世觀とを藝術的に結晶させたことにある。否な、作者ゲョエテがその全生涯の總べての重要なモメントをこの作に取り入れ、自己を深め廣めて全人類の象徵としてゐるところにある。勿論ギトコウスキイも指摘してゐるやうに、主人公ファウストは決してゲョエテその人ではない。兩者の間には勿論截然たる區別があるのであるが、ゲョエテがこの主人公の生活の各階梯をば一々自己の實生活上の體驗によつて裏づけ、その血肉を以て作の血肉としたことは、この劇詩の成立史が明瞭に語るところであつて、『ファウスト』は實に作者ゲョエテと共に發達大成したと言つて決して過言ではあるまいと思ふ。

一五　言靈

一　解題

一　本文

「梧陰存稿」卷一所收「言靈」の殆ど全文を揭げた。（梧陰存稿上卷　明治二十八年九月、六合館發行）

「梧陰存稿」は井上毅の文集で、二卷より成り、卷一には國文で書かれたもの、卷二には漢文で書かれたものが收められ、共に小中村義象の編にかゝる。

二　作者

井上毅（こはし）。幼名を多久馬と稱し、梧陰と號した。天保十四年（一八四三）現熊本市に生まれ、幼時から藩の儒者木下犀潭の門に入つて儒學を修め、又國文の教養を得た。維新後上京し大學南校に於て專ら洋學を修め、明治三年同校小舍長に任ぜられ、四年司法省に轉じ、翌年司法卿江藤新平に隨行してヨーロッパ諸國を巡り、特にフランスに在留して法律・政治に關する學問を究めた。六年歸朝、その蘊蓄を內治・外交の諸問題に活用して卓拔の見を示し、爲に內務卿大久保利通に認められ、次第に重要な政務に參畫するに至つた。七年臺灣事件に關し利通辨理大臣として渡淸するに當り、隨行して大いにその才を表した。翌年法制官に任ぜられて以後は、主として法制の事に關係して多くの業績を擧げ、二十一年法制局長官に任ぜられ、樞密院書記官長を兼ね、大日本帝國憲法及び教育に關する勅語等の起草に貢獻した。二十六年文部大臣に擧げられて教育の振興に力を致したが、翌年病の爲に辭し、二十八年子爵を授けられ、正三位勳一等に敍せられた。同年三月歿、享年五十二。

國文・漢學・洋學に關する造詣深く、能文家を以て聞え、政治・法制上に於ける業績多く、殊に憲法制定に當つては伊東巳代治・金子堅太郎等と共に伊藤博文を輔け、更に教育上に於ては、教育に關する勅語草案の起草に元田永孚と共に重責を果し、文部大臣としては、教育勅語に基づく國體中心の教育精神の確立、國語・漢文の教育殊に國語教育の復興、實業教育の振興の三大原則を提げてその徹

井上毅

察であり、紹介であつた後を承けて、本課には、支那・ヨーロッパと異なる我が肇國の原理を一つの言葉に見出した試論を掲げた。文化的教材であり、國民的教材である。

二　教材としての研究

一　註解

【言靈】　コトダマ　古來、我が國の言語に一種神祕靈妙な活力ありとし、これを尊み稱へていつた語。

上代日本民族にあつては、言語に神靈が宿り、發言された言語はその神靈力の發動によつて必然的に事實として實現するものと信ぜられてゐた。これに人生を祝福する方面と他を攻擊する方面とがあり、日本書紀、神武天皇卷に、「則ち彼の菟田川の朝原に於て、譬へば水沫の如くに呪著くる所有り」とある如きは所謂呪詛で、言靈の力により對手を攻擊することをいつてゐるが、文學的に發達を遂げたのは善意の言靈で、神意に基づき人生を豐富にする意義を言語によつて表明する祝詞・壽詞の如きはそのよき例である。言靈は無心の言語にも宿るものとし、他人の無心の言語を聞いて運命を判斷することも行はれた。我が國は善意の言靈の活躍によつて繁榮する國と信じ、これを「言靈の幸はふ國」「言靈の佐くる國」等と稱した。（萬葉卷五「神代より言傳て來らく虛みつ倭の國は皇神の嚴しき國言靈の幸はふ國と語り繼ぎ言ひ繼がひけり今の世の人も悉目の前に見たり知りたり人多に滿ちてはあれども高光る日の朝廷神ながら愛の盛に天の下奏し給ひ家つ子ら撰び給ひて勅旨戴き持ちて唐の遠き境に遣はされ罷り坐せ海原の邊にも奥にも神留り領き坐す諸の大御神等船舳に導き申し天地の大御神等倭の大國靈ひさかたの天の御虛ゆ天翔り見渡し給ひ事了り還らむ日は　また更に　大御神等　船舳

【霊氣】　フウキ　(一)氣候。(二)風邪。かぜのけ。(三)人民の風俗。氣風。(四)風吹く氣色。風の吹くこと。(五)氣象。すぐれた精神。こゝは(三)。

【意想】　イサウ　おもひ。かんがへ。思想。

【記實】　キジツ　事實を記すこと。記事。

【價値】　カチ　（二三四頁參照）

【言靈の幸はふ國】　言靈のさかえで幸福の出で來る國の義。我が日本國の稱。

萬葉集卷五の山上憶良の長歌「好去好來の歌」に次のやうにある。

神代より　言傳て來らく　虛みつ　倭の國は　皇神の　嚴しき國　言靈の　幸はふ國と　語り繼ぎ　言ひ繼がひけり　今の世の　人も悉　目の前に　見たり知りたり　人多に　滿ちてはあれども　高光る　日の朝廷　神ながら　愛の盛に　天の下　奏し給ひ　家つ子ら　撰び給ひて　勅旨　戴き持ちて　唐の遠き境に　遣はされ　罷り坐せ　海原の　邊にも奥にも　神留り　領き坐す　諸の　大御神等　船舳に　導き申し　天地の大御神等　倭の　大國靈　ひさかたの　天の御虛ゆ　天翔り見渡し給ひ　事了り　還らむ日は　また更に　大御神等　船舳

が、その研究の方法に關しては自然科學の研究法を妥當とする學者と歷史研究に特殊の方法を認めねばならぬとする學者がある。リールは自然科學の研究法を妥當とし、ヴントは精神科學を自然科學に對立せしめて歷史學をその一としたが、研究方法は自然科學の研究法と異ならない。ヴィンデルバンド・リッケルト等はこれ等に對し特異の方法を立て、自然科學に對し歷史科學又は文化科學を說いた。卽ち自然科學の研究法は、自然現象から一般的共通的なものを抽出して一定の法則を作るのに反し、歷史的事實は個々相違する一回的なものであり、歷史はその個性の價値關係的記述であるとするのである。又ディルタイは歷史的世界の獨自の構造を明らかにするに努め、その把握の方法として精神科學的方法（自然科學の分析・說明に對して了解・追體驗をその原理とする）を說いた。

〔歷史〕　(一)事件經過そのもの。(二)その經過に關する記錄。一般には(二)を意味し、一般的と特殊的、或は政治史・文化史等の各科に分かつ。

【曖昧】　モウマイ　人智が開けず物事にくらいこと。

「曖」―(一)めくらい。(二)人の未だ學ばざるにいふ。

「昧」―(一)くらい。夜あけなどのほの暗いのをいふ。(二)おろか。事理にくらいこと。

に　御手打ち懸けて　墨繩を　延へたる如く　あちかをし　値嘉の岬より　大伴の　御津の濱邊に　直泊に　御船は泊てむ　恙無く　幸く坐して　早歸りませ
〔幸はふ〕　サキはふ　（自動・四）　さいはひな運がめぐる。榮えゆく。

【めでたき語】　結構な語。
〔めでたし〕　（一）愛づべきさまである。賞すべきである。（二）うつくしい。結構である。（三）祝ふべきである。（四）人に欺かれ、又はのせられ易い性質である。

【土地・人民の二要素を備へたる國】　（三六一頁「國家」參照）

【所作】　ショサ　（一）しわざ。ふるまひ。おこなひ。（二）身體のこなし。（三）をどり。まひ。（四）所作事。こゝは（一）。

【支那】　シナ　（六七頁參照）

【國を有つ】　クニをタモつ　國を領有する。國を失はずに持つてゐる。大學「有レ國者、不レ可二以不一レ慎。辟則爲二天下一僇一矣」

【詩經】　シキャウ　毛詩。五經の一。二十卷。漢詩集。支那の殷末周初の頃から春秋時代に至る約五百年間に行はれた詩を輯錄したもの。史記によれば、孔子が古詩三千餘篇のうち禮儀にかなつた三百十一篇を選び、その他を刪つたものである。現存の詩は三百五篇で、風（國風。諸國の風俗・習慣をあらはしたもの）・雅（宴饗に用ひた詩）・頌（廟堂で樂へて祖に告げる樂歌）の三類に大別される。古くは單に「詩」といつた。詩經は子夏によつて傳へられ、漢代に至り文運の復興とともに齊・魯・韓・毛の四詩家が興つたが、齊・魯・韓三家の詩說は早く亡び、現存のものは毛氏の傳であるからその名を冠して毛詩といふ。

【奄二有天下一】　テンカヲエンイウス　天が下を悉く領有する。
このまゝの句は、詩經にはない。が、これに類似した次の如き句があるからそれらをさしたのであらう。
詩經、大雅、文王之什、皇矣「受レ祿無レ喪、奄二有四方一」同、周頌、清廟之什、執競「自二彼成康一奄二有四方一斥々其明」同、魯頌、閟宮「奄二有下國一俾二民稼穡一」同「奄二有下土一纘二禹之緒一」同、商頌、玄鳥「方命厥后一奄二有九有一」書經、虞書、大禹謨「皇天眷命奄二有四海一爲二天下君一」徐幹、法象論「成湯不二敢怠遑一而奄二有九域一」
〔天下〕　（一）あめがした。宇內。（二）世界。萬國。（三）一國。國內。（四）我が儘に振舞ふことにいふ語。こゝは（一）。
〔奄有〕　おほひたもつこと。土地全部殘らず領有すること。占有すること。
「奄」―（一）おほふ。（二）ことごとく。

【物質】　ブツシツ　（一）物體を形成する本質で、空間の一部を占め、慣性・密度・彈性、その他熱・光・電磁氣等に對する物理的諸性質を具有する實體。（二）物の形質。物のたち。（三）物體。もの。こゝは（三）に近く、財物、といふほどの意。

【私產】　シサン　私有の財產。一個人としての資產。

【中庸】　チュウヨウ　四書の一。一卷。「中」は不偏、「庸」は不易を意味し、儒教の中正不易の德を說いた書。史記以來、孔子の孫子思の著であるといはれてゐるが、その思想內容と措辭との點から見て秦代以前の作でないともせられる。もと禮記中の一篇であつたが、後世尊重せられるに及んで單行せられ、二程子（宋の大儒程明道・程伊川）によつて四書に列せられ、朱子が章句を作るに至つて特に盛行するに至つた。

【富有二天下一】　トミテンカヲタモツ　天下の富を所有する。
この句中庸には見えない。恐らく同書の「富有二四海之內一、宗廟饗レ之、子孫保レ之」の如きをさしたものであらう。

【彼の聖人】　こゝは、孔子をさす。
「孔子」は、世界四聖の一人。名は丘、字は仲尼。周の靈王二十一年（皇紀一一〇）魯の昌平鄕に生まれ、少時に父を、青年時代に母を喪つて、孤獨・貧窮のうちに人となつた。當時は春秋の亂世であつたけれども、魯は昔周公の封ぜられた所で「周禮は魯に在り」と稱された程であるから、孔子もその道を學び、遂に周公を理想とするに至つた。魯の定公に仕へて大司寇に至り、治績が擧つたが、志を得ずして魯を去つた。以後門下を率ゐて放浪十四年、衞・宋・陳・蔡・楚に赴いたが、その唱へる道大にして容れられず、魯に歸り、志を仕官に絕ち、經書を整理し、春秋を筆削し、且弟子を敎育した。門下三千人、身六藝に通ずる者七十二人といはれる。周の敬王四十一年（皇紀一八二）歿、享年七十三。
〔聖人〕　セイジン　智德の圓滿な完成を得た理想的な人格者。ひじり。
支那では古代の堯・舜・禹・湯・文王・武王・周公・孔子等をいふ。尙、伊尹・太公（呂尙）・顏子・曾子・孟子等を賢人といひ、これに亞ぐものとする。

【有二天下一而不レ與】　テンカヲタモッテアヅカラズ　孔子が堯舜の君德を稱へた語。天下を領有してゐるが、適材を適所に用ゐてゐるから、一々干涉しない、の意。
孟子、滕文公章句上「孔子曰、大哉堯之爲二君一、惟天爲レ大。惟堯則レ之。蕩蕩乎民無二能名一焉。君哉舜也、巍巍乎有二天下一而

不」與焉。堯舜之治二天下一、豈無二所用一其心一哉。亦不用於耕耳。」

「孟子」は四書の一。一卷。孟子が孔子の道を紹述した書。孟子遊歴の際に於ける諸侯及び弟子との問答を記したもので、梁惠王・公孫丑・滕文公・離婁・萬章・告子・盡心の七篇から成る。史記にはこれを孟子の著としてゐるが、孟子の弟子の集錄、或は萬章・公孫丑の撰であるとの說もある。程子によつて四書に列せられ、朱子が集註を作るに至つて經書に錄せられた。

【矛盾】　ムジュン　（五五頁參照）

【治國】　チコク　國ををさめること。

大學の八條目の一。大學「古之欲二明明德一於天下一者、先治二其國一。」

「大學」は四書の一。支那の上古に於ける大學教育の要領を述べたもので、儒敎の根本精神である修己治人の大法が條理整然と記されてゐる。もと中庸と共に「禮記」中の一篇であつたが、唐の韓愈これを尊重し、宋に至り二程子も亦これを重んじて四書の一とし、朱子の章句をものしてより大いに行はれるに至つた。著者については、漢の賈逵は子思とし、朱子は曾子としてゐるが、何れとも斷定し難い。要するに戰國時代に於ける孔門子弟の作であらう。內容はまづ明明德・止至善・親民の三綱領を述べ、次いで格物・致知・誠意・正心・修身・齊家・治國・平天下の修養の八條目を說いてゐる。

【經國】　ケイコク　國を治めること。國家を經營すること。

魏文帝、典論「文章、經國之大業、不朽之盛事」

【經す】　ケイす　治める。統治する。

【民を御す】　民を治める。人民を統治する。

（御す）　ギョす　（一）馬を取扱ふ。（二）治める。統治する。（三）指揮する。つかふ。（四）使用したまふ。（天子にいふ。）

【民を牧す】　民を養ひ治める。一地方の民を治める。國郡を統治する。

管子、牧民篇「凡有二地牧一民者、務在二四時一、守在二倉廩一。」

（牧す）　ボクす　（一）牛・馬・羊等を放し飼にする。（二）養育する。撫育する。（三）みる。をさめる。

【おほらかなりし思想】　分化しないで大まかであつた思想。

（おほらか）　（一）分量の多いこと。たくさん。（二）おほやう。おほどか。こゝは（一）。

【國土】　コクド　（一）一國の統治權の行はれる境域。領土。（二）土地。地。（三）ふるさと。鄕國。故國。鄕土。（四）佛敎で、一切有情の住所。こゝは（一）。

【オキュパイ】　occupy（英）　占領する。占有する。占める。

【ガヴァン】　govern（英）　原義は steer（英）で、「舵を取る」の意。（一）治める。統治する。支配する。（二）制御する。

【作用言】　サヨウゲン　現今の國文法でいふ「動詞」に同じ。

鈴木朖（國學者。天保八年（一八三七）歿、享年七十四）の命名による。我が國文法上の術語で普通の動詞（但し「あり」を除く）を用言の一とみなした名稱。形容詞を形狀言といふのに對する。

【手綱】　タヅナ　馬具。麻繩又は布等で作り、二條に分かつて、各〻その一端を馬の轡の左右に繫け、乘手がこれを手に執つて馬を御する綱。

【あしらひ】　（一）あしらふこと。うけこたへ。挨拶。（二）取りあつかひ。もてなし。あへしらひ。待遇。（三）とりあはせ。つけあはせ。こゝは（二）。

【政治學】　セイヂガク　廣義には、政治現象の理論的考察を任務とする學、卽ち哲學的及び經驗科學的政治學を總稱し、狹義には、哲學的政治學又は科學的政治學のいづれかをいふ。こゝは廣義であらう。

古代ギリシャ哲學以來、政治現象の理論的考察は、一方には哲學的見地と實證的見地とを併せ交錯しつゝ行はれ、他方には政治學的見地と法律學的見地とを併せ交錯しつゝ行はれるのを常とした。十九世紀に於ける實證主義思想勃興の大勢の下に、他の諸〻の社會科學の發展によつて刺激されつゝ、哲學的及び法律學的方法の支配から獨立せる科學的政治學を建設せんとする努力が種々の方法的見地から現れ、政治現象と密接な關聯をもつ他種の現象を考察する他種の科學の方法又は理論を、政治現象の考察の上に役立てんと欲求してゐる。最近に於ては科學的政治學が優勢となつてゐる。

【古事記】　コジキ　天地開闢から推古天皇の御代に至るまでの神話・傳說・歷史等を記錄した書。三卷。はじめ天武天皇、諸家に傳へる所の帝紀・本辭の正實に違ひ、多く虛僞を交へてゐるのを歎き給ひ、舍人稗田阿禮に詔して帝皇の日繼と先代の舊辭とを傳承せしめられたが、元明天皇その御遺志を繼承せられ、和銅四年九月太安萬侯に命じて阿禮が誦習した所を撰錄せしめ、翌五年正月に獻らしめられたものである。上卷は天地開闢から鵜葺草葺不合命まで、中卷は神武天皇から應神天皇まで、下卷は仁德天皇から推古天皇までの記事を收め、皇室の御系譜を經とし、神話・傳說・說話を緯として、國土の起原、皇室の由來、諸氏族の出自

等を語り、皇室を中心とした國家的精神を以て統一してゐる。歴史書としての性質を示すと共に、說話文學の書としての一面を有し、古代に於ける國民生活をうかゞふべき最も貴重な文獻の一である。文章は漢字の音訓を交へ用ゐて日本的表現を試み、古語の保存に努めてゐる。

【天照大御神】　アマテラスオホミカミ　（三五〇頁「日神」參照）

【建御雷神】　タケミカヅチノカミ　「武甕槌神」（日本紀）にも作る。天尾羽張神の御子（古事）ともいひ、稜威雄走神の曾孫（日本紀）ともいふ。天照大神の勅により、まづ天孫降臨に先だつて經津主神とともに中國平定の任に當つた。出雲に入り大國主神並びにその御子事代主神を屈し、更にその御子建御名方神が從はなかつたので、これを追つて信濃の諏訪に至り遂に降伏せしめ、出雲を平定して天照大神に復奏した。茨城縣鹿島郡鹿島町の官幣大社鹿島神宮は建御雷神を祭神とする。

【大國主神】　オホクニヌシノカミ　「大己貴命」「大物主神」「八千矛神」「葦原醜男」「顯國玉神」「大國玉神」「葦原醜男」等とも申す。素戔嗚尊の御子ともいひ、又六世若しくは五世の御孫ともいふ。少彦命と協力して出雲を中心に國土を經營し給ひ、畜産を起し、災害を除き、療病・禁厭の法を定め、勢甚だ盛大を極められたが、後、天照大神及び高皇産靈尊の勅を畏んで國土を皇孫に獻じ、出雲の杵築宮（我の出雲大社は、島根縣簸川郡大社町に在る官幣大社で、大國主命を祭神とする。）に退隱せられた。

【汝がうしはける葦原の中國は云々】

古事記、上卷に「是を以てこの二神（天ノ鳥船神・建御雷神）、出雲ノ國の伊那佐之小濱に降りつきて、十掬劍を拔きて、浪の穗に逆に刺し立てて、その劍の前に趺み坐て、その大國主ノ神に問ひたまはく、天照大御神高木ノ神の命もちて問ひに使はせり。汝が主はける葦原ノ中ツ國は、我が御子の知らさむ國と言よさしたまへり」とある。

〔うしはく〕　我が有とする。占める。領有する。鎭坐する。

萬葉集、卷五「神留り　領き坐す　諸の　大御神等　云々」

同、卷六「住吉の　現人神　船の舳に　領き賜ひ云々」同、卷九「この山を　領く神の　昔より　禁めぬ行事ぞ」等の用例がある。天皇・皇孫については用ゐられてゐる例は見當らない。

〔葦原の中國〕　アシハラのナカツクニ　大日本國の美稱。葦の叢生した原の中の國の義。「葦原國」「葦原」ともいふ。

〔我が御子〕　アガミコ

「御子」―（一）天皇の御男子。天皇の御子孫。（二）親王。こゝは（一）で、皇孫を申す。

〔知らす〕　（三四〇頁參照）

皇孫又は天皇に用ゐられ、天照大神・素戔嗚尊に用ゐる場合には高天原若しくは國土の統治を意味する。

〔言依さす〕　コトヨさす　「言依す」の敬語。「言」は「事」の借字。委任する。命令する。いひつける。まかせる。

【本居宣長】　モトヲリノリナガ　江戸時代の國學者。はじめ小津姓を名乘り、後本居と改めた。幼名は富之助、後實名を榮貞と稱し、通稱は彌三郎、後健藏、鈴屋・紫廟・舜庵・春庵と號した。享保十五年（一三九〇）伊勢國松坂（現松阪市）の一木綿問屋に生まれた。寶曆二年（三十歳）京都に上り、醫術を修め、堀景山（京都の人。朱子學派の儒者。國文・和歌等にも造詣深かつた。寶曆七年歿）の塾に儒學を學び、且景山を通じて「百人一首改觀抄」「勢語臆斷」「古今餘材抄」等の契沖の著書に接した。七年歸鄉して醫業を開くと共に益々古典研究に心を潛め、又門弟に歌文を講じた。十三年松坂の旅宿に賀淵を訪うて入門、以後明和六年賀淵が歿するまで約六年間書簡の往復によつてその教を受けた。かくて愈々古學の研究に專念し、その思想の母胎をなす「古事記傳」は順次脱稿せられ、天明六年（五十歳）から寛政十年（六十九歳）に至つて遂に完成せられた。（「古事記傳」の刊行は、本居翁四十四歳に、宣長一男及び子等の尽力に負ふる所多く、翁を慰めて安政五年に完了した。）その間古書を講じて門弟の教育に力めたのは勿論、「古事記傳」以外の註釋・語學・文學論・古道等に關する多くの著書を成した。享和元年（二四六一）九月歿、享年七十二。著書は「玉勝間」「石上私淑言」「紫文要領」「古事記傳」の外、「直毘靈」「鈴花」「玉くしげ」等古道を論じたもの、「源氏物語玉の小櫛」「古今集遠鏡」「萬葉集玉の小琴」「續紀歷朝詔詞解」等の古典註釋書、「詞の玉緒」等の語學書、「うひ山ぶみ」「鈴屋集」等の歌文集・雜著など、すべて五十五種を數へる。

【土豪】　ドガウ　その地方に於ける豪族。その地の豪家。

【照らし臨み給ふ】　日月などが上からてらしのぞむやうに、君が、國土・人民を統治し給ふ、の意。照臨し給ふ。

【大御業】　オホミワザ　天皇の御事業。

〔大御〕　敬稱の「御」に尊稱の「大」を冠らせ、神明・天皇の御物事を極めて尊んで申し上げる接頭語。普便に「おほん」、又約めて「おん」「お」ともいふ。

【神日本磐余彦天皇】　神武天皇。第一代の天皇。御諱は「狹野尊」「若御毛沼命」「神日本磐余彦火々出見尊」と申す。彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊の第四の御子で、御母は玉依姫命。紀元前庚午の年日向で御降誕。甲寅の年、皇兄と共に舟師を率ゐて東征し給ひ、各所に御轉戰の末、辛酉の年正月元日大和畝火の橿原の宮に

即位の儀を行はせられた。七十六年三月丁一日崩御、實算百二十七（二百四十七）。畝傍山東北陵に葬り奉つた。神武天皇とは後世奉つた謚號である。明治に至り橿原神宮を建てて奉祀した。

日本書紀卷第三の劈頭に「神日本磐余彦天皇、諱は彦火々出見、彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊の第四子なり」とある。

「神日本磐余彦天皇」は大和の畝傍に都を奠め給うた後に、地名の磐余（現橿原の西南）によつて稱へ奉つた御名である。

【始馭天下之天皇】　神武天皇の御別名。建國の大業をなし給うたのを稱へ奉つた御名である。

日本書紀卷第三、神日本磐余彦天皇の條に「辛酉年春正月庚辰朔、天皇橿原宮に即帝位。是歲を天皇の元年と爲す。正妃を尊びて皇后と爲したまふ。皇子神八井耳命、神渟名川耳尊を生みたまふ。故に古語に稱めまうして、畝傍の橿原に、底磐之根に太立宮柱、高天之原に峻峙搏風、始馭天下之天皇と曰し、號を神日本磐余彦火火出見天皇と曰す」とある。

【世々の大御詔にも云々】

大寶令の公式令に於て規定せられた詔書のうち、宣命體で書かれ、朝廷の大事、立坊、立后、元日朝賀等について發し給ふ類には「明　神御　大八洲天皇詔旨」といふ辭を冠し、結語に「咸聞」といふ詞を置いた。

〔大御詔〕　オホミコトノリ　こゝは、御詔書、の意。

「詔書」は、天皇から下し給ふ最も重大な公文書。古くは立坊・立后・任太臣節會・五位以上の敍位等の臨時の大事に用ゐられた。その樣式は大寶令の公式令に見え、事件の大小によつて各〻規定せられてゐる。文體は和文體（宣命體）・漢文體の兩用があり、和文體は宣聞する爲で、平安朝以後漢文體の流行するに至り特に宣命として區別せられ、漢文體を一般に詔書といつた。明治に至つても改元・改曆・大赦等の大事には概ね詔書を以て公布せられ、文體は漢文體もあつたが、明治十二年以後一般に片假名交りの國文體となつた。明治四十年公式令が公布せられ、第一條に「公式の大事を宣詔し及大權の施行に關する勅旨を宣詔するは別段の形式によるものを除くの外詔書を以てす」とある。

「詔」は、「御言宣」の義。天皇の御言を告らせたまふこと。おほみこと。勅語。勅命。勅諚。勅論。文書に記す場合には、臨時の大事に「詔」を用ゐ、臨時の小事に「勅」を用ゐる。詔書。勅書。

〔大八洲國〕　オホヤシマクニ　我が國號の一。「大」は美稱。

「八」は「彌」で多數の島を以て成る國の意。伊弉諾尊・伊弉冊尊の生み給うた諸島は日本書紀に多くの異說があるが、卷第一、神代上の本文によれば、淡路洲（淡路）・大日本豐秋津洲（本洲）・伊豫二名洲（四國）・筑紫洲（九州）・億岐洲（隱岐）、佐渡洲（佐渡）（以上二洲は雙生といふ）・越洲（不明、一說に北海道かといふ）・大洲（不明、一說に國防の大島といふ）・吉備子洲（古備國）の八島である。倘古事記上卷には淡道之穗之狹別島（淡路）・伊予之二名島（四國）・隱伎之三子島（隱岐）・筑紫島（九州）・伊伎島（壹岐）・津島（對馬）・佐度島（佐渡）・大倭豐秋津島（本州）の八島を大八島國としてゐる。

【公文式】　コウブンシキ　法律・勅令・閣令・省令等に關する親署・制定・公布等の要式。

【誣ひたりとせず】

〔誣ふ〕　シフ　非を理にいひなす。事實をまげていふ。こじつける。附會する。

【意譯】　イヤタ　原文の大體の意味を取つて譯譯すること。

【古書に「知らす」といふ語に「御」の字を當てたる】

日本書紀卷第五、崇神天皇の條にも「秋九月甲辰朔己丑、始めて人民を校へ、更に調役を科す。此を男の弓弭調、女の手末調と謂ふ。是を以て天神地祇共に和享みて、風雨時に順ひ、百穀用つて成り、家給ぎ人足りて、天下大に平なり。故れ稱めまうして御肇國天皇と謂す」とある。

【高尙】　カウシャウ　(一)程度の高いこと。(二)學術などの意義の高く深くて容易に解し難いこと。(三)けだかいこと。こゝは(一)。

【附會】　フクワイ　(一)事の相聯屬しないものを會して一となすこと。(二)轉じてこじつけること。こゝは(二)。

【主格】　シュカク　名詞又は代名詞が一つの文章中に於て文法上述語である動詞の主語となる場合、その名詞・代名詞の格を主格といふ。

〔格〕　文法上、名詞・代名詞が他の語に對する一定の關係をさす。

【けぢめ】　わかち。わいだめも區別。

【豪傑】　ガウケツ　智勇の人に勝れてゐること。又、その人。

【政府】　セイフ　(一)國家の統治機關の總稱。(二)行政機關。殊に中央行政官廳又はその一である內閣の稱。（中央行政官廳は、天皇に直屬し、天皇から都督任を受けた範圍內に於ける行政事務について國家の意思を決定・表示する機關で、各省大臣・內閣總理大臣・內閣・行政裁判所・會計檢査院が之れに屬する。）但し、封建時代には幕府をも政府といつた。(三)法令上の用語としては、(イ)國務大臣の輔弼によつて行動し給ふ天皇、(ロ)帝國議會に對する國務大臣、(ハ)國庫、等の意味に用ゐられる。こゝは(一)。

【釋義】　シャクギ　意義をときあかすこと。解釋。

【天日嗣】　アマツヒツギ　天照大神の御系統を承け繼ぎ給ふこと、即ち天位の御繼承。又天皇の御位。こゝは、天位の御繼承を申し奉る。

【皇祖の御心の鏡もて天が下の民草をしろ知めす】　天照大神の清く澄み渡つた鏡の如き御心を體して天下の人民を治め給ふ。

〔心の鏡〕　ココロのカガミ　清く澄んだ心を鏡にたとへていふ語。

〔民草〕　タミグサ　民の殖えるさまを草にたとへていふ語。たみ。あをひとぐさ。人民。

【原理】　ゲンリ　（四二八頁參照）

【君德】　クントク　君主の德。

【日本國家學】　ニホンコクカガク　日本の國家の起原・性質等について研究する學問。

〔國家學〕　コクカガク　廣義には國家と關係を有する現象を考察する學問を總稱し、狹義には國家そのものを考察對象とする學問をいふ。こゝは廣義であらう。

廣義の國家學は、その實際的重要性の爲に諸〻の社會學の中で最も古くから發達したが、初は方法的に區別されず、總括的に研究せられた。近代に至つて公法學・財政學・國民經濟學等がその中から獨立分化し、殘餘の部分が狹義の國家學と稱せられることとなつた。狹義の國家學は、國家の起原・性質・目的・組織・機能・種別等を考察する國家原論と、その實際的應用即ち國家政策の一般的理論を考察する政治學との二部門に大別せられる。

【肇國】　テウコク　國をひらきはじめること。はじめて國を建てること。

二　解釋

1　主題

「國知らす」といふ語に現れてゐる肇國の原理。

2　構想

(1)　上なくめでたき一つの古語。（初―一四九ノ九）

(2)　世界に比較すべき語のない「知らす」。（一四九ノ一〇―一五五ノ二）

イ　支那の「有」「奄有」「治」「經」「御」「牧」。

ロ　ヨーロッパのオキュパイ・ガヴァン。

ハ　我が國の「うしはく」と「知らす」。

(3)　「知らす」は我が肇國の原理。（一五五ノ三―終）

3　敍述

〔言靈〕　――言語活動の靈活をいつた語であつて、言と事と心とは一體なものであるといふ信念から、言語の神秘的創造作用を指した語である。木靈・山靈・水靈と共に、言語に潜んでゐる靈力を感歎していつた語である。

〔古言を吟味することは一の歴史學なり。〕――古言吟味を言語學といはないで歴史學といつたところに作者の意圖がある。即ち、古言は古代を傳へるものであるといふ事實、更にいへば、言語は時代の手形であるといふ觀點から、古言に於て古代を見ようとし、それを「一つの歴史學」としたのであらう。

〔古き語は古への人の風氣・意想をさながらに後の世に傳へて云々〕――古語は古代を傳へる。しかも文獻的記實とは異なつたものを傳へる。文獻的記實が傳へるものは、概念となつた事實、知識となつた思想・感情であるが、古語が古語として傳へるものは、如實な古代精神であるといふのである。これは、荷田春滿が「古語不ト通則古義不ト明焉、古義不ト明則古學不ト復焉。」といつてその學要を定めた國學に發する思想であつて、そこには研究の對象が示されてゐる外に、その方法が發想せられてゐることも見逃しがたい。それが如何なる方法であるかは以下の考察がよく示すところである。

〔抑ト「言靈の幸はふ國」と稱ふる我が國の古言には、樣々尊きことのある中に、余は一の上なくめでたき語を得たり。」――古代精神を如實に傳へる古語は尊い。特に「言靈の幸はふ國」といはれた我が國の古語には特殊な價値があるといふ思想に立脚し、その中に比較すべきもののない程意義深い語を得たといつて問題を提出したのである。

〔土地・人民の二要素を備へたる國を支配する所作を稱へたる語は國々に於て種々なるが、〕――提出しようとする古語が「國を支配する所作」をいふ語である爲に、その意義と價値を比較的に闡明しようとしてかく提言したのである。

〔これ國土・國民を物質同樣に一の私產と見たるものにして、〕――以下、「猶專ら物質上の意想に成立ちたる語に外ならず。」といひ、「人民を馬羊に喩へたる云々」といつてゐる上にも認められるやうに、支那の政治思想が物質的私產的立場にあることの指摘であつて、それはやがて我が皇國の政治思想と異るものであることを暗示してゐるのである。

〔ヨーロッパに於ては、國土に關しては、國をオキュパイ即ち「占領す」といへり。「占領す」といふ語はやがて「奪ふ」意味をも

含めり。」――ヨーロッパの主權が征服に依つて成立したものであることを指摘し、我が皇室が然らざることを暗示してゐる。

〔又人民に對しては、ガヴァンとて、船の舵を執る意味の語を用ゐたり。……人民を一つの物質に見なしたるより轉用したるものなり。」――ヨーロッパの政治思想も亦物質觀に立脚するものであるといふ事實の指摘であつて、我が國のそれと異るものであることを暗示してゐる。

〔汝がうしはける葦原の中國は、我が御子の知らさむ國と言依さし賜へり。」――大國主神にたまはつた天照大神の神勅である。この神勅の中から、「うしはける」と「知らさむ」との二語を見出し、夫々の意義を定位し得たところに、その作者の發見がある。

〔かしこくも皇祖傳來の法は、國を「知らす」といふ語に存すといふも誣ひたりとせず。」――「知らす」が皇祖傳來の法であるとの斷言を圓曲にいつたのである。それをいふのに、「かしこくも」といふ氣持で申してゐるのである點が注目せられる。

〔國を「知り」國を「知らす」といへるは、各國に比較すべき語なし。」――それは、我が國以外にはさういふ政治思想が無いからである。こゝに古語で古代を知るといふ學問の强味がある。

〔故に、支那・ヨーロッパにては、一人の豪傑起り、多くの土地を古領し、一の政府を立てて支配したる征服の結果といふを以て國家の釋義となすべきも、我が國の天日嗣の大御業の源は、皇祖の御心の鏡もて天が下の民草をしろ知めすといふ事實より成立ちたるものなり。」――古領と征服を主權發生の理由とする國家と、「しろし知めす」といふ事實を以て天日嗣の大御業の根本とする國家との差が明らかに對照せられた。

〔かゝれば、我が國の國家成立の原理は、君民の約束にあらずして一の君德なり。」――君の御德によつて成立してゐる國家こそ地上の樂國であり、眞の神の國である。

〔國家の始は君德に基づくといふ一句は、日本國家學の開卷第一に說くべき定論にこそあるなれ。」――高大深遠な結論である。

三　批評

當時、古今東西に通じた識見ある學者とせられた作者であるだけに、支那ヨーロッパの同義語を引例比較して我が國の一つの古語の特殊性を闡明してゐる博さと共に、我が古典の中からこの一語を問題として取出した鋭さに打たれる。

殊に、文獻的記實が傳へる概念としての事實や思想感情とは異なつた具體的な思想や感情や意向が言語には如實に象徵されてゐるといふ立場は、近世の國學に發し、今日の精神史學に通ずるものである。隨つて、その方法も自然科學のそれとは異なつた、主體的把握とそれの發展としての理解に及び、更に價値體系上の定位にも達しなくてはならないものであることはいふまでもない。

更に、支那・ヨーロッパの政治思想に於ける國土・人民に對する物質觀・私產觀が指摘せられ、我が皇室の御業がこれと異なつた御立場で行はれてゐることの示唆は、我が國體に基づく政體の特色を明徵にすべき重要な意義を有する事實であり、その考察である。

三　備考

一　指導の問題

(一) 古語・漢語・英語等の引用が多いが、何回か繰返し讀ませることによつて、讀みが出來、熟達を得てゆくであらう。

(二) 問題の焦點はよくわかる。しかし、その焦點と周緣との關係を明確に定位することに多少の困難が伴なふであらう。そこに解釋の指導が要せられることと思はれる。

最初、神勅の上に問題を發見し、多くの古典の上にこれを立證し、各國語との比較によつてそれを我が「肇國の原理」と斷じゆくまで、正々堂々の論陣を進めてゐる趣を知らせたい。

殊に、古語の吟味を一つの歷史學としてゐる大前提には、國語の學習精神に對する莫大な示唆が含まれてゐることに目を開かせたい。

(三) 前三課がヨーロッパの古代・中世・近世の代表的人物の思想や作品の紹介であつたのを承けて、日本的なるものの意義と價値とを闡明しようとして本課を設けた編纂意圖をも實感させたいものである。

二　參考資料

作者の國語・國文尊重の思想を窺ふ參考として、「梧陰存稿」卷一所收の「國語教育」の全文を揭げる

我が國語國文は今は何等の障りもなく且許多の輔助材料をさへ得て十分發達し得べき時運に遭遇したり中古以來の經驗に依るに漢文は終に我が國民に適用すべからずそも〳〵言語と文章とは其の系統脈絡を同じくせざるべからず漢文は我が言語と其の淵源を一にせず語法語脈互に相一致せざれば我が國民一般の使用に應せざるも亦惟むべきにあらず

果して然らば我が國民は各自の思想を表明し及交通せむ爲には我

が固有の國語及其の國語に因緣せる普通の國文を措て將た何にか依頼せむ國語國文の使用既に確定したるときは隨て教育上に國語國文のために予ふべき位置は如何と謂へる問題を講究せざるべからず

萬物の靈として人類の最大智能は言語及文字を以て各自の意思を表明し之を他人に通知し之を遠近に傳播し之を後世に貽すにあり之を史誌に徴するに國語國文にて十分に發達し人々その意思を表明するの材料に富みたる國は一國の文明從て隆盛におもむき國民の知識年を逐ひ世を追ひて進歩するは自然の結果ならざるを得ず而して國語國文の發達せざる國は之に反す故に文明世界に國を立る者は各〻その自國の言語文章を尊重し之を普通教育の最先に置き之に最長き時間を與へて學習せしむ故に普通教育を卒業したるものは總て日用往復通信の言語文字を合格使用するにおいて差支へなく更に高等教育を卒へたるものは槃ねその論著する所に富み觀る者をして了解感動せしむるに足る

今日我が國の教育に於ける國語國文の有樣は仍遺憾を表すべきものあり普通教育は暫く措いて論ぜず其の高等教育を卒業したるものといへども亦多くは國文を以て各自の意思を表明するの能力に不足を感ずることを免れざるがごとし

この事蓋惟むべきにあらず吾人は昨日まで漢文を以て國文とするか或は漢文を雅とし國文を俗とし漢文を主とし國文を客とするの迷想を有したりき國文國語の教育に用ゐられたるは僅に近日の事にして國文の教育はなほ甚だ幼稚なり

余は我が國の教育史に溯り我が國語國文の中古に於ける幾ど絶滅の否運に遭遇したる有樣を敍述して以て今日國文教育の幼稚なる由を證明すべし

中古漢文の佛法と共に我が國に輸入せし當初の狀況は恰も渴者の水を得たるがごとく非常の熱度を以て歡迎せられ漢文を以て公私一般の用文と爲し律令格式より歴史風土記の編纂、裁判の宣告、官吏の請暇、下は租稅の帳簿、貸借の證文に至るまで總て皆不十分ながらも漢文を用ゐしめたり(當時の古文書は今仍奈良の寶庫等に保存せられたり)此の時の人の思想には其の語源語法を異にしたる漢文と國語とは遂に相合一すべからざることを思はざりしか或は又漢文漢語を用ゐて我が固有の國語を撲滅せんとの企なりしか今より測り知るに難しといへども兎に角一國の國民としては一國の命運と共に固有の國語を愛重すべきことを忘れたりしが如し固有の國語を撲滅するは事情の許さゞる所にして當時實際の有樣は漢文は獨り博士學士の間に行はれ僧侶に行はれ國民の一部に行はれしに止まり政事上の公文および政府編纂の歴史は形式の美觀に止まりて一般の國民にとりては到底其の耳目に熟すべくもあらず却て文武離隔朝野蔽塞大政振はざる原因とはなりしなり

此のごとく皐世迷霧の中に在りしも幸に豪傑の士ありて音韻及假名の用法を發明し之を通俗に用ゐ又和歌に用ゐ國語と相密著して自在に使用するを得しめその後又一歩を進めて漢字交りに活用し國語を經とし漢字を緯とし國語を主とし漢字を客として更に一層の便利を感ぜしめたり

假名の使用は一般に便利を感ぜしめたるに拘らず又その使用法の更に一歩を進めて漢字交りの物語體となり愈〻便利を加へたるに拘らず當時にありては婦女文と稱せられて朝廷の公文に用ゐられざりしのみならず鎌倉の武力第一の時に於てすら政府の記錄及裁判申渡は拙劣なる文章生又は僧侶の手を假りて竭の如き漢文を用ゐたりき徳川氏に至りては如何林道春は東照公の命を奉じて信長譜、秀吉譜を編述せしに仍漢文を用ゐたり余が尤も惜む所のものは水戸義公の大日本史を編纂せらるゝに當りて宅觀瀾のごときは國文を用ゐむとの議を建てしも當時多數の勢に制せられて遂に漢文を用ゐるに至りしことにして氣運の未だ至らざりしとはいへ遺憾のことなり思ふに幕政三百年の間文人學士彬々輩出して漢文の著述少からざりしも帆足萬里は猿の狂言なる一語を以て之を冷遇したりしにあらずや

もし徳川氏の初にあたりて一の豪傑ありて漢文の遂に國語と一致すべからざるを知りて國文の體を一定し公文に歴史に教育に之を用ゐしめたらむには其の間に生れたる俊才の士は青年の精神氣力を倩顧猥雑なる漢文の修業に用ゐずして他の有用なる事業に注射し三百年の文運は駸〻乎として一層高度の進歩に達したりしならむ要するに我が國民が國文國語に於ける固有の特性は永年月の間一種の事情のために發達を妨げられつゝ經過したりしは歴史の證明する事實なり

今は已に此の有樣のまゝに繼續すべきにあらず吾人は國語國文の中興の時期に遭へり而して久しき年月の間減裂に付せられたる國語國文の再び發達するの初期に當り吾人はこの發達を扶けて長足の進歩を爲さしめむためには何等の方法をとるべきか此れを目下の問題とす

此の方法とは第一に政府の編纂する歴史地誌の類は總て國文を用ゐる事第二に教育上に國語國文に重きを置きその教授方法に誤なからしむる事なり

國文國語の發達を圖るは復古といはむよりは寧ろ進歩といはむことを欲す蓋し舊幕以來國語國文の著者稀に出ることなきに非ざれどもその世のために廣く用ゐらるゝに至らざりしは多くは其の既に過

去時代の使用に屬したる古語古文をのみ主張し國民一般の感覺を引くべき今世普通の言語文章に遠く一種奇異の思をなさしむる弊ありしに由るなり古文古語固より尊重すべし但專門として尊重すべし又或る場合に限り一種の美術として尊重すべし之を一般の國民教育として用ゐるべからざるなり故に今の國文教育の任に居るものは自己の博雅の學識の光を紹み國民のために一般に適用すべき平易卑近にして又漢字を自在に使用する所の便利なる國文を用ゐるの方向を取ること是れ最注意すべき所なり

但し今の方言俚語は前に述べたる久しき滅裂時代の間に成立したるを以て不幸にも鄙俗の穢に陷りたれば今の俗語は直に此れを以て言文一致の國文と爲すべきの資格に達せず又普通に行はるゝ消息文も此れ亦同樣にて將來に改良を加へて謬誤の弊を正さゞるべからず故に今我が國語國文を發達せしめむ爲には此の俗語俗文を我が範圍の中に養ひ漸々に準繩の埒に就かしめ雅語雅文との間に適當なる調和を得て善美の成果を得むことを期するは卽ち吾人の今日に於ける苦心の地なり

次に國語國文の進歩を謀るためには今日の學術社會の廣博なる思想に應ずるために廣く材料を漢文漢字に取るのみならず又歐洲の論理法に取らざるべからず國文を以て文明の進歩と提携隨伴し大にしては經天緯地の雄篇長作となり小にしては工藝百科毫末の微細に至るまで敍述してもらさゞらしむるに至らしめむには決して狹隘なる區域の内に於て古言古語を愛重するのみの働きにて爲し得べきことにあらざればなり

故に國文國語の發達進歩の責に任ずるものは今日學問社會に於て一大事業を負擔する者なり余は自ら不肖をかへりみず余が職務上のみならず又一個人として此の一大負擔者たるの末列の一人たらむことを希望する者なり

終りに更に一言を要することあり余が先に教育史に渉り漢文時代を敍述したりしは過去における主格轉倒の誤りを論じたるに過ぎず余は國文を發達するためには國文を主として漢字を客とせむことを主張するものなり國文の組織結構の下に漢文漢字の豐阜なる材料を自在に使用せむことを欲するものなり漢文は國文の良友なり國文の敵にあらざるなり余は又漢學の著實中正なる道德を以て我が國の中古の進歩を促したりしことを信じ且將來に漢學の我が國の教育に於ける貴重なる一元素たるべきことを信ずる者なり故に余は漢文を排斥するがために學問世界に向ひて徒に軋轢の分子を撒くことを望むものにあらざるなり

一六　大和民族の固有性

一　解題

一　本文

「作文三十三講」の中第二十四講「純なる日本民族性の現はれた古文學」の中「古文學に見えた祖先の面影」「古事記の趣味」の大部分を採錄したものである。（作文三十三講　大正二年十一月、早稲田大學出版部發行）

「作文三十三講」は前編と後編とに分けられ、前編は序講から二十三講までで、作文の實際方面に關する事柄と、文例・插話からなつてをり、後編は二十四講から三十二講までで、日本文學の史的考察を試みたものである。

二　作者

五十嵐力（いがらしりき）。巴子・甲鳥園主人等と號する。明治七年十一月米澤市館山町に生まれ、二十七年七月東京專門學校（早稲田大學の前身）卒業。坪内逍遙の教を受け、三十四年以來同大學に教鞭を執り、一時文學部長となり、現に同大學教授である。大正十四年六月「國歌の胎生及び發達」の論文によつて文學博士の學位を得た。

國文學に深い造詣を有するのみならず、國語教育の發達にも貢獻するところ極めて多く、修辭學・文章論等にも優れると共に、名文家を以て知られてゐる。又、和歌をよくし、書に堪能である外、自ら演能もするといふ多趣味の人である。著書には「作文三十三講」の外、「新國文學史」「新文章講話」「實習新作文」「趣味の傳說」「牛農生活」「我が書齋」「平家物語の新研究」「甲鳥園隨筆」「國歌の胎生及び發達」「國語の愛護」「軍記物語研究」「平安朝文學史」等がある。

三　採擇の趣旨

前課が一語に見出される日本的なるものであつたのを承け、本課には我が古文學に見出される日本的なるものを掲げた。國民的教材であり、文藝的教材である。

五十嵐力

二　教材としての研究

一　註解

【大和民族】　ヤマトミンゾク　古來萬世一系の天皇の統御の下に我が日本國を形成してゐる民族。日本民族。

大和民族の起原については、遺物（土器・石器）・骨骼・言語・風習・傳說・古文獻等の各方面に亙り、人種學的・人類學的・考古學的・比較言語學的・國語學的・歷史的・民間傳承的諸研究が試みられ、原始日本人說・南洋渡來說・大陸渡來說・折衷說・混成說等が唱へられたが、未だ定說を見るには至らない。

〔民族〕（一四二頁參照）

【固有性】　コイウセイ　ある物又は種族などが本來的に具有する特性。そのものをそのものたらしめてゐる性質。

〔固有〕（一）人爲的でなく自然に有すること。（二）そのものの特質として本來的に具有すること。

【奈良朝以前】　ナラテウイゼン　太古から元明天皇の和銅三年（一三七〇）平城遷都まで、卽ち一般に大和時代と稱せられてゐる時代で、國文學史上では、古事記・日本書紀中の神話・歌謠、延喜式中の祝詞等の我が國最古の作品が、種々の變化を經て遂に今日傳はるやうな形に固定するに至つたまでをさす。（但し國文學史上では、大和時代文學又は上代文學と稱する編目は、一般に左者から奈良朝時代の初まで含蓄ある。）

〔奈良朝〕　國史の時代區劃の一。和銅三年の平城遷都以後、桓武天皇の延曆三年（一四四四）長岡遷都まで七十四年間、卽ち奈良に都し給うた元明、元正、聖武、孝謙、淳仁、稱德、光仁七天皇の御代をさす。（一般に平安朝時代の前を延曆十三年（一四五四）の平安遷都とするが、學ろ長岡遷都とするのが妥當であらう。）

【古事記・日本書紀の中にある百八十餘首の歌】

古事記及び日本書紀中の歌謠は、一般に記紀歌謠として一括して取扱はれる。その數は數へ方によつて多少の異同があるが、大體に於て古事記に百十餘首、日本書紀に百三十餘首、重複約五十首として、總計百九十首前後と見られる。（現神の「原本記紀研究」では古事記百七首、書紀百二十三首、「日本歌謠」では古事記百十六首、書紀百三十九首、「古事記上卷及び日本書紀卷一所收」では古事記百八十三首とし、佐々木信綱氏の「日本歌謠」では古事記百十六首、書紀百三十九首、總計二百五首としてゐる。）

又、その年代的範圍は記載の儘に隨へば、素戔嗚尊の「八雲立つ」の御歌（古事記上卷及び日本書紀卷一所收）から天智天皇の御製並びに同時代の童謠（日本書紀卷二十六所收）にまで及ぶが、仁德天皇の御代以前のものは年代的にそのまゝ認め難いものが多い。殆ど全部が何等かの傳說的・歷史的背景を持ち、且實際に口誦せられたもので、上代の

素樸な生活力、力强い感情が自由な詩形に伸び〳〵と表現せられてゐる點、藝術的に特殊な地位を占めると共に、學問的には、內容上からも形式上からも日本詩歌の源泉として重要な價値をもつてゐる。

〔古事記〕　コジキ　（四四三頁參照）

〔日本書紀〕　ニホンショキ　編年體の歷史書。三十卷。（外に系圖一卷があつたであらうが、現存の諸本は傳へてゐない。）古事記に次いで成つた、我が國現存の史書中最古のもので、元正天皇の養老四年（一三八〇）五月、舍人親王・太安萬呂等が勅を奉じて編修奉獻した。卷一・卷二は神代卷といはれ、古くから傳へられた國土創造に關する說話を集成・整理したもの、卷三以下は神武天皇に始る御歷代の御系統及びその御動靜を中心とし、それに關聯した外國との關係、臣民の系統・行動等を記述したものである。その正確を期する編纂態度はよく我が上古の歷史を明細ならしめ、又、勅撰正史の嚆矢として後の國史編纂に範を垂れた。文章は概して純漢文であるが、これを讀むには國訓を以てしてゐる。

【延喜式】　エンギシキ　古代法典。五十卷。嵯峨天皇の御代に編纂せられた弘仁式四十卷、淸和天皇の御代に編纂せられた貞觀式二十卷を併省し、當時行はれた養中年中の儀式、百官の作法、國々の恆式等を集大成したもので、延喜五年（一五六五）醍醐天皇が藤原時平等にその撰修を勅せられたが、中途で時平が歿したので、十二年更に藤原忠平等に勅してその裁成を促さしめ給ひ、前後二十三年を費して延長五年（一五八七）十二月に奏進された。（同時に延喜格十二卷をも撰進した。）後約四十年を經て冷泉天皇の康保四年諸國に頒布して普くこれに據らしめ、永く後世の規範となつた。當時に於ける朝廷の制度、各官衙の事務章程に關する唯一の纏つた文獻であると同時に、神社・風俗・產業・經濟・服飾・器具等、當時の一般社會生活の狀態を知る上に於て須要な資料である。その中卷第八は特に「祝詞式」とも呼ばれ、卷首に祝詞に關する制を揭げ、「新年祭」以下「出雲國造神賀詞」に至る二十七篇の祝詞を收めてゐる。

因みに、王朝時代には國家の成文法は隋唐の制に倣つて律・令・格・式の四種に大別せられた。その各〻の意義に就いては弘仁格式の序に、「律以懲肅爲宗、令以勸誡爲本、格則量時立制、式則補闕拾遺」とある如く、律は罪人を罰する刑律、令は一般に公布する敎令、格は律・令を改廢・增補する臨時の法令、式は律・令・格の施行細則の類である。

【祝詞】　ノリト　祭祀に當り、神前に於て、神祇に奏上し、若しくは參集せる諸王・群臣・神職等に宣布する文詞。（文中に「祝部等申す」と言つてあるもの

（ガキ一體、「祝詞」を宣り、なつてゐるものが其の體。）現存する上代の祝詞は、延喜式卷第八に收められた所謂「延喜式祝詞」二十七篇（中一篇は重複）と、藤原頼長の日記「台記」の別記に收められた「中臣祓詞」一篇とである。（「祝詞」は後世のものであるとする意見の説で、一般には「祝詞」に含めて取扱はれる。）その内容は祭祀の性質・目的等に應じて異なるが、一般に皇室の長久、國家の繁榮、國民の幸福等の願を主とし、組織の上からは、冒頭と結語とを別にして、祭祀の本旨又は來歴を語る神話的記述と、幣帛を獻つて祈願の旨を述べる祈禱的記述との二部分から成り（比較的新しい時代の祝詞に係るものと見られるものには、説明的記述を缺くものもある）、形式上では、抽象的・概念的な語句を連ね、譬喩・誇張及び列擧法・反復法・對句法等の修辭を盛に用ゐて、單純・素樸のうちに莊重・崇高な趣を具へてゐる。各篇を通じて見る時は、内容・組織・修辭共に一定の型にはまつてゐて、文學的には古事記・萬葉集に劣るとせられるが、上代國民の宗教感情を敍べた抒情的敍事文學として特殊の價値をもつてゐる。

一般に「のりと」は「のりとごと」の略と見られ、意義に就いては古來諸説があるが、「宣説言（のりとごと）」の義とする宣長の説が最も廣く行はれてゐる。又、その制作年代に就いても古來種々論ぜられてはゐるが、要するに長年月の間に次第に改修せられて一定の形を具へるに至り、遂に平安朝の初期に典籍に記されて固定したものである爲、その推定は殆と不可能に近く、たゞ内容・文體・用語等の上からほゞ新舊を分かち得る程度である。一般に、祈年祭・廣瀬大忌祭・龍田風神祭・月次祭・大殿祭・御門祭・大祓・鎮火祭・道饗祭・遷却崇神祭・出雲國造神賀詞の十一篇が比較的古い趣を具へ、奈良朝以前から奈良朝にかけての作品であらうとせられてゐる。

【大祓詞】　オホハラヘノコトバ　毎年六月及び十二月の末日に行はれる大祓の時、皇子・皇族・百官男女に對し宣り聞かせられる所謂宣命體の祝詞。古へは專ら中臣氏がその事に當つた爲、中臣祓・中臣氏祓詞・中臣祭文・中臣祓祭文等とも呼ばれた。延喜式祝詞中朗々誦すべき長篇の名文で、最初に大祓を行ふべき旨を述べた序の部分があり、本文に入つて天津罪・國津罪の一切の罪が、「天津祝詞乃太祝詞事（あまつのりとのふとのりとごと）」によつて消滅せられるに至る次第を漸層的に敍して、譬喻の奇を盡くし、修辞の妙を極めてゐる。内容・組織・修辞等の上から現存の祝詞中比較的古い時代の作の一つであらうと推定せられるが、何れの時代に何人によつて現在の如き形に整理せられたかは勿論斷定するだけの確證がない。

〔大祓〕　百官男女・天下萬民の罪穢を祓ひ清める爲に行はれる儀式。穢・罪・災禍等を除去して清淨と幸福とを祈り求める爲に祓を行ふ慣習は、太古から我が民族の間に行はれたが、大化改新以後朝儀の發達に伴なひ、特に毎年六月・十二月の晦日、皇城の朱雀門前に於て百官男女を會し天下萬民の爲に公に行はれるに至り、これを大祓と稱した。この恒例の大祓の外、大嘗祭又は齋宮・齋院の卜定及び群行等の神事、或は宮中に穢のあつた時、重臣が左遷せられた時、疫病の流行、妖星の出現、風雨の災害等の凶事のあつた時等、臨時にも行はれた。

大體延喜の頃までは極めて盤庸に行はれたやうであるが、後世次第に衰頽して應仁の亂後は全く廢せられ、德川時代に入り元祿四年の再興後も、舊の如くには行はれなかつた。然るに明治四年改めて舊儀を復興、翌年更に儀を定めて再び宮中に於て行はせられることとなり、各府縣にも達せしめられた。尚、全國神社に於ける現行の大祓の次第は大正三年の決定である。

【祈年祭】　トシゴヒノマツリ（後世普通にキネンサイともいふ）毎年二月年穀の豐穰を祈禱し、天皇の御安泰を祈り奉り、併せて國家の安康を祈る祭儀。古へは二月四日に神祇官及び國司の廳に於て祭祀を行ひ、各神社の神官がその幣帛を受取り、歸社の上夫々祭祀を執行した。（後大神宮には、特に幣帛を齎した使者が遣はされた。）

神を祀つて五穀の豐穰を祈り國家の安泰を祈請する思想は我が國古來のものであるが、祈年祭の起原は詳でない。國史の上では、續日本紀卷三に「慶雲三年閏正月庚子、是日甲斐信濃越中但馬土佐等國一十九社、始入三祈年祭帛幣二」（慶雲は文武天皇の御代の年號）とあるのが初見で、法令の上では大寶令に始めて規定せられた。次いで貞觀儀式・延喜式等に詳に規定せられて當時は盛大に行はれ、その祭に預る神社の數は、白河天皇の永保元年以來全く一定して二十二社と稱せられた。武家時代に入つて漸次衰頽し、應仁の亂後は全く廢絶したが、明治二年復興せられ、爾後種々の變遷を經て今日に至つてゐる。現行制度では、宮中に於かせられては二月四日に頒幣の儀を行はせられ、十七日に小祭を以て宮中三殿（賢所・皇靈殿・神殿）に祭典を執行し、天皇陛下の御親拜がある。又、皇大神宮には勅使を遣はされ、十七日に大祭が執行せられる。官國幣社以下全國の神社に於ても十七日に大祭を執行し、夫々幣帛供進使が參向することになつてゐる。

その神祇官に於ける祈年祭に用ゐられた祝詞は延喜式に收められ、當日天神地祇の前に奉し、參集せる諸社の神主・祝部に讀み聞かせる宣命體のもので、（一）冒頭及び天社・國社に申す詞、（二）御年神に申す詞、（三）大御巫の祭る神に申す詞、（四）座摩御巫の祭る神に申す詞、（五）御門御巫の祭る神に申す詞、

(六)生馬御巫の祭る神に申す詞、(七)辭別として大照大神に申す詞、(八)御縣に坐す神に申す詞、(九)山口に坐す神に申す詞、(一〇)水分に坐す神に申す詞、(一一)辭別として神主・祝部等に宣る詞、の十一節から成る特殊の組織を具へてゐる。その文章は比較的古い特色を有してゐるが、祈年祭の祝詞として特に作られたものではなく、夫々の神に奏した別々の祝詞を適當に抜き取るか又は簡約するかして一節とし、それを綜合して一篇としての首尾を整へたものであらうと推定せられる。

【罪】 ツミ　こゝは、惡行・穢・災・病等、すべて厭ひ惡むべきものの稱。

宗教・道德・法律等の未分化の狀態にあつた上代に於ては、罪と穢との間に截然とした區別はなく、罪惡・汚穢・災禍・疾病等、神又は人の忌み嫌ふところのものを總稱して「つみ」又は「つみけがれ」と稱した。大祓詞の中にも「天之益人等我、過犯(ヤシロヲヨゴシ)雜雜罪事(ザツザツノツミコト)波、天津罪止、畔放・溝埋・樋放・頻蒔・串刺・生剝・逆剝・屎戶、許許太久乃罪乎、天津罪止法別(ノリ)國津罪止、生膚斷・死膚斷・白人・胡久美、己母犯罪、己子犯罪、母與子犯罪、子與母犯罪、畜犯罪、昆蟲乃災、高津神乃災、高津鳥災、畜仆志、蠱物爲罪、許許太久乃罪出(ヒ)」とあり、又宣長も古事記傳に於て、「つみ」は「つゝむ」の約で、惡行のみでなく、穢又は禍等の如き自然的のことであつても總べて厭ひ惡むべき凶事は皆「つみ」といふと說いてゐる。

【穢】 ケガレ　こゝは、神及び人の忌み嫌ふ一切の不淨の稱。

我が國民は古來極端に清淨を好み、殊に神事に於ては罪科と共に不淨汚穢を忌み嫌ふ風が強い。穢を身に受けることを觸穢と稱し、穢を祓ふ爲には禊が行はれた。神代にも伊弉諾尊が夜見國の穢に觸れて檍原に禊せられた故事が傳へられ、今日でも神事には修祓・齋戒・禁忌等の風が行はれ、民間でも火の穢、血の穢、出產の穢、死葬の穢等が愼まれてゐる。

【忌んだ】 イんだ　嫌ひ避けた。

〔忌む〕 (一)嫌ひ避ける。(二)憚る。(三)憎み嫌ふ。

【直き】 ナホき

〔直し〕 (一)歪みがない。眞直である。(二)正しい。すなほである。正直である。(三)平かである。(四)よのつねである。ありのまゝである。こゝは(二)。

【夥年】 ホウネン　穀物のよくみのること。又、その年。

【日本武尊】 ヤマトタケルノミコト　御名は小碓命。又、日本童男・倭男具那王とも申し奉る。景行天皇の皇子。御母は皇后稻日太郎女。景行天皇の二十七年(七五七)勅命を奉じて熊襲を征討せられ、歸途吉備・難波等の賊を征し水陸の路を開き給うた。四十年再び勅命を奉じて東夷征討の途に就かせられ、途次皇大神宮を拜して皇姨倭姫命から天叢雲劍を受けさせられ、その威靈により駿河に野火の難を免かれて賊を滅し給ひ、相模から走水の海を渡らせられ、海上風波の難に遭つて妃弟橘媛を失はせられた。更に陸奥に入つて日高見の國の蝦夷を平げられ、歸途常陸・上野・武藏・甲斐・信濃・美濃等を經て尾張に出でさせられ、近江の伊吹山の賊を平げようとせられて病を獲られ、四十三年(七七三)遂に伊勢の能褒野に薨じ給うた。御年三十。天皇その早世を惜しみ給ひ、尊をこの地に葬らしめ、更に白鳥の奇瑞によつて大和の葛城・河內の古市に白鳥陵を營ませられ、又、御名代(皇子・皇女等の御名を傳へる爲に、その御名又は居所の名を負はせて設かれた部民)武部を定めさせられた。

【臨終】 リンジュウ　「生命の終に臨む」の義。死にぎは。いまは。死期。最期。終焉。末期。臨命終。

【命のの御歌】 命の全き人はあの平群の山の隱白橿か葉を折り髻華(插頭)にして遊べよ。

古事記上卷には次のやうにある。(傳說を記本に據)

其の國より科野國に越えまして、乃科野の坂神を言向けて、尾張國に還り來まして、先日に期りおかしし美夜受比賣の許に入り坐しつ。〔中略〕其の御刀の草那藝劍を、其の美夜受比賣の許に置きて、伊服岐の山の神を取りに幸行しき。

是に詔りたまはく、茲の山神は、徒手に直に取りてむとのりたまひて、其の山に騰ります時に、山邊に白き猪逢へり。其の大きさ牛の如くなりき。獨言詔して詔りたまはく、是の白き猪に化れる者は、其の神の使者にこそあらめ。今殺らずとも、還らむ時に殺りてむとのりたまひて、騰り坐しき。是に大氷雨を零らして、倭建命を打ち惑しまつりき。(此の白猪に化れる者は、神の使者にはあらで、其の神の身なりけむを、言擬したまへる故に因りて、惑されたまへる也。)故還り下り坐して、玉倉部の清泉に到りて、息ひ坐せる時に、御心稍醒めましき。故其の清泉を、居寤の清泉とぞ謂ふ。

其處より發して、當藝野の上に到りましし時に、詔りたまへるは、吾が心恒は虛よりも翔り行かむと念ひつるを、然今吾が足得歩まず。たぎしの形に成れりとぞのりたまひける。故其地を、當藝と謂ふ。其地より、差少し幸行すに、甚く疲れませるに因りて、御杖を衝かして、稍に歩みましき。故其地を、杖衝坂と謂ふ。尾津前の一松の許に到り坐せるに、先に御食せしし時、其地に忘らしたりし御刀、失せずて猶有りき。爾御歌曰し

たまはく、

尾張に　直にむかへる　尾津の崎なる　ひとつまつ吾
兄を　ひとつ松　ひとにありせば　大刀はけましを
きぬきせましを　ひとつまつ吾兄を

其地より幸して、三重村に到りませる時に、亦吾が足、三重の勾如して甚く疲れたりと詔りたまひき。故其地を、三重と謂ふ。

其より幸行して、能煩野に到りませる時に、國思ばして歌曰ひたまはく、

倭は　くにのまほろば　たたなづく　あをかきやま
ごもれる　倭し　うるはし

又歌曰

いのちの　全けむひとは　たたみこも　平郡のやま
の　熊白樫が葉を　髻華にさせ　その子

此の歌は、思國歌也。又歌曰ひたまはく、

はしけやし　吾家のかたよ　雲居たちくも

此は片歌也。此の時御病甚念。銀に御歌曰を、

をとめの　とこのべに　わがおきし　つるぎの大刀
その大刀はや

と歌ひ竟へて卽ち崩りましぬ。

日本書紀卷七には、景行天皇がその十七年に日向子湯縣（現宮崎縣児湯郡）なる丹裳の小野に行幸せられた時、野中の大石に登つて都を偲び給うて詠ませられたものとし、しかも三首を次のやうな一首の長歌としてゐる。（相聚文庫本による。）

愛しきよし　我家の方ゆ　雲居起ち來も　倭は　國の
眞區　疊薦就く　青垣山　籠れる　倭し　麗し　命
の　全けむ人は　疊薦　平群の山の　白樫が枝を
髻華に插せ　此の子

これに就いては、橘守部もいつたやうに、景行天皇の御製と見ることは不合理の點が多く、隨つて古事記の傳が正しいとせられてゐる。尙、守部は、この三首はもと日本書紀の如き順序に詠ませられた一首の長歌であつて、尊が御病の苦しい最中に歌はせられたものであるから、自然三度に歌はせられたのが、三首の作のやうにいひ傳へられたのであらうといつてゐる。

〔全けむ〕　マタけむ　全からむ。「善からむ」「惡しからむ」を「よけむ」「あしけむ」といふ如きもの。

〔たたみこも〕　疊薦　「へ」の枕詞。一般には「疊薦」から幾重といふ意を聯想して「へぐり」の「へ」にいひかけ枕詞としたものといはれてゐるが、守部は、疊こもを機るには重ねた薦の邊を括りしめるから「へぐり」と言ひかけたか、或は「經緯」の義で、編んで行き繰り下す意かといふ。

〔平群の山〕　現奈良縣生駒郡生駒村の邊の山地で、生駒村はもと平群郷と稱した。

〔隱白樫〕　枝葉の繁つた樫（ほ櫨上）で、「くま」は隱る意といふ。古事記中卷「葉廣熊白樫」同下卷「山の峽に立ち榮ゆる葉廣久麻加斯」

〔髻華に插せ〕　髻華として插せ、の意。古事記傳に「うずに插すとは、別にうずといふものありて、それにさすにはあらず、插す物ぞ卽ちうずなる。後の插頭といふ物が卽ち古へのうずなり」とある。

「髻華」は、古へ花木の枝葉を頭に插して飾としたもの。卽ち鬘、後にいふ插頭である。後には金銀や鳥獸の尾でも造つた。

〔その子〕　尊が從者をさして呼び掛けられたとする說が多いが、作者は故郷人を親しんでいはれたものとし、原文中、本文に省略せられた部分で、「故郷に居る命全き、わが愛する子等よと親しんで云はれた詞であります」といつてゐる。

【能褒野】　現三重縣鈴鹿郡の平野。

「稜威言別」に、地勢が西北に向かつて高くなつてゐるから「登野」の義であらうといふ。

【薨り】　ミマカり

〔薨る〕　「現世からあの世へ身罷る」義。死ぬ。物故する。（二九五頁「薨れ」參照）

【大和】　ヤマト　（一）畿内五國の一。現奈良縣の地。（二）我が國の異稱。こゝは（一）。

大和は和名抄には「於保夜萬止」と訓じてあるが、大はもと美稱で、常には「夜萬止」とのみいふ。古事記、仁德天皇の御製に「夜麻登」、萬葉集、雄略天皇の御製に「山跡」とあり、魏志に「邪馬臺」とある。（但し、邪馬臺は九州であるとする說もある。）昔、「倭」の字を記したのは漢・魏の人の我が國を稱した異名を假り用ゐたのである。

聖武天皇の天平九年に「大倭國」を改めて「大養德」とし、十九年もとにかへり、孝謙天皇の天平寶字元年に更に改めて「大和」とされた。我が天孫民族が定著して、國をとゝのへ文化を創めた、由緒深い地である。

【思國歌】　郷國を慕つて歌ふ歌。

「しぬぶ」は「しのぶ」に同じ。慕ふ、戀ふ、思ふ、の意。

【旅路】　タビヂ　（一）旅行の道筋。（二）たびさき。こゝは（二）。

【邪神の毒氣に中り】　日本武尊が伊吹山（滋賀・岐阜兩縣に亙がる名山。古事記には「伊服岳」日本書紀には「膽吹」）

歌謡」）に於て、悪神の毒氣に觸れて、御正氣を喪はせられたことをさす。（四六一頁「命ごの御歌」參照）

悪神の毒氣に觸れて正氣を喪ふ話は古代の傳説に類例多く、古事記・日本書紀にも、神武天皇御東征の折紀伊の熊野村に於て山神の悪氣に觸れ、皇軍が悉く正氣を喪つた話が見える。

〔邪神〕　ジャシン　禍をあたへる神。不正な神。まがつび。

〔毒氣〕　ドクキ　毒を含んだ氣。

〔中る〕　アタる　こゝは、中毒する、毒を受ける、の意。

【寄語す】　ことづける。傳言する。

【かざし】　髪に插み。

〔かざす〕　插頭す　（一）草木の花・枝又は造花等を髪・冠等に插む。（二）上に飾りつける。

【陽氣に】　ヤウキに　はれ〳〵しく。賑はしく。

〔陽氣〕　（一）陽の氣。萬物の將に動き又は生ぜんとする氣運。（二）賑やかなこと。氣のはしやぐこと。（三）氣候。

【樂しめかし】

「かし」は、一旦言ひ切つた文の後につけて、念を押し力を添へる助詞。

【樂天的】　ラクテンテキ　天命を樂しんで世の中を樂觀するさま。常に理想の實現を信じ悲觀・失望することのないさま。

【積極的】　セキキョクテキ　肯定的・能動的なさま。進んで物事を行ふさま。（「消極的」の對）

【向上的】　カウジャウテキ　現在の狀態に滿足せずして、理想に向かつて絶えず自己を發展させようとするさま。

【光明的】　クワウミャウテキ　常に物事の光明面を見出すさま。常に希望を見失はないさま。

【氣象】　キシャウ　（一）生まれついた心だて。もちまへの心。きだて。氣質。氣性。（二）寒・暑・晴・曇・雨・風等、大氣中に生ずる物理的變化の現象。こゝは（一）。

【矢も楯もたまらぬ】　ヤもタテもたまらぬ　情思が切迫して自ら制止することが出來ないさま。

「矢にても楯にても敵の襲來を防ぎ得ぬ」義とも、「矢も」は單に口調として添へたまでであるともいふ。

【手もなく】　（一）何の術も用ゐないで。何の面倒もなく。たやすく。（二）論を用ゐず。そのまゝ。こゝは（一）。

〔手〕　こゝは、てだて、てくだ、手段、方法、の意。

【女裝すれば云々】

日本書紀卷七、景行天皇二十七年の條に次のやうにある。古事記の記事も大體同樣である。

十二月、熊襲國に到ります。因りて以て其の消息及び地形の嶮易を伺ひたまふ。時に熊襲に魁帥者あり、名は取石鹿文、亦川上梟帥と曰ふ。悉に親族を集へて、宴せむと欲ふ。是に日本武尊髪を解きて童女の姿を作り、以て密に川上梟帥の宴の時を伺ふ。仍りて劍を裙の裏に佩きたまひて、川上梟帥の宴の室に入り、女人の中に居ます。川上梟帥其の童女の容姿に感でて、則ち手を携りて席を同じくして、杯を舉げて飲せつつ戲れ弄る。

【川上梟帥】　カハカミノタケル　熊襲族の長。

「熊襲」（日本書紀は「熊襲」、古事記は「熊曾」と記してゐる）は上古九州地方に住した種族。「肥人」と「襲人」との併稱で、「肥人」は「襲人」の熟化したもの。又兩者最後の古據地肥後球磨郡と大隅囎唹郡の兩郡名を合はせて「球磨囎唹」とも書く。性勇悍で、屢〻邊境を亂し、景行天皇・仲哀天皇の兩朝に征伐を受け、その多くは同化したが、一部は後世までも同化しなかつた。

【人を信じて、云々】

古事記中卷に次のやうにある。

故爾に相武國に到りませる時に、其の國の造許り白さく、此の野の中に、大沼有り。是の沼の中に住める神、甚く道速振神也とまをす。是に其の神を看行に、其の野に入り坐しつれば、爾其の國造、其の野に火をなも著けたりける。故欺かえぬと知しめして、其の鏑倭比賣命の給へる嚢の口を解き開けて見たまへば、其の裏に火打ぞ有りける。是に先づ其の御刀以て草を苅り撥ひ、其の火打を以ちて、火を打ち出で、向火を著けて、燒き退けて、還り出でまして、其の國造等を皆切り滅し、卽ち火を著けて燒きたまひき。故（其地をば）、今に燒遣とぞ謂ふ。

【喪】　エミシ・エビシ・エビス　こゝは、往古、東國地方から奥羽・北海道に蟠居し、王化に服さなかつた異民族。（一七七頁參照）

【直往】　チョクワウ　（一）ひたすゝみに進むこと。（二）まつすぐに行くこと。こゝは（一）。

【薙ぎ返し】　ナぎカへし　草を薙ぎ拂つて火を退け返し。

日本書紀には「燧を以て火を出し、向燒けて免るることを得たり」とある。

〔薙く〕　横に打拂つて切る。

【吾が心、恆は虛よりも翔り行かむと念ひつるを】（四六一頁「命ごの御歌」參照）

〔恆は〕　ツネは　いつもは。平生は。

〔虛〕　こゝは、空。虛空。

〔より〕　こゝは、動作がある場所を經由して進み行はれる意を示す。竹取物語「あたりよりだにな歩きそ」大和物語「この車の前よりいきたり」

山田孝雄氏の「日本文法學概論」に次のやうにある。

かくの如き「より」をば、古來「を」に通ふ「より」なりといへり。然れどもこの說き方は甚だ粗雜にして、「より」はおのづから「を」と趣を異にせるを忘れたるなり。卽ち「を」はその地點を主眼として現にそこに動作々用の行はるゝをいひて他をかへりみず。「より」は其の動作々用の引きつゞき行はるゝものゝうちにての觀察の基點たる地位を示すものなり。この故にこの區別は微妙なるものにして國語の妙諦實にかくの如き點に存するなり。

〔翔る〕　カケる　空高く飛ぶ。

【薨れまして後は白鳥となつて、云々】

日本書紀卷七、景行天皇四十年の條に次のやうにある。

仍りて伊勢國の能褒野陵に葬しまつる。時に日本武尊白鳥に化りたまひて陵より出で、倭國を指して飛ぶ。群臣等因りて以て其の稚槻を開きて視れば、明衣空しく留まりて屍骨は無し。是に使者を遣して白鳥を追ひ尋ぬれば、則ち倭の琴彈原に停れり。仍りて其の處に於て陵を造る。白鳥更た飛びて河內に至りて舊市邑に留まる。亦其の處に陵を作る。故れ時人是の三陵を號けて白鳥陵と曰ふ。然れども遂に高く翔りて天に上りき。徒に衣冠を葬しまつる。

〔白鳥〕　ハクテウ　こゝは、白い鳥、の意。

【足許を固める】　アシモトをカタめる　手近なところを確にする。身邊を鞏固にする。

〔足許〕　こゝは、その身に接近した場所。手近なところ。

【標章】　ヘウシャウ　しるし。記號。符號。

【上代】　ジャウダイ　歷史の時代區劃の一。上古・中古・近古・近世・現代の五期を劃する場合の上古に當る。我が國では神武天皇から大化改新（一三〇五）までをさす。（但し國文學史上では奈良朝時代の終までを含める。）

【繋がつて居る】　かゝはり繋がつてゐる。關聯してゐる。

【國民性】　コクミンセイ　國民一般に共通した性情。一國民としての精神的特質。國民としての個性。

【須佐之男命】　スサノヲノミコト　「素戔嗚尊」（日本書紀）とも記し奉る。天照大神の御弟。神性勇悍にして勇猛の御所業多く、天照大神の御怒に觸れて天磐戸の變を起され、根の國に逐はれて出雲に出でさせられ、八岐の大蛇を斬り天叢雲劍を得て大神に獻じられた。又、御子五十猛命と共に新羅國に渡りて曾尸茂理の處に居給ひ、還ります時に造船の材となるべき樹木を始め多くの樹種を齎して植林の途を敎へ給うたと傳へ奉る。今氷川神社（現埼玉縣北足立郡大宮町に在る官幣大社）・八坂神社（現京都市東山區祇園に在る官幣大社）等を始め各所に祭られ給ふ。

【高天の原】　タカマのハラ　「高い大空の平坦にして廣闊な場所」の義。神代に於ける大和民族の發祥地。大和民族が大和や日向に入る以前、卽ち未だ各地に相分かれなかつた時代の所在地。「高天が原」ともいふ。

高天の原の場所については、（一）天上說、卽ち天空にあるとする說、（二）地上說、卽ちこの地上に求めて、或は國內（大和國・常陸國・伊勢國・朝鮮等）、或は國外（揚子江沿岸・滿洲・馬來半島・バビロン・アッカド・ヘブライ等）とする說等がある。

【悉に動み】　コトゴトにトヨみ　殘らず響き渡り。

〔動む〕　（一）鳴り響く。響き渡る。轟き響く。（二）聲を擧げてさわぐ。騷動する。

【天照大御神】　アマテラスオホミカミ　（三五〇頁「日神」參照）

【聞き驚かして】　お聞き遊ばして驚かせられ。

一六　大和民族の固有性

「す」は、尊敬の意を表す助動詞。「驚かして」（一五九ノ一）「持たして」（一六〇ノ一）「取佩ばして」（一六〇ノ二）

【なせの命】　なせのミコト　こゝは、須佐之男命を親しんで申された語。

〔なせ〕　汝兄　古へ、女から兄・夫・弟等の男子を親しんで呼んだ語。

【善しき心】　睦しく異心のない心。

〔善し〕　こゝは、友情が厚い、睦しい、仲がよい、等の意。

【みづら】　角髮　上古に於ける男子の髮の結び方。髮を頭の中央から左右に分けて耳の所で結ね、その中央を緒で結んで垂れたもの。後世は主として年少者の髮の結び方となつて、「びづら」又は「びんづら」と稱した。

【左右】　ヒダリミギリ

「みぎり」は「みぎ」の古語。

【髮】　カヅラ　（一）古昔、蔓草等を卷きつけて髮が亂れないやうにした一種の髮飾。（二）頭髮の少きを補ふ毛。かもじ。そへがみ。（三）毛髮で種々の髻形を造り、頭にかぶつて扮するもの。こゝは（一）。

【八尺勾瓊の五百津のみすまるの珠】　美しい勾玉を數多く緒に貫ぬ

き連ねた長い玉飾。

日本書紀には「八坂瓊五百箇御統之玉」とあり、延喜式祝詞、大殿祭にも「瑞八尺瓊能御吹五百都御統乃玉」等とある。

〔八尺〕　ヤサカ　美玉を産する地名であるとか、「彌榮」又は「彌眞則」の義とか、種々に解釋せられたが、「彌尺」の義で、長い緒に貫ぬき連ねたものの意とする說が穩當であらう。

〔勾瓊〕　マガタマ　「勾玉」「曲玉」「勾珠」「勾璁」等とも書く。古へ、裝飾として用ゐられた玉の一種。概ね硬玉・瑪瑙・碧玉・水晶・滑石等を材料とし、その他玻璃・牙・角・粘土・銅等も使用せられ、形も種々であるが、概して細長く全體が彎曲し、頭が太く末が稍窄くなつてゐる。大きさは二三分から二寸に達するものもあるが、普通は一寸前後である。もと動物の牙に孔を穿ち、緒に貫ぬいて裝身具としたものが起原であらうといはれ、多く一連として頸・頭・手・足等に佩用せられ、又金冠・齋瓮等の器物にも用ゐられ、更に祭禮の時榊の枝にとりつけて神を祀るのにも使用された。（現使用としては今も襲殺くべかしする祭具の一となつてゐる。）

〔五百津〕　イホツ　多くの數。多數。日本書紀卷一「五百箇眞坂樹」

〔みすまる〕　御統　「み」は美稱。「すまる」は「統ばる」の轉。多くの勾玉・管玉を緒で貫ぬき統べて環狀としたもの。

〔そびら〕　背　「背平」の義といふ。せなか。せ。

【千入の靭】　千本入の靭。數多くの箭をさした靭。

〔千入〕　「千箟入」の約。「箟」は矢柄卽ち矢の幹。一つの靭に千本の箭をさし入れること。

〔靭〕　ユギ　「箭筒」の轉とも、「弓筒」の義であるともいふ。古昔、矢を盛つて背に負うた具。木・銅・革等で作り、皮帶をつけて背に負つた。矢入具として最も早く發達したものであるが、奈良朝の末期胡籙の發生するに及んで廢れた。

【五百入の靭】　イホノリのユギ　五百本入の靭。千入の靭よりも小形のもの。

【いつの竹鞆】　高い音を發する立派な鞆。日本書紀には、「稜威之高鞆」とある。

〔いつ〕　稜威　嚴厳な威光。強い勢。

〔竹鞆〕　「高鞆」に同じ。音高く響く鞆。

「鞆」は、古昔、矢を射るとき臂に結びつけて、弦が觸れて高く鳴るやうにしたもの。熊・鹿等の皮で製し、中に稻藁等を滿たし、革緒で結ぶやうにした圓形の具。射返した絃が臂に觸れるのを防ぎ、兼ねて敵を威壓する爲に用ゐられた。

【取佩ばして】　トリオばして　お取著けになつて。

〔佩ぶ〕　(一)身に著ける。腰にまとふ。(二)持つ。携へる。

【弓腹】　ユバラ　「弓筈」に同じ。弓の兩端の弦をかける部分。日本書紀には「弓弦」とある。尙、その語義に就いては、古事記傳は弓末に腹といふ所があるからだといひ、稜威道別は弓張の義で、弦を張り始める所の名であるとしてゐる。

【堅庭は向股に踏みなづみ】　堅い地面に足を御股までも踏み入れられて。

〔堅庭〕　カタニハ　地面の堅い庭。

〔向股〕　ムカモモ　「向かひ合つてゐる股」の義。兩股。股。

〔踏みなづみ〕　踏み拔いて。踏んで足をぬき入れ。

「なづむ」―(一)しぶりとゞこほる。行きわづらふ。澁滯する。(二)惱み煩ふ。活氣づかない。(三)一方にかゝはる。拘泥する。執著する。(四)一筋に心を寄せる。思ひ込む。執心する。

【沫雪なす】　アワユキなす　沫雪のやうに。

〔沫雪〕　「泡雪」とも書く。「雪」に同じ。泡の如く消え易いのでいふ。

〔なす〕　「のす」ともいふ。の如く、のやうに、等の意を表す語。古事記卷上「久羅下那洲多陀用幣琉之時」

【蹴ゑ散かして】　蹴散して。

〔蹴う〕　(他動、下二)　「蹴う」とも書く。「蹴る」(他動、下一)の古語。

「蹴う」は轉じて「蹴ゆ」(下二)とも活用し、それらが「蹴える」「蹴ゑる」(下一)となり、更に「蹴る」となつた。

〔散かす〕　はらくやうにする。ばら〳〵に散らす。ぼろ〳〵に崩れさせる。

【いつの男建び踏み建びて】　非常な御威力で大地を踏みしめ、雄々しく振舞つて。

「男建び」「踏み建び」と同じやうな動詞を重ねて、意味を強めたのである。

〔男建び〕　ヲタケび　「雄叫び」「雄哮び」「雄誥び」等とも書く。雄々しく叫ぶこと。

「建ぶ」は、猛く荒びる。雄々しく振舞ふ。猛き聲を出す。猛く叫ぶ。

〔踏み建ぶ〕　足踏みしてたけぶ。

【何故】　なにゆゑ。なぜ。

【權幕】　ケンマク　怒りはらだつた容態。昂奮したすごい顏つき。

【下心】　シタゴコロ　(一)以前からの心構へ。かねてのたくらみ。

(二)心のそこ。本心。心底。こゝは(二)。

【玲瓏】レイロウ　(一)玉などのふれて鳴る清らかな音。(二)麗しくてり輝くさま。(三)玉などの透きとほり、又明らかなさま。こゝは(二)。

「玲」―(一)玉又は金屬の鳴る音。(二)透きとほつて美しいさま。鮮明なさま。

「瓏」―(一)玉が觸れ合つて鳴る音。(二)あきらかなさま。あざやかなさま。

【燦爛】サンラン　「粲爛」とも書く。あざやかに輝くさま。きらびやかなさま。華美・鮮明なさま。

「燦」は、あざやか。きらびやか。

「爛」―(一)たゞれる。(二)光る。又、光るさま。ぴか〳〵。きら〳〵。

【左手】ユンデ(厦)　(一)弓を持つ方の手。左の手。(二)左の方。こゝは(一)。

【臂】ヒヂ　(一)腕の關節の部分。又、その上下の部分。(二)曲り出て肘の形をなすもの。こゝは(一)。

【踏みぬかるばかり】踏みぬけるほど。

【土くれ】土塊　(一)土のかたまり。(二)はか。墳墓。(齋宮の忌詞。)こゝは(一)。

〔くれ〕かたまり。「石くれ」

【御稜威】ミイツ　「稜威」の敬語。尊嚴なる御威光。

【あたりを拂ふ】(一)傍に寄りつかないやうにする。ところをおく。(二)傍に寄りつきがたい程に盛な勢がある。傍若無人の勢がある。こゝは(二)。

【武者ぶるひ】ムシャぶるひ　心が勇み立つあまりに身體の震へること。

【ゆゝしく】雄々しく。勇ましく。

〔ゆゝしい〕(一)忌々しい。恐しく又は嫌はしくて、憚られる。(二)善惡・正邪を通じて、甚だしい。すばらしい。非凡である。(三)勇力が非凡である。雄々しい。たけ〳〵しい。けなげである。

【威丈高】キタケダカ　「居丈高」「居長高」「威猛高」等とも書く。その身を高く聳かすこと。怒を含んでゐるさまなどにいふ。

【立ちはだかつて】立ちふさがつて。

〔はだかる〕(一)ひろがり開く。ひろがる。(二)股をひろげて立つ。(三)はゞをきかす。

【待ちつけ】

〔待ちつける〕待つてその時又はその人に遭ふ。待ちうける。

【入國】ニフコク　(一)國内に入り込むこと。(二)領主の始めてその領地に入ること。入部。入境。こゝは(一)。

【敍述】ジョジュツ　次第をたてて述べること。述べたてること。又、その文章。敍說。陳說。

【うぶ】(一)產まれた時のまゝなこと。(二)生來のまゝで飾氣のないこと。うひ〳〵しいこと。初心なこと。こゝは(二)。

【鐵】クロガネ　鐵の古稱。

【大文字】ダイモンジ　(一)大きなかたちの文字。(二)大といふ文字。(三)偉大な文章。こゝは(三)。

二　解釋

1　主題

古文學に描かれた日本武尊及び須佐之男命の高天の原入を待ち受けられる天照大御神に現れてゐる大和民族の個有性。

2　構想

(1)　古文學としての主要作品。(初―一五六ノ八)

(2)　記紀歌謠に現れた日本武尊と國民性。(一五六ノ九―一五九ノ五)

(3)　古事記に描かれてゐる須佐之男命が高天の原に上られた條と國民性。(一五九ノ六―終)

一六　大和民族の固有性

3　敍述

〔奈良朝以前のおもなる文學は、古事記・日本書紀の中にある百八十餘首の歌と、延喜式の中にある祝詞とであります。」――奈良朝以前の文學は、こゝに揭げられたものに限られてゐる譯ではない。わけても古事記に含まれてゐる神話・傳說には、一定の音律と動作とを伴なつて傳誦せられ來つた語物ではなからうかと推定せられるものが見出される。そして奈良以前の文字的記載を有しなかつた時代の口誦文學を、祈る文學、謠ふ文學、語る文學といふ三類に系統づける學者もある。しかし「おもなる文學」といへば、記紀歌謠と祝詞とをあげることが適切であることはいふまでもない。かく立論の材料の範圍を限定して論旨の徹底を期する所に、作者の作者らしさが窺はれる。

〔祝詞は神に祈る詞であるが、其の中で最も文學的價値のあるのは、大祓詞と祈年祭とでありませう。」――奈良朝以前の文學に限定を與へた作者が、祝詞の中から大祓の詞と祈年祭の祝詞とを文學的價値ある作品として指摘してゐることは何人も異論のない所であらう。作者はかういふ何人も異論を插む餘地のないやうな確實な論據から問題を發展させて行かうとしてゐる。

〔熟すれば矢も楯もたまらぬ御氣象でありますが、……お驚れにな

る間際に、健かな人達は遊べよ樂しめよと勸められる。」――剛强の一面に順從を、武勇の一面に優美を、闘爭の一面に平和をといふ如く、一見矛盾に見える性質を一人格の上に具へて居られる偉大さが見出されてゐる。

〔此のいろ〳〵た積極的性質の面白く調和した趣、實に愉快な御性格ではありますまいか。」――矛盾に見える性格を所有せられる大いさの上に、それが調和を得てゐるといふ所に、一層の奥床しさが感じられる。

〔熊樫に白鳥、私は此の二つが大和民族の堅實なる性質と清潔・優美を愛する性質、足許を固める著實性と高きに憧れる向上心とを表す標章として實に相應はしいものと思ひ、而してこれが日本武尊といふ上代の代表的英雄に繫がつて居る事を非常に面白く思ひます。」――精華に插したものが熊樫である。それが當時の人々の愛重の對象であつたことはいふまでもない。そしてさういふものの愛重にも、國民性の反映が認められる。又日本武尊が薨後白鳥となつて天翔られたといふ。しかもそれは「恆は虛よりも翔り行かむと念ひつるを」といはれた日本武尊の薨後である。白鳥が日本武尊の徇憧憬の結晶であるならば、それは又わが國民性の象徵でもなくてはならない。

〔山川悉に動み、國土皆震りき。」――劇的な場面の展開されようとする前奏曲としての力强い敍述は剛健な須佐之男命を生かす大文字である。

〔堅庭は向股に踏みなづみ、沫雪なす蹈散かして、いつの男建び踏み建びて、」――天照大御神の御稜威がよく眼前に浮かぶやうに、生々と描かれたものである。そしてこれを語る上代人の氣魂の逼しさにも打たれざるを得ぬ。

〔何故上り來ませる」――「花のやうな」柔和な美を備へ給ふ天照大御神のこの御一語には、「鐵のやうな」大丈夫の面影が浮かぶ。

〔今土から掘り出したやうなうぶな趣と、鐵のやうな强い力と、花のやうな優しい美しさとが微妙に調和して居るではありませんか。」――古文學の美はたしかにこゝに存する。「うぶな趣」と「力」と「美」との調和は後代文化からは得ることは出來がたい。そこに古文學の永遠の價値がある。

三　批評

大和民族の固有性を古代の文學作品を主材として跡つけた所に本篇の特色がある。殊に作者は作品の鑑賞にすぐれた文學史家であり、古代文學、わけても歌謠に深い關心と研究とを有せられる學者であるところに、引例の的確さと、敍述の巧みさとが見出される。

三　備考

一　指導の問題

（一）「哲人の養成」「淨火」「人間ゲーテ」の話課に於て西歐文化の中核をなす思想・文藝の主體的なものを學習させた後に、我が國民固有の性格を理解せしむることは重要な問題でなければならない。又西洋史に依つて已に西歐文化の輪郭を把握することの出來た高學年の生徒にとつて、これらの教材の學習は自然の要求として日本文化の探究に向かはしめ、進んではその比較考覈によつて固有性を確認したいと求めるであらう。その萌芽を培ひ育てる一資料たらしめたい。隨つて立論の材料となつてゐる古文學を、假令斷片であつても十分に味讀させ、理解させることが肝要と思ふ。そしてそれに基礎づけられ方向づけられた作者の考察を、出來るだけ、その根基から理解させなくてはならないと思ふ。

（二）生徒の學習に於て、本課の主題は比較的容易に見出し得るであらうが、構想は稍困難を覺えしめるかも知れない。本課はもと「古文學に見えた祖先の面影」と「古事記の趣味」の二章から成るものを一文にしたものであるから、第一段落の概觀の内容からいへば、第三段落では祝詞の一つを對象とすれば適切であるのに、古事記の一節が選ばれてゐるといふ如き不整合を來してゐる。しかしそれは形式上の問題であつて、祖先の面影を如實に描き、國民の固有性を指摘する上には、古事記のこの條の方が一層適切で有效である所から、形の整合よりも主眼點の確立と闡明とを期したものと思はれる。原文では章を別にしたから、形の不整合もないのであるが、その章末に前章の題目を纏めるやうな結語があるのと、内容がこの題下に是非讀ませ理解させて置きたいものである爲に、一課として採擇したものである。隨つて第一段落を古文學の概觀として獨立させ、第二段落を記紀歌謠に描かれた日本武尊とし、第三段落を古事記に傳へられた一場景として讀み、その三段落を貫ぬくものが國民の固有性の示現であると解すべきであらう。つまり第一段を後の二段の總序ととらず、古文學概觀と見ることが適切であると思ふ。

敍述については、古文學の概觀、引用箇處の理解を十分にさせた上に、そこに祖先の面影を見出し、國民性を跡づけてゐる方法過程を明確に辿らせることが肝要と思はれる。そしてやがては、言語・文學に卽して日本的なるものを把握させ、自覺させる方法の一端をも會得させたいものと思ふ。

二　參考資料

本課の前に當る部分を左に引用する。

一　誇へたやうな文學史

日本文學史の御話を始める前に、日本の文學の歴史は、世界の大舞臺に出しても決して引けを取るものではない、少なくとも世界の最も優れた文學史の五本の指の一本に數へられるものだといふことを記憶して置いて戴きたい。

日本の文學は千二百餘年の間、連綿たる切れ目なしの發達を遂げました。そして不思議な事には、各時代の文學が日本の民族性のいろいろな方面を順繰りに描き出だして居るやうに見えます。更に不思議で有難いのは、各時代に於ける國民生活の興味の中心、各時代に於ける國民が理想として其のために生き、其のために死んだ生活が、それ〴〵の時代の傑作の中に遺憾なく立派に描かれて居ることであります。吾等は我が歴代の文學に於いて、日本の國民性はどんなものか、その國民性の各〻がどれほどに發達せしめられたかを知ることが出來ます。日本の文學史は實に誇へたやうに、豫定の計畫によつて組み立てたやうに出來て居ります。

二　代々の文學の概觀

まづ大昔から奈良朝一ぱいの文學は、國民の備へたもろ〳〵の性質趣味を其のまゝ素直に歌ひ出したやうなものでありました。此の時代の國民の性情はまだ偏頗な發達をして居りません。彼等には優しい性質も、雄々しい性質も、おどけた性質も、武を重んずる性質も、文を重んずる性質も、精神を重んずる性質も、肉體を重んずる性質も、仲よく調和して存在して居りました。從つて此の時代の文學には、彼等の直情がそのまゝ言ひ表はされて、優美な事もあり、莊嚴な事もあり、滑稽な事もあり、荒つぽい表はし方もあり、細かい表はし方もあり、氣高い精神的行動の現はされたのもあり、いかがはしい肉情のむき出しに歌はれたのもあります。但し、概して云へば、明きを愛し、清きを愛し、直きを愛する國民性のうぶな形を取つて素直に現はれた所が、此の期の文學に於ける第一の味はひどころで、『古事記』『日本紀』の中にある古歌を始めとして、祝詞や宣命や『古事記』や『萬葉集』など、一つとして此の趣味の現はれて居らぬものはありません。

ところが一轉して平安朝に入ると、國民の諸性情の中、優美なる方面のみが、不具的の發達をするやうになりました。太古から奈良朝までは、謂はば國民が修業中の普通教育時代で、それが平安朝といふ專門學研究の第一期に於いて「優美」といふ一科を選んで、其の研究、實習、色讀、體感に、思ひきり骨を折つたとでも云ひませうか。とにかく趣味の上からいふと、平安朝は優美といふ方面で、國民の性情がどれほどまで發達し得るかを試した時代であります。菅原道眞、在原業平、小野小町、紀貫之、紫式部、清少納言、古今集、源氏物語、枕の草子といふやうな人名、書名が、此の時代を代表して後世に仰がれて居ることを考へても、此の時代の特色が解ります。

私は曾て此の時代の相を譬へて「こゝに聰明にして美を愛する一團の人間（公卿、大宮人）があつて、國民中の最も高い階級に位し、其の國最高の教育を受け、其の國特殊の文化の成り立ちかけた時に生まれ出でたと假定せよ。此の時國民の中の他の一團が彼等を保護して、「衣食はもとより、政事、軍事の實務に至るまで、うるさい事は一切吾々が引き受けるから、御心配に及びません。唯だ〳〵優美な風流の道に心をひそめて、樂しく美しく世を送りなさい。」と云つて、山水の明媚なる一廓の土地（京都）を其の遊樂の場所に當てがつたとせよ。かくして彼等は生活の苦しみを知らず、事務の面倒を知らず、戰爭の慘しさを知らず、感情文藝の世界にほしいまゝに遊樂して二百年、三百年を過ごしたとせよ。其の結果、一代の風潮が優美本位、感情本位、文藝本位になるのは見易き道理である。從つて其の弊が流れて文弱になり、奢侈になり、淫靡になり、婦女子が重んぜられるやうになつて、腐敗を極むべきことは爭はれぬ自然の徑路である。平安朝の宮廷生活、公卿生活はまさしく此の如きものであつた。」と云つたことがあります。此の時代の大宮人は、世に人間らしき人間は雲の上の吾等ばかりと思ひ上がつて居たので、人民は無論の事、一臂手一投足の勞で彼等を擲り飛ばし、蹴倒すべき實力を有つて居た武人さへも、之れを崇め讃んでペコ〳〵して居りました。而して當時の人がすべて尊貴無上と思つて居た此の大宮人の生活は、美しく『源氏物語』やその他の文學に描き出だされたのであります。

これが源平時代を經て鎌倉時代になると、急轉して剛健質樸を貴ぶ武力本位の世の中となりました。女の世界は男の世界となり、筋の世界は劍の世界となり、衣冠束帶の世界は甲冑、物の具の世界となり、感情の世界は義理の世界となりました。源氏の君の美しき姿を寫して「虎狼だに泣きぬべし」と云つた情の世の中は「日本無雙の弓取」と稱せらるゝを無上の榮譽とする力の世の中となりました。優美趣味、女趣味の研究實行を極端まで仕つくしたものが、今度は剛强趣味、男趣味の研究實行を極端まで仕盡くさうといふのが、此の時代の意氣であります。此の時代の思潮に促されて鎌西八郎、惡源太義平の徒が雄豪の表面に躍り出して來ました。なよ〳〵

とした女の中から巴御前が出れば、寂滅爲樂の專門家、泣き蟲、泣かせ蟲の骨偶の中から辨慶、海賊、一來法師の如き、骨衣を端折つて長刀を手ぼさむ豪傑骨が飛び出して來ました。武家、武力を本位とする世の中は、軍記の作者をして「天皇御謀叛」といふ新熟語を發明せしめ、平安朝趣味なる『增鏡』の著者をして北條氏が京都から請ひ招いた惟康親王を追ひかへした事に對して「將軍都へ流され給ふ」といふ不思議な敍述をなさしめました。此の時代に於いて人間らしい人間、生まれ甲斐のある人間は唯だ武人のみでありました。武人自らも昂然として我れこそ國民の精華であると思へば、百姓町人はもとより公卿殿上人も目をそばだてて武人を恐れ敬ひました。此の武人の生活、心意氣、その平安朝文明に取つて代はる慘憺たる苦心などを活けるが如く寫したものが『平家物語』其の他の軍記物であります。〔中略〕

鎌倉時代に次いで、平安朝の優美趣味と、鎌倉時代の剛健趣味との調和を試みたのが室町時代で、其の趣味と其趣味に生活した當時の武人の心意氣とを歌つたものが謡曲といふ文學であります。其の後德川時代に入り、元祿時代になつて、王朝以來久しく抑壓された平民殊に町人が非常な勢を以て頭を擡げ出し、而して新鮮潑剌の元氣を以て、平安朝式の感情生活をほしいまゝにするやうになりました。かくして濃艶な、寛濶な、豪奢な、大びらに肉の歡樂をほしいままにした元祿時代が現はれ、武士大名より將軍に至るまで、殆んど、此の思潮の侵略を蒙らぬはなく、當時の政治家はいづれも大骨を折つて之れを喰ひ止めようとしたが能はなかつた。此の元祿思潮を活き活きと寫したものが、井原西鶴の浮世草子と近松門左衞門の淨瑠璃であります。其の後文化文政の頃に至り、幕府の政治家等の骨折により、元祿思潮の反動として儒教、武士道を本尊とした思想が盛んに行はれた。此の時代の理想を描いたものが曲亭馬琴の『八犬傳』『弓張月』を始めとして謂はゆる勸善懲惡的の小說であります。

日本の文學はざつとこんな具合に進んで來ましたが、かうして見ると、我が國民は如何にも誂へたやうに、片端から自分の具有する各性質の發展を試み、而して各性質の此の上なく發展した盛りの面影が當代第一の文學に跡を留めて行つたやうに見えます。此の國民性の發展した、變化あり而も歸趨ある趣、その文學に現はれた具合、是等を靜かに味はつて見ると、實に吉野、初瀨、松島、耶馬溪の景色にも、山海の珍味にも、王侯の富にも、天にも地にも換へられぬやうな心地がします。

一七　彫刻と自然

一　解題

一　本文

高村光太郎の譯に成る「ロダンの言葉」中の、「ロダン手記」から拔萃した。（ロダンの言葉　大正五年十二月、阿蘭陀書房發行）

「ロダンの言葉」は、ロダン自身の書いたものとその談話の筆錄とを譯集したもので、後叢文閣の發行に移された。又、大正九年に同じ譯者の「續ロダンの言葉」が叢文閣から出版せられた。

二　作者

フランソア・オーギュスト・ルネ・ロダン（François Auguste René Rodin）。西曆一八四〇年十一月フランスのパリに生まれた。幼時ボーヴェー（フランス北部の都會）の寄宿學校に送られてそこで成長し、十四歲の時父母の許に歸つて裝飾技藝學校の素描科に學び、更に官立の美術學校を志望したが、三回とも試驗に失敗して志を遂せず、自活の爲家屋裝飾の仕事に從つた。一八六四年から當時彫刻の大家といはれたカリエー・ベルーズの助手となり、翌年始めて「鼻かけの人」をサロンに送つたが落選した。普佛戰爭には國民軍の伍長として籠城、七一年にはブリュッセルに移り居ること數年、ムニエ等と知り合ひ、多くの仕事をした。七五年にはイタリヤに旅行してミケランジェロやドナテルロ等の作品に傾倒し、再びブリュッセルに落著き、七七年「黃銅時代」と稱する等身像を完成、サロンに送つたが、人間の實際の肉體から直接モデリングをとつたのではないかといふ嫌疑を受けて、物議を醸した。同年パリに歸り、再びカリエー・ベルーズの助手としてセーヴルの陶器工場に勤め、八〇年「洗禮者ヨハネ」をサロンに出品して受賞、政府の委囑を受けて「地獄の門」の制作に著手した。門はダンテの「神曲」から構想を得た大群像を以て飾られ、上部に「影」及び「考へる人」の二彫像を置いた。「ウゴリーヌ」「接吻」「アダム」「イヴ」等はこの作の副産物である。八八年には印象派の畫家モネーと共同展覽會を催し、八九年以後には「カレーの市民たち」「バルザック」「ヴィクトール・ユゴー」その他の

大規模な作品を制作したが、それ等に就いては屢〻是非の議論が闘はされ、九八年のサロンに出品した「バルザック」は、傳習的な記念像としての表現を無視した爲、依頼者の不滿と憤慨とを買つた。九四年以後はパリの郊外ムードンに住まつた。一九〇〇年パリに開かれた萬國博覧會に出品した凡そ百七十點の作品が人氣を呼んだ頃から、その聲價が一般的に確立し、晩年は國寳的存在を以て目せられた。一九一七年十一月歿、年七十七。

近代彫刻の中心的作家で、その強烈な情熱を以て永年のアカデミズムを打破し、彫刻をして生命の眞の象徴たらしめた。その努力は、主として像の表面に於ける光の效果を利用して、彫刻に繪畫的筆觸を與へることにあつた。又、中世彫刻の讃美者で、著書に「フランスのカセドラル」(Les Cathédrales de France)がある。ムードンのアトリエ及びパリの本邸は國家に寄附され、後者はロダン美術館として公開せられてゐる。

二　教材としての研究

一　註解

【彫刻】　テウコタ　造型藝術の一。對象物の形態を靜止的立體的に表現する藝術。その目的とするところは立體的造型の模倣に依る立體的形象の實在的な美に存するが、單に實在的な美を目標とするにとゞまらず、實人生の實在的の形象を假り、作者の個性を通して象徴的理想美を發揮せしめるところにその本質がある。

高村光太郎は、明治十六年三月、明治彫刻界の巨匠高村光雲の子として東京市下谷區西町に生まれた。開成中學校を歴て、三十五年東京美術學校彫塑科卒業。又、與謝野寛の新詩社に入つて短歌を學んだ。三十九年から四十三年まで米・英・佛等に遊び、ロダンに私淑し、歸朝後は彫刻家・畫家として立つ傍ら、「スバル」「朱欒」「白樺」等に詩作を發表、現在は主として彫刻に專念してゐる。

詩集に「道程」及び「現代詩人全集」第九卷に收められてゐるものがあり、譯詩には「ロダンの言葉」「續ロダンの言葉」の外ヴェルハーレンの譯詩集「明るい詩」等がある。

三　採擇の趣旨

前課・前々課が文學又は言葉に見出される日本的なるものであつた後を承け、本課には、フランスが生んだ世界的彫刻家ロダンの言葉を掲げ、やがて、世界に於ける日本的なるものの意義を明らかにすることに資しようとした。文化的教材である。

形式上からは丸彫と浮彫の二形式に分かたれる。丸彫は對象をそれ自身纏つた一體として立體的に表現するものをいひ、その中、人物を表現したものを彫像、二人以上の人物を集合したものを群像と稱する。又表現される部分により全身像・半身像・胸像・頭像・トルソ(頭部のみを表現したもの)等に分かち、姿勢によつて立像・倚像(腰かけた人物を表現したもの)・坐像・臥像等の別が生ずる。他に等身像・骨像等がある。浮彫はある平面に於ける凹凸の關係によつて對象を表現するもので、高浮彫(彫刻の肉の高いもの)・薄肉彫(彫刻の肉の高いもの)・平肉彫(同一平面に彫したもの)等がある。その他社寺建築・記念的建造物等にみられる、建築物に直接附加された彫刻を建築裝飾彫刻と稱し、又市街地の廣場・公園・墓地・街路・庭園等に建築物又はこれに類するものを背景として、環境と綜合的に竝在する彫刻を裝飾彫刻といふ(噴水盤・水盤・建築的壁飾等、一般に或目的を伴有したもの)。材料としては木材・石材・粘土・金屬・石膏・漆喰・貝殻・象牙・角・骨・蠟・硝子・陶磁・乾漆等が古くから用ゐられてゐる。

【自然】　シゼン　原語 Nature(佛)はギリシヤ語の Physis より出で、本來、人若しくは物の固有の性或は本質を意味したが、次第にかゝる本質の持つと考へられてゐた生命の原理又は生産力をも表すやうになり、他方には固有の性の意から、人爲に對し、非人爲の意に使用されるに至つた。この二つの意味を基として語義の上に種々の變遷が見られるが、こゝは、「ロダン手記」に「自然とは天と地とである」(フランシスの自然)「自然は一切の美の源ではないか。自然は唯一の創造者ではないか」(藝術と自然)と見えてゐる如く、人間理想の加工作用を受けざる宇宙の森羅萬象をさし、しかもそれが生命の力に滿ち、一切の美の根源となる意に於て用ゐてある。

ロダンの藝術的生涯はひたすらな自然隨順の生涯であつたといへる。彼が如何に自然に深い關心を有したかは「藝術のみ幸福を與へる。そして私が藝術と呼ぶのは自然の研究である。解剖の精神を通しての自然との不斷の親交である」(ロダン手記「藝術と自然」)「自然」をして君達の唯一の神たらしめよ。彼に絶對の信を持て。彼が決して醜でない事を確信せよ。そして君達の野心を制して彼に忠實であれ」(ロダン手記「名作藝術家達に」)等の言葉によつても知られる。

【會得】　エトク　習修し覺ること。覺えこむこと。修得。了解。

藝術に精進する者に缺くべからざるものとしてロダンは到るところにこの語を用ゐ、且讃歎してゐる。「ロダン手記」の「ゼヌス」の條にも次のやうにある。

諸君の生命を打ち込んで、辛抱づよく、熱心に、生命を會得しようとせよ。何といふ利得だ、もし諸君が、本當に、會得す

るに至つたら！　諸君は永久に喜の世界の中に居るだらう。會得する事。見る事。――眞に見る事！　無くては叶はぬ努力の前で、避け難い修業期の前で、いかに其が困難で又いかに其が長からうとも、後込する者があるだらうか。若し會得する事の幸福が何であるかを思つたら！

會得する事！　其は死なない事だ！　私にとつて、古代の傑作は私の思出の中で私の若年頃のあらゆる幸福と入りまざる。

【雲の構造】　クモのコウザウ　雲の形を構成的にいつたもの。雲の姿。

【觀察】　クワンサツ　ある現象を自然的生起のまゝに知覺すること。但し漫然と知覺するのでなく、豫め一定の目的を定め、これに從つて現象のある一定の點又は側面を選擇し、これを注意して知覺することをいふ。

【工場】　コウバ　こゝは、畫家や彫刻家の作品を製作する仕事場、卽ちアトリエ。

「アトリエ」(atelier(佛))は、一般には、作業室・工作室の義であるが、狹義には、美術家が作品を制作する爲に特に設計された仕事部屋の意で、畫家の畫室、彫刻家・工藝家の工房、轉じて寫眞撮影場等をもいふ。普通八乃至二十坪のやゝ長方形の部屋で、天井を高くし、又常に一定の光線を採る爲に、陽の射さない北側に主要な大窓・天窓を設ける。

【モデル】　modèle(佛), model(英)　型。廣義には藝術家が見又は經驗する實際現實の對象のすべてをいふが、普通には畫家・彫刻家が人體の研究をする時に使ふ生きた人間をさす。こゝは後者。

藝術上のモデルの意義は、制作家が現實の再現直寫の準據として作品に表現すべきものでなく、制作家の精神的事實、內的表現形象が正しく純粹な客觀的表出に達する爲の手段である。

【自分の制作の中に置かう】　自分の創作活動の中に、隨つて作品の中に生かさう、といふほどの意。

〔制作〕　セイサク　こゝは、藝術作品を創作すること。

【自然は決してやり損はない。自然はいつでも傑作を作る】　自然現象は、すべてそのまゝが完全であり、價値の實現である、といふほどの意。

〔傑作〕　ケッサク　詩歌・文章・著作物・制作物のすぐれてよく出來たもの。名作。ロダンは「ロダン手記」の「中世期藝術への入門――原則」の條で次の如くいつてゐる。

「どうして」傑作が傑作であるか。私は知つてゐる。又知つて居る事を實に喜ぶ！　其は偉大な魂が偉大な魂であるのと的確に同じだ。其は人や藝術家が自分相應に行ふ思念と感情との表現に於て「無くてならぬ」ものまで押し上がる處から來る。傑作は、あらゆる必要から、極く單純なもので、繰返して言ふが唯本質のみを含んでゐるものである。

【何につけても學校だ】　何につけても、學習すべきところだ、といふほどの意。

【天氣】　テンキ　(一)天空の狀態。主として晴曇・雨雪についていふが、更に風向・風力・乾濕・雲量・雲行等をも含む氣象狀態をさすことがある。天候。空模樣。そらあひ。(二)天氣のよいこと。晴天。晴空。こゝは(一)。

【判斷】　ハンダン　(一)眞僞・善惡・美醜・適否等を考へ定めること。判定。(二)形式論理的には、概念を綜合し分析する作用とされるが、その心理的性質からは、寧ろ思惟の最も根本的なもので、概念の根柢にも判斷が働いてゐると考へられる。その他、この語は哲學的に通俗的に種々の意味に用ゐられる。こゝは(一)。

【讚歎】　サンタン　(一)深く感じてほめること。感歎し賞讚すること。賞歎。歎賞。(二)佛語。偈頌等をとなへて佛の功德を讚揚歌歎すること。さんだん。こゝは(一)。

【藝術に於て、人は何にも創造しない云々】

「ロダン手記」の他の部に「人間は創造し、發明する事が不能だ。彼は素直に、愛らしく、自然に近よる事しか出來ない。もとより、自然が人間の見るに任せて居るところを辛抱づくで人はやつと會得するに至るのだ」とある。

〔藝術〕　ゲイジュツ　(六六頁參照)

「ロダンの言葉」(ポールルーダ記錄)に「――藝術は靜觀です。自然を洞察し、又自然の中の心靈を推測する喜悅です。其の自然の中の心靈が此の心靈を活かしてゐるのです。藝術は萬象の中で明らかに觀じ、又意識を以て照り輝かしつゝ萬象を再現する叡智の歡喜です。藝術こそ人間の最も崇高な使命です。世界を會得しようと力め又其を會得させようと力める思想のはたらきだからです。」「――藝術は又趣味です。藝術家の作成する物體の上にあらはれる彼の心の反映です。家や家具に就いての人間の魂の微笑です。思想の魅力であり、又人間が使ふ一切のものに編み込まれてゐる情緒の魅力です」とある。

〔創造〕　サウザウ　(一)嘗てなかつた全く新しい別箇のものを

はじめて造り出すこと。(二)キリスト教で、神が宇宙・萬物を造ること。こゝは(一)。

【自分自身の氣質に從つて自然を通譯する】　各自の個性を通して自然を表現する、といふほどの意。

〔氣質〕　キシツ　情緒活動の方面から見た人性の素質の差異。普通、多血質(情緒活動の強上)・膽汁質(情緒活動の強上して強きもの)・粘液質(情緒活動の弱くして弱きもの)・憂鬱質(情緒活動の弱くして強きもの)の四種に分かたれる。但し、こゝは個性、といふほどの意に用ゐてある。

〔通譯〕　ツウヤク　(一)互に言語を異にしてその意志を通じ得ない人の應接に當り、兩者の間にあつて、雙方の語を譯して告げること。又、その人。通辯。通詞。通事。(二)飜譯すること。こゝは、解釋し表現すること。

【物が別々であるかのやうに】　物と物との間に何等の統一も調和もなく個々の物が孤立した存在であるかのやうに。

【結集】　ケッシフ　個々のものを一つにまとめること。個々のものに秩序と統一を與へ、まとまりある一體とすること。

【デッサン】　dessin(佛)　「素描」と譯す。洋畫に於て、線・點・明暗等を以て、物の形象を描き出すこと。又、その畫。普通には木炭紙に木炭で描くが、その他鉛筆・チョーク・コンテ・ペン・パステル等を用ゐ、線の美を骨子として明暗・丸味・黒白等の濃淡を表現するもので、洋畫の學習法にあつてはまづ第一に習得させるのを常とする。しかし單に基礎的な程度に止るべきものではなく、眞に畫家の實力を養成するものであるから、常にこの研究を必要とする。又、獨立した繪畫として見ても、優に存在の價値をもつものである。但し、こゝは、彫刻に取掛る前に、豫め彫刻せんとする對稱を描き出すことをいつたのであらう。

「ロダンの言葉」(ポールルクリ)に次の如くある。

藝術に於ける描形(デッサン)は文學に於ける文體のやうたものです。目に立つやうに、出しやばつたり、樣子ぶつたりする文體は惡い。善い文體といふものは其の取扱つてゐる主題や、讀者の注意を呼び寄せる感情だけに熱中して、自分を忘れてゐる文體より外には無い。

自分の描形におめかしをする藝術家だの、自分の文體で賞讃を博さうとする文學者だのは、軍服を着て威張るけれども、戰爭に行くのを厭る兵卒や、光らせる爲めに鋤の刃を年中研いでゐながら、地面へ其を打ち込まない農夫のやうなものです。……實際は美しい文體といふものも無く、美しい描形といふものも無く、美しい色彩といふものもありません。たつた一つの美があるきりです。「眞實」の美が啓示されるだけなのです。

【祕訣】　ヒケツ　事をなすに最も效が多くて、しかも他人に知らせぬ方法。祕密の方法。奥の手。奥義。

【一致の感】　一つにまとまつてゐるといふ感じ。統一の感じ。

【捌き合ふ】　サバきアふ　けぢめを立てあふ。

〔捌く〕　(一)亂れたのを直す。解き分かつ。(二)理非を判斷する。裁判する。(三)商品を賣る。こなす。(四)自由に扱ふ。意の如く處置する。しこなす。

【生命】　セイメイ　こゝは、物事の成立・維持せられる唯一の力。「ロダン手記」の「斷片」に「何を生命と呼ぶか。あらゆる意味から君を激動させるもの、君を突き貫くものの事です」とある。

【形律】　ケイリツ　style(佛)の譯。こゝは、藝術の手法、樣式、の意。

【統一】　トウイツ　(一)一つに統べること。(二)箇々のものを一定の組織的系統の下に整へること。こゝは(二)。

【理想的神來】　リサウテキシンライ　理念としての靈感。啓示のやうにひらめいて來たすばらしい思ひつき。

〔神來〕　inspiration(佛)の譯。「靈感」ともいふ。藝術的創作の内面的一契機として、心的要素が一種の說明すべからざる無意識過程によつて忽焉として美的形象に結成せられる場合を一種の神祕的過程に擬へていふ語。その發現の仕方は、當の藝術そのものの形式、藝術家の素質・習慣・生活樣式、周圍の事情等によつて異なり、創作心理の研究者が蒐集した古來の有名な藝術家に於ける例には種々の場合があるが、要はその過程が說明を超越する點にある。

【興味】　キョウミ　(一)おもしろみ。趣。趣味。(二)我々がある對象によつて無意注意を惹起される如き心的傾向にあるとき、この傾向又はその主觀的方面をいふ。一般に快調を帶びた持續的狀態で、ある場合には現在注意の對象でないものに對しても存在し得る。總べて本能活動を促す刺激となる對象は先天的に、習慣・教養等によつて常に注意せられる對象は後天的に興味を惹起する。こゝは(二)。

【要素】　エウソ　ある物事の成立又は效力等に必要缺くべからざる條件の最も根源的なもの。

【解剖的に分解する】　物事を一つ〳〵の部分や要素に分解する、といふほどの意。

〔解剖〕 カイバウ　(一)生物體の一部又は全部を解き開いて、內部の構造・病源を探究すること。解體。(二)事物の條理を細かに分解して之を研究すること。

【投合】 トウガフ　相合ふこと。互に寄り合つて一體になること。

【息づまつた精神の人工】 停滯した生命の活躍のない精神から來る、自然から切り離されたやうな作爲的な努力。

【圍繞】 キネウ　とりまくこと。かこひめぐること。

【紀律】 キリツ　discipline(佛)の譯。こゝは、根本的にして不可缺なる法則、おきて、原則、の意。

【本寺の圓柱】 本寺建築に用ゐてある圓柱。

〔本寺〕 ホンジ　cathédrale(佛)の譯。基督教の大寺院。殊に、僧正の席を有する中央寺院。「ロダンの言葉」ではランスの本寺に就て多く述べられて居り、こゝもその意味であらう。「ランスの本寺」はフランス、マルヌ州の首府ランス(パリの東北約一六〇粁、ヴェール河の右岸に立ち、穀類の中心地、工業の中心地、人口十一萬三千。)にある。西暦一二四一年の建立で、宏壯美觀を極め、佛國歷代帝王の戴冠式がこゝで擧行された。歐洲大戰に一部破壞されたが、既に略ど復興した。

〔圓柱〕 エンチュウ　一般に斷面圓形の柱をいふ。古來世界各地の建築に用ゐられたが、構造上また意匠表現上特に重要性をもつに至つたのは、古代ギリシヤの建築である。その樣式にはドリヤ式・イオニヤ式・コリント式等種々あるが、いづれも柱礎・柱身・柱頭の三部から成り、各部とも嚴重な規範に據つた。中世以後に於ても各種の建築に使用されてゐる。

【今日の人々が意味する「獨創」とは何か】

「ロダン手記」の「ジュヂト・クラデル筆錄」に左の如くある。

(クレール、彼の作品を讃歎して獨創的だと言ふ。)――あなたは少し間違へてゐます。獨創的では無い。獨創といふものは、一般世人のいふ意味で、偉大な藝術には存在しません。本當の才能に行きつく辛抱の無い藝術家は、眞實を外にして、題目や形の氣まぐれなもの、變なものを探します。それが世人の獨創と稱してゐるものです。しかし其は何にもなりません。

〔獨創〕 original(英・佛)　模倣によらず、自分の個性によつて創造すること。獨特の創造。

【型から離れる事】 dépareiller(佛)　通常、ちぐはぐにする、不揃にする、の意であるが、こゝは普遍的本質的全體的なものを離れた、孤立的偶然的斷片的な、單なる變、偏り、歪みの如きをいふ。

插圖「バルザック」　西暦一八九八年に完成、その年のサロンに出品したもの。

オノレ・ドゥ・バルザック(Honoré de Balzac)は、フランスの小說家。西暦一七九九年五月トゥール(フランスの中央西部の都市)に生まれ、ヴァンドーム(トゥールの北東にある都市)の中學を卒へてパリに出で、三十歲まで數奇な生活を送つた。一八二七年(三十歲)「木蔦蔦」(La Chouans)と題する歷史小說によつて文壇に知られ、爾來不撓の努力を續けて、小說・戲曲・論文等に驚くべき多作振りを示した。一八五〇年八月パリに歿した。近代寫實主義の始祖を以て目され、時に自然派作家の先驅とせられる。その小說は全部一聯の叢書として「人間喜劇」(Comédie humaine)と名づけられ、就中「ウージェニー・グランデ」(Eugénie Grandet)・「ゴーリオ爺さん」(Le Père Goriot)・「絕對の探求」(La recherche de l'absolu)・「從妹マット」(La Cousine Bette)・「從兄ポンス」(Le Cousin Pons)等が名高い。

二　解　釋

〔何處で私は彫刻を會得したか。〕――問題の提起である。その「私」がロダンの如き不世出の天才であるところから讀者の關心は頗が

上にも大になる。

〔森の中で、樹木を見ながら。路の上で、雲の構造を觀察しながら。工場の中で、モデルを研究しながら。〕――問題の「何處で」に答へた三つの場合であるが、「如何に」をも含んだ答解であることが注目せられる。

〔到る處でである。〕――三つの場合を、しかも方法まで含んだそれを列擧した後に、その總收として總括的答解を揭げたのである。何でもない一語であるが、變化と共に千鈞の重味が感じられる。

〔自然から學んだものを、私は自分の制作の中に置かうと努力した。〕――問があり、答があつた後に、一歩その展開を試みた形である。自然そのものの價値的定位である。かくてこの自問自答は、論旨は固より、その表現形體までも整然たるものがある。

〔自然は決してやり損はない。自然はいつでも傑作を作る。〕――「決して」であり「いつでも」である點に注目すべきであらう。これといふのも、自然には試みといふものが全然ないからである。

〔これこそ我々の大きな、唯一の、何につけてもの學校だ。〕――自然の作用に對する價値的定位である。

〔繰返すが、判斷をするなら全體に就いてせねばならぬ。會得するまで待つ忍耐を持ちなさい。〕――ロダンの根本的態度の一つである。「繰返すが」といつてゐる所以である。美は委にある。隨つて、全體に就いての判斷として成立する。それの成立するまで忍耐しなくてはならない所以である。「會得するまで待つ」といふ言葉にも深い含蓄がある。美の享受は、又全體に就いての判斷は、芭蕉がいつたといふやうに「爲る」のではなくて「成る」のであり、又實現であることを暗示してゐる。

〔一切が讚歎す可きものである。我々を傷つけるものでさへも。〕――全體に就いて判斷すれば當にそれにちがひない。部分に就いて判斷し、斷片的に考へる時にのみ害惡があり、醜惡が存するのである。

〔自然に對する反逆は力の無駄づかひである。無知の結果である。そして苦惱に終る。〕――何といふ深い智慧であらうか。これは美に關し、藝術に就いてのことのみではない。眞に關し、科學に就いても、善に關し、道德に就いても、同じことがいへる。むしろ、ロダンがさういふ方面で把握し、自覺した智慧の適用であるらしい。

〔あゝ！「惡い」天氣とは、暗い天氣のことだらう。空が、傾いて落ちかゝる危險な海のやうなことだらう。――實に美しい！〕――最初に問題を提出し、次に問題考察の態度方法を示し、最後に、それを實景として描寫し、歎美してゐる。

〔藝術に於て、人は何にも創造しない！　自分自身の氣質に從つて自然を通譯する。それだけだ！〕――理論の敍述ではない、實感の表出である。そして、ロダン藝術の本質と、彼が齎した開拓がある。

〔物は「此」が「彼」の中に入り込み、互に貫ぬき合ひ、また捌き合ふ。――これが生命だ。〕――物を孤立として見、斷片として眺めてゐる間は、まだ眞相を捉へ得てゐないのである。時間的にも、また空間的にも、一全體を構成してゐるのがその眞相であるといふのである。それにしても、「入り込み」「貫ぬき合ひ」「また捌き合ふ」といふ表現となつた觀照の深さ精しさには驚歎を禁じ得ないものがある。そして、「これが生命だ」の的確さ。この指摘によつて、もう一度全敍述に生々とした血が通つてくる。

〔デッサンに於て、形律こそ統一だといふことを忘れるな。これは學習によつて得られるもので、理想的神來などによるものでない。一言でいへば彫刻は辛抱だ。〕――これ亦ロダンの根本的態度の一である。こゝにも三段の展開が認められる。第一段に問題を提示し、第二段にその方法を省察し、第三段にその本領を道破してある。デッサンに於ける形律が統一だといふことは深い生命の事實である。隨つて、頭や唯の手先だけで出來ることではない。あくなき學習を通して實現し來るものにちがひない。「彫刻は辛抱だ」の一言に無限の意義が含まれてゐる所以である。

〔何處から始める。始は無い。諸君の行き當つた所からおやりなさい。〕――藝術のあらゆる分野の達人がいふところは皆これである。こゝにも藝術の眞實性と、制作の發展性とが語られてゐる。

〔こつ〳〵と一人でする勉强は、人に先づ辛抱を敎へる。辛抱は精力を敎へる。そして精力は永久の若さを與へる。〕――これこそ眞の生活である。この意味に於て、藝術は生活から生まれるといへる。そこに彫刻の、否藝術の倫理が見出される。

〔私は、人間の、規則正しい反復によつて絶えず自己を增大する努力を愛する。この繰返しの運動が即ち職の紀律である。〕――規則正しい反復を我々の祖先は「行」といつた。そして、その「行」によつて可能力を增大し、時には神祕な境地にまで到達した事實を遺してゐる。それを又、職の紀律として見出してゐる慧眼にも驚かされる。實戰に於ても、或は砲彈を以て、或は肉彈を以てする攻擊の反覆が遂に陣地を奪ひ、頑敵を擊退する唯一の方法であるといふ。恐るべき紀律である。しかし、如何なる鐵壁をも破碎し、熔融せずには措かぬ紀律である。そして偉大な國民又は個人にのみ許された紀律である。

〔今日の人々が意味する「獨創」とは何かを知つてゐるか。それは「類から隱れる事」である。〕――寸鐵人を刺すものがある。殊に、ロダンの生存當時の思潮を考へると、一層その感が深い。

〔彫刻に獨創はいらない。生命がいる。〕――ロダンが如何に自然觀照に徹してゐるかを示す有力な文字である。

三　批評

言葉の背景に彼の藝術がある。彼の藝術が彼の言葉を支持してゐる。そこに、千鈞の重みがあり、どうすることも出來ない底力を感じさせられるものがある。しかし、彼の言葉そのものも亦一個の藝

術である。どんなに形は小さくても、取上げてゐる問題は悉く大宇宙に通じ、天地の神髄に徹してゐる。しかも、その表現が發展的有機的主體的であつてロダンその人の氣魄をおかに感じさせるものがある。その意味に於て、彼の言葉は、一つ一つ彼の體驗の結晶であるといつてよい。

三　備　考

一　指導の問題

（一）一應、各章を讀み通すことは、文の特質を概觀するために必要であらう。しかし、各章を獨立し、完結したものとして一章々々讀み、解き、定位してゆくことが學習の本體を成さねばならないであらう。

（二）かういふ類の言葉は一般にさうであるが、わけても、ロダンの言葉はその理解に體驗的基礎を要求するところが多大である。この點に於て、この年齢の生徒には、かなり難解であらうと懸念せられる。思索的內省的な讀みを十分にさせた上に、事例を引用した解說が要せられるであらう。殊に思索の發展に論理の飛躍がある場合の如き、その基底となり、動力となつてゐる體驗の深さを暗示することが肝要と思はれる。

（三）本學年に於ける教材體系上からいへば文學を中心とした他の藝術形體の一としての彫刻に關する考察であつて、卷七の「法隆寺」「狩野芳崖」「日本繪畫の特性」が繪畫に關する考察であり、卷八の「茶の宗匠」「龍安寺の庭」が夫々茶藝術・庭園藝術の考察であるのと相俟つて、一面には彫刻藝術の鑑賞に資し、一面には藝術に於ける日本的なるものと海外的なるものとの共通性及び獨自性を發見させる端緒たらしめたい。

二　參考資料

（一）「ロダンの言葉」の序文中、譯者自身、ロダンの言葉が含蓄する意義に就いて述べてゐる左の一節を引用する。

○私は自身彫刻家として、ロダンの此等の言葉を日本の公衆に紹介する事を大變嬉しく思ふ。どうか一人でも餘計に此を讀んでくれればいい。人世について眞に物を考へる人で此等の言葉をまだ讀まない人があつたら、其人は最も大きい幸福の一つを得損つてゐるのだと思ふ。私自身の今日の生活が如何に多くロダンに負ふ所があるか。今の所私はロダンに影響され過ぎるといふ事を知らない。影響されるだけされようと思ふ。そして此を幸福に思ふ。正當だと思ふ。私はロダンによつて救はれ、ロダンによつて勵まされた。今もさうである。此飜譯とても、一言一句、動悸うつ樣な心の肅敬を以て、殆ど耳に親しく聞いて、是を筆に移しながら、此によつてどの位自分自身を眼覺めしめたか。ロダンの言葉は平明だが、奥へ行けば行く程何處までも私を又其奥へと導いて行く。底の知れない平明。此こそ今私の行かうとしてゐる所だ。私は此の自分の幸福をまだ此等の言葉に接しない人々と共にしたい。ロダンは彫刻家だが、ロダンは常に根本の事を「考へ」てゐるので、其の思想、其の創作はいつでも大きな人間性から湧き出てゐる。決して彫刻家とか、畫家とかに極限されたものでは無い。人類全體（自然が與へた甚大の贈物である。

（二）高村光太郎氏は、「現代の彫刻」（岩波講座「世界文學」）中で、現代彫刻の一つの源流としてのロダンの意義を次の如く述べてゐる。

アウギュスト　ロダン（Auguste Rodin；1840—1917.）の一生涯の爲事をふりかへつてみると、それははるか別の世界に人間界のものとも思はれず化石しかけてゐた數世紀間の彫刻にもう一度命の水を與へて蘇生させ、彫刻をもつと人生に近づけ、生きた人間の間にそれを呼吸させ、あの固い、乾いたやうに見えた、觀念的な白い大理石や黑いブロンズが、やはりボオドレエルやヴルレエヌ等の詩のやうに、われわれ同樣、惱み、喜び、動き、しかもわれわれ自身の持つものよりも更に一層高度な生活を生き、その强い熱氣が逆にわれわれの生活の意味を豐かに、濃くしてくれるものだといふ事を人に悟らせてくれた所に重要な意義がある。ロダンが出て、彫刻はもう骨董や記念物や飾りものでなくなつた。それは丁度ギリシヤ時代に於けるやうな人生との親密關係を取り戻した。人は皆思ひがけないわれわれの肉親を彫刻に見た。よそよそしく冷たかつた彫刻が急に人生の中に火をまいた。彫刻はむしろ繪畫よりも人間に近かつた。人はロダンによつて、彫刻とは啞のやうな、つんぼのやうな、お上品ぶつた、無神經な、あんな唐變木なものでは決してないのだといふ事を實證された。それは毎日の生活に織りこまれ、情慾世界の最も隱密な友とさへなつてくれるものだといふ事を知つて狂喜せずにはゐられなかつた。丁度世界資本主義の爛熟期に世を擧げて倦怠の鬼の虜となつてゐた時、どうして此の天來の珍客を歡迎せずに

居られよう。人は皆此の美食にむしやぶりついた。人はルネサンス以來はじめて彫刻そのものに全身的に昂奮する事が出來た。彫刻精神の長い冬眠はかくして完全に破られたのである。

ロダンによる化石彫刻の人間化は又長い間壓迫されてゐた伊太利勢力からのフランス彫刻の解放を意味し、ゴチック時代にさうであつたやうにまぎれもない自分自身の彫刻をフランスが持つ事の喜を人に與へた。それまで幾世紀間に出たフランス彫刻家は少くなかつたが、そのいづれの者も皆伊太利彫刻の出店に過ぎなかつた。上手も下手もおしなべて唯伊太利のお手本に頼つてゐた。ジャン　グウジョン(Jean Goujon; 1515—72?)を始として、ピエル　ピュジェ(Pierre Puget; 1622—94.)にしろ、ウウドン(Houdon; 1741—1828.)にしろ、近くはリュウド(Rude; 1784—1855)にしろ、もつと近くにはカルポオ(Carpeaux; 1827—75.)にしろ、皆伊太利の變無しには獨りあるきが出來なかつた。何か自分達とは違つた假聲で物をいつてゐた。カルポオが一番伊太利風から脱け出たがつては居たが、どうしても其處から足が洗へなかつた。僅かに動物彫刻家のバリイ(Barye; 1796—1875.)が居て、本當に當人の眼で見た動物を作り、此の老人が曾て青年ロダンの師であつた事もあるのだが、それにしてもまだ伊太利趣味の殘滓がその技巧に一ぱいあつた。昔フランス　ゴチックの石彫家がフランスの本寺に同僚の首を無邪氣に彫りつけたやうな、うぶな、まる裸なフランス彫刻は長い間絶えて無かつた。無かつたも道理、ルネサンス以降フランスの封建社會は上下を通じて唯伊太利文化の地方的模倣に終始してゐたに過ぎなかつたからである。今や資本主義の爛熟期となつてフランスそのものが自分の聲を出しはじめたのである。音樂に於けるドビュッシイ、詩に於けるマラルメ、皆その意味に於いてフランス再發見の聲である。ロダンの彫刻にロダン自身の正直な自然直觀から始まつた。一切の第二思念無き、生理的產出物のやうなものであつた。人は始めて自分の造形的代辯者を此所に得た事を感じた。此が專門家の間に却て多くの敵對者のあつたにも拘らず、ロダンが知識階級の一角からその勢力を浸潤しはじめて、遂に一般的熱病にまで所謂ロダネスタの旋風をまき起した一因である。ロダンはフランス的なるものを特別に追はなかつた。しかし自分自身に忠實である事が卽ちフランス彫刻そのもののゴチック以來の再生であつたのである。

ところで此等、化石的彫刻の人間化、フランス彫刻の再生といふやうな、效果としてのロダンの彫刻の作用の由來する基點は、至極單純な技術上の問題に過ぎない。ロダン自身は唯ひたすらに彫刻實技家として、彫刻を彫刻たらしめるものの探究を追つてゐたに外ならない。それは情緒とか感情とか氣分とかいふものとはおよそ緣の遠い、造形上の全體統一機構としての、面、量(塊)、動勢の重要性、肉づけの彫刻的意義、此の四つの因子の確實な把握であつた。この中に全彫刻が存在した。ロダンは此等の諸法則の實使にあたつて飽くまで自然隨順的な具象性の中に邁進した。此點ではセザンヌが自然の畫面的追究の結果、具象性の解體に及び、遂に立體派、抽象派の理論に暗示を與へた場合とは趣を異にする。ロダンは徹底的に自然に隨順する。隨順せんが爲にそれらの諸法則を自然の理法として自分自身の眼で見つけ出した。彼は自分の彫刻を一切圓具のものとして、どこまでも其を解體しなかつた。一切圓具の精神は、彫刻の形式化に向はない。形式化は抽象性であり、抽象そのものはおよそロダンの精神に反する。彼の全彫刻過程の歸結たる「バルザック」の眞意義はその自然の四因子的解釋の抽象性と、一切圓具の具象性との渾然たる融合のロダン的究極境を示したところにあると見る事が出來る。――因みに一言するが、實技の實際に通じない批評家はかういふ作技を眼前にしてロダンを印象主義的彫刻家であると簡單に考へ勝ちであるが、此は大きな誤である。印象主義的彫刻技法の創建者を以て自ら任じ、その技法をロダンに傳授したといふやうに書はれてゐる巴里在住の伊太利彫刻家メナルド　ロッツ(Meuardo Rozzo)の光線萬能の繪畫的彫刻とロダンの量質感に基く彫刻とを同系列に考へてはならない。――面と、量と、動勢と、肉づけとは素より古來の彫刻家も口にしなくはなかつたが、ロダンは此に新らしい解釋と、その重要性とを積極的に强調し、如何にして彫刻がアカデミックな繰返から脱し得るか、如何にして彫刻が貧寒なでくの坊たらずして、熱氣ある生きものたり得るかの祕密を此等のものの力に歸せしめ、且つその天才ある指頭で驚くべき實證の數々を世に示した。

ロダンは何を措いても彫刻を生かす事にまづかからねばならなかつた。長い間お留守であつたその魂をもう一度石や粘土の中にとりかへさねばならなかつた。彼は其を理論によらずして直接に自然から求めた。自然、生命、そこに彼の精力は集中せられた。他の問題はまたあとの事であつた。事實そのあとの事はブルデル、マイヨルはじめ多くの次代の者がやつた。彼の一生はただそれだけで被はれた。彫刻をしてまづ呼吸せしめた事、彫刻精神をたたき起し、完全に其を獨歩せしめた事、そこに彼の貫意義がある。ただそれだけの事が何と意味ある大事件であつた事か。此の洗禮無しにはその後の彫刻の進展は考へられない。彼の生命把握への渴望は、技術上では殊に肉づけの意重となり、主題上では殊に人間の愛憎世界の表現と

391
540

なつた。時恰もフランス文藝に於けるモウパッサン時代、ゼルレエヌ時代、ゾラ時代である。兩性抱擁、兩性葛藤の構圖は、無間地獄の深淵を前にする已み難い現實として、又その兩性肉體組み立ての理法は宇宙存在機構の理法につながる永遠の表象として、まるで魔術師のシャッポのやうな彼の手から續々と表現されたのである。此の取材取扱の誇張ある一面から、又彼の氣稟から來る文學的主題胎の性質から、彼はロマンチストと目された。實をいふと彼は唯忠實な自然主義的生命主義者であつたのである。もしくは何の主義をも持たない、又は何の主義をも包攝する自然隨順の一生命追求者に過ぎなかつたのである。彼は此等の主題を表現するにあたつて、彼以前のフランス彫刻家の曾て持たなかつた微妙な觸覺を以て、その彫刻を組み立て、面と量と勁勢との決然たる理知の球盤をはじき、更に生きてをののく肉づけに全能力を傾倒した。彼はこの理知の球盤を總じて描形する事と稱した。彼はいふ。「叡知は描形する。肉づけするのは心である。」彼の天與の指頭が觸れるところ、一塊の粘土、一片の石、皆たちどころに生命を持つた。彼は此所に彫刻の奥義を認めた。指一本、ばらばら肢體といへども既に全彫刻である。世人がいふ所の斷片の存在理由を强調した。「美の一片は美の全體である、」と言ふを憚らなかつた。彼のありあまる創作力と過剩なまでの意力とは人の所謂斷片の累積で四邊を埋めた。概して彼は構圖の能力に缺けてゐると批評せられた。しかしそれは能力に缺けてゐるのではなくて、能力の過剩であつた。過剩な構圖力は遂に構圖を破壞する。彼の「地獄の門」は此の厄に會つた犧牲の一つと見なしていい。そこには有り餘り過ぎる構圖と生命との節度無き傾注がある。彼自身此をどうする事も出來なかつた。彼は終生此をもてあまして未完成のまま放棄するの已むなきに至つてゐる。ここには彼の血統にあるロココ趣味まで顏を出す。藝術に於いては、「全量ハ其ノ總テノ部分ノ和ニ等シ」といふ幾何學の公理が適用しない。部分の美の累積が必ずしも全體の美を成さない。ロダンの失敗する時、それは貧寒によらないで、過剩による。此の生命の過多、此の生命へのみの偏向が、漸く反動と省察との氣運を彫刻界に目ざましめた。彫刻上の形式の問題がその鋭い批判として四方から起るに至つたのも至極當然な道理である。現代彫刻のもう一つの源流ヒルデブラントの彼と對蹠的な彫刻と理論との重要性が此處にある。フランス的なるものとドイツ的なるものとの對比といふ以上の意味が彫刻そのものにとつてある事を此處では認めざるを得ない。

終